

特
949

日本
武士道
赤

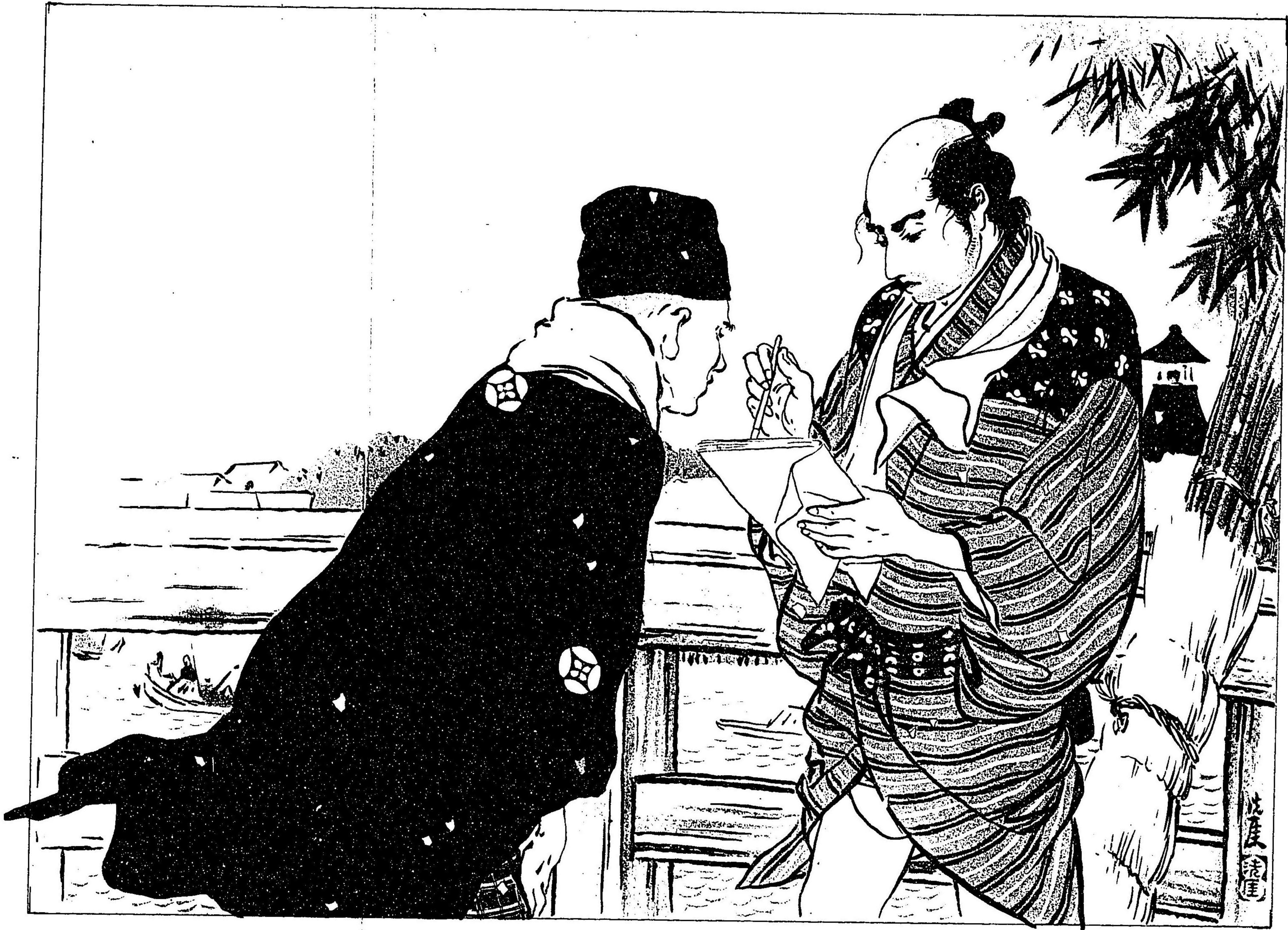
穗
義
士

第四編

44. 9. 2

大 高 源 吾
磯 貝 十 郎 左 衛 門
中 村 勘 助
片 岡 源 五 衛 門
矢 田 五 郎 左 衛 門

原 惣 右 衛 門
吉 田 忠 左 衛 門
松 村 父 子
岡 野 金 右 衛 門
木 村 岡 右 衛 門



日本
武士道 赤穂義士 第四編

大高源吾

眞龍齋貞水講演

大高源吾忠雄といふ方は、淺野家御近習の内で文武兩道に心をこめた方、殊に俳諧などは最も能いたしました、併し若盛りの時、飯田町中坂にをられます、堀内重太郎といふ、有名な劍術の先生があります、其堀内の内に四天王と言いましたのが大高源吾でございます、スルト同門の内に筑後の柳川の城主、立花左近將監の御家來で水沼久太夫といふ人がある、多くある堀内の門人の中で、此水沼と大高とは眞に氣が合せてをる、全で兄弟のやうだ、或日其大高が後れて稽古をしまつて歸ると、組橋のところで水沼久太夫が三人の武士に取巻れて、眞劍勝負に及べと迫られてゐる、此大變と大高が、夫へ出て「水沼何うした」水拙者が誤まつて鞘をあてたるところ、此御人が怒つて何でも眞劍勝負に及べと仰しやる、お謝をしたがお諾に

ならん」大「然やうか、夫では拙者から一つ……武士は相身互ひ、エーお三方へ對して申入る、此は手前の友人、鞘帯をなしたるは此雑踏で居る往來のこと、御怒りもございませうが平に御免を」と七重の膝を八重に折てお謝をするが、先方がナカ／＼酔てゐるから諾ない。甲「イヤ、其許は横合から入ざる仲裁、兩刀を佩びてをるから、尋常の勝負におよべ」大「夫は御無體でござらう」甲「無體とは何だ」と言ながら一刀スラリと抜た。

致方がないから水沼飛退つて同じく引抜き、チャリンと合した、多くの見物が、甲「ソレ初まつた」と騒ぐ、兩人の者が既に抜んとしたから、見兼ねて源吾がバツと一つ拳固で當た、ウンと顛倒かへる、又一人が抜うとする奴を、又當たから倒れる、其うちに兩人の切結んでゐるところへ来て、大「各々方においては何ゆゑあつて眞劍沙汰に及ばれる、失禮ながら主持つ身か、御浪人かは知されど、聊かの怒をもつて身命を賭し、大切の命を抛たば、主人あらば主人へ不忠、親あらば親へ不孝、各々は農工商の上に立つ武士、何がために此大刀を用ゐるといふお心得は常にござらんか、お控えめされ」言れて一方は同行の兩人が倒れたので、少しく氣後れしたところだから、源吾の一言を機會に、甲「お仲裁下さる段忝じけない」と一刀を引く、乃で水沼久太夫も一刀を引て何なく鞘に納めた、爰で源吾は倒れてる兩人に活を入る、兩人は豆

鐵砲を食つた鳩みたいに、目をバチ／＼やつてゐる。大「失禮ながら各々方は、刀を抜べきお心得がござらんか、拔べき時に拔されば武士の道は立ん、此しきの些細なることに鞘を拂ひ、眞劍立合をなされては、不忠不孝に陥ります、以來お氣をつけなされい」多くの見物、今イヤ彼の人は年は若いが豪い」爰で三人は目禮をすると、全で逃るが如く其處を引揚ました。水沼久太夫は喜んで、ホア！大高氏御貴殿がお續き下さらんければ、既に彼等を切かも知ん、人を切ても手前が切れまして、主人を持身であれば御奉公が勤まらん、武士道が缺る、今日貴殿の御仲裁忘れはいたさん」大「然やう仰せられては痛み入る」、水沼久太夫は屋敷に歸つて考へると大高源吾が、彼れ程眞劍立合の中へ入つて顔色を一つ變へず、如何にも立派な者だ、彼ア云者と縁組をしてあげば、イヤといふ時話し相手になる、爰で意を決して、義兄弟の縁を結ばうと御新造にも其話しをして、源吾に其後對面をして其事を語ると、源吾も此上もないこと、喜び、大「仰せに従つて義兄弟のお約束に及ばう」と承知した。處が源吾は年下、久太夫は年上、爰で義兄弟の盃をして久太夫を兄と頼む、其後水沼久太夫といふお方が、立花の藩中で評判が宜いのを嫉んで君公に讒言を構へた者があつて、遂に久太夫は浪人をいたしました、源吾は夫を氣の毒に思つて何から何まで心を盡して世話をし國表へ歸る時は十兩廿兩といふ金を置いて

踊るといふ程にして居りました、久太夫は其後何時まで浪人しても仕方がないと、和泉橋向うの向柳原の角屋敷、伊勢の阿波津、伊賀の上野兩城兼帯、三十五萬石、西三六、三ヶ國の旗頭、藤堂和泉守高陸公の足輕に住込みました、ところが何うも足輕にやア似合しからん、行儀作法と言ひ、水沼久太夫を別物にしてある、で、丁度半年ほど御奉公をしてをりました。ところが一日のこと水沼久太夫、常番で和泉橋通りの角の辻番所を警備てゐた、丁度其辻番所の上が藤堂家のお物見になつてゐる、スルト未下刻(當今の午後三時)頃ほひに、君公が御近臣をお連れおそばしてお物見に入せられて、往來が餘り雑踏するから御覽になつてゐる、其雑踏するのは、上野の兩大師へ奉納物がありまして、内神田の岩本町の講中が青銅のお香爐の大層立派なのを臺に載せ種々其信者の名前前の付た手拭だの木札などを立ました、其臺に日覆をこしらへ、夫をイチマツに貼あけて、是へ造り花を装ほひ、青竹の太いので擔ぎまして、モツ各自に威勢よく来る、夫を見物をしやうといふので多くの人が寄て来る、其今ツイ〜と言つて擔いで来るのをば、君公が御物見にて御覽になつてゐらっしゃると何ういふわけか七八人の武士が、足でも踏れたか鞘でも當られた者があつての事か、去無禮もの」と叫びながら其雑踏の中で刀を抜たから、一同の見物が吃驚して、今人殺し」と逃る、スルト又此方から二三人の武

士が刀を抜くと、遂ひに先の抜いた奴と切合ひが始まつた、辻番所先きのこと捨て置れませんから、水沼久太夫六尺棒を携へて福草履を穿てツカ〜と出て来て、ホ、コレ、當所を何と心得てゐる、藤堂和泉守高陸公のお住居になる、お上屋敷の辻番所先に、白晝真劍の沙汰に及んで、往來を妨げるとは何事なるぞ無禮もの、鎮まれエ」と言た、他の足輕は震へてゐて傍へ寄れない、去何と申す、假令藤堂家の辻番所先でも、武士道が立んによつて真劍を交へる、要ざるところへ足輕の分際で、制止だてするは奇ッ怪なり、近よると手は見せんぞ」此時水沼久太夫、ホ、控へろ、怪しからんことをいふ、爾等醜態をいたしてをるが、如何なる仔細なるかは知されども、真劍を交へるといふは容易ならざること故に此方は取鎮めんといたす、無禮をいふと其分には捨置ん、縛りあげるぞ」里何を小癪な。バアリ一人切込んで来る、體を轉して六尺棒で利腕を打つ、アツといふと真劍を拂ツて向ふ臍を打つ、乙「アツ」といふと俯伏る、一問を打つ、兩眼くらんで打倒れる、其時今一人薙突れたから、尻居に倒れる其腕前を見て、殘の者を取押へて辻番へ引て參りまして、ホ、爾等何處の者か印、が姓名も問ん、全く酒狂の上と

82
125
625

歸るといふ程にして居りました、久太夫は其後何時まで浪人しても仕方がないと、和泉橋向うの向柳原の角屋敷、伊勢の阿波津、伊賀の上野兩城兼帯、三十五萬石、西三ヶ國の旗頭、藤堂和泉守高陸公の足輕に住込みました、ところが何うも足輕にやア似合しからん、行儀作法と言ひ、水沼久太夫を別物にしてある、で、丁度半年ほど御奉公をしてをりました。ところが一日のこと水沼久太夫、常番で和泉橋通りの角の辻番所を警備てゐた、丁度其辻番所の上が藤堂家のお物見になつてゐる、スルト未下刻(當今の午後三時)頃ほひに、君公が御近臣をお連れあそばしてお物見に入せられて、往來が餘り難踏するから御覽になつてゐる、其難踏するのは、上野の兩大師へ奉納物がありまして、内神田の岩本町の講中が青銅のお香爐の大層立派なのを臺に載せ種々其信者の名前の付た手拭だの木札などを立ました、其臺に日覆をこしらへ、夫をイチマツに貼あけて、是へ造り花を装ほひ、青竹の太いので擔ぎまして、モウ各自に威勢よく來る、夫を見物をしやうといふので多くの人が寄て來る、其今ツイ〜と言つて擔いで來るのをば、君公が御物見にて御覽になつてゐらっしゃると何ういふわけか七八人の武士が、足でも踏れたか鞘でも當られた者があつての事か、去無禮もの」と叫びながら其難踏の中で刀を抜たから、一同の見物が吃驚して、今人殺し」と逃る、スルト又此方から二三人の武

士が刀を抜くと、遂ひに先の抜いた奴と切合ひが始まつた、辻番所先きのことで捨て置れませんから、水沼久太夫六尺棒を携へて福草履を穿てツカ〜と出て來て、去コレ、當所を何と心得てをる、藤堂和泉守高陸公のお住居になる、お上屋敷の辻番所先に、白晝眞劍の沙汰に及んで、往來を妨げるとは何事なるぞ無禮もの、鎮まれエ」と言た、他の足輕は震へてゐて傍へ寄れない、去何と申す、假令藤堂家の辻番所先でも、武士道が立んによつて眞劍を交へる、要ざるところへ足輕の分際で、制止だてするは奇ッ怪なり、近よると手は見せんぞ」此時水沼久太夫、去控へろ、怪しからんことをいふ、爾等酌をいたしてゐるが、如何なる仔細なるかは知されども、眞劍を交へるといふは容易ならざること故、

ふと其分には捨置ん、縛りあげるぞ」去何を小癪な
て六尺
て向ふ
打つ、
突れた

して胸のあたりをダウンと
らバラ〜逃出す、乃で一同
の者を取押へて辻番へ引て參りまして、去爾等何處の者か印が姓名も問ん、全く酒狂の上と

存ずるから、今日は免して遣はす、以來は酒を慎んで、今日辻先を騒がしたる段は、此方から御重役へお謝をする、立去れエ」一同飲た酒も醒ちまつた、水沼久太夫の計らひに平身低頭して、四人の者は濡鼠のやうになつて逃た、其始終を君公が見てゐらした、公「當家の足輕に斯る立派な者あることは予は知ん、如何なる者か取」と仰せられる、爰で新規お抱への半年ほど御奉公いたす、水沼久太夫と申す者と申し、重太郎の四天王の一人で、一刀流の仰せ付られる武藝をお尋ねになると、飯田町中坂の重太郎の四天王の一人で、一刀流の劍術免許、鹿島流の棒を心得てゐる、柔術は起倒流、馬は大坪本流、軍學は北條流、乃で算術に委しい、當今なら數學の心得がある、以前は立花左近將監どのに仕へて二百五十石を頂戴してとつた事が相分つた、爰で藤堂家は流石大藩ですから遂に三百石にお取立になつても國表の伊勢へお遣しになつた、御家老の藤堂仁右衛門が、深く信用して、聊か功があつても久太夫を大層賞て君公へ上申をする、尤も役に立のだから、追々出世をして、藤堂家で八百石を頂戴するやうになつた、今では御重役の列に加はつた、殊に御領分の農民に通りが宜く、漸次に身代をつくつて、家來を持って立派な身の上となつてゐる、大高源吾とは遠く放れたから、寒暖には必らず書面をやり取りして交際して居る、然るに元祿十四年淺野家の大變大高源吾は國表へ

参り、御城代大石の指圖に依て、彌よ赤穂から江戸へ出て來る時に、中村勘助と源吾は大變交情が宜いから、敵の擧動を伺がはうといふので、東海道を勢州龜山まで來ました、其時源吾は勘助に對つて、公「倍中村氏、此方他勢の安濃津に居る義兄の水沼久太夫に、一寸別れを告て行きたいが、御同伴下さらんか」中村が考へた、中「夫ア大高氏、お止なすつたら宜らう」公「何故でござる」中「夫は貴殿の義兄だから決して間違はござるまいが、若し先方が才智優れたものなら、我々の下向が亡君の無念を受つぐらゐるを看破られて萬一腹を探られても、何うも大事の前的小事かと心得る、お話しの様子では、水沼久太夫といふ人は、ナカ／＼優れてゐるやうに承知いたす、モウ浪人で立寄らば、暇乞ひ借打ぐらゐる察します、然ある時は萬一の事があつちやア成んから」公「夫は氣遣ひ下さるな、大丈夫でござる、失禮ながら此大高源吾が見込で義兄弟となつた水沼久太夫、萬一の事を察しましても他言の恐れはない、と乃で中村勘助同道にて大高源吾久々で安濃津の水沼久太夫の屋敷へ立寄る。

此方は勢州津の藤堂家の御家中八百石以前に異る水沼久太夫、大高中村の兩人門を入り玄關に立て、公「頼ウむ頼ウむ」公「何うれ……ハッ、此は何誰さまで」公「此方は大高源吾忠雄と申します者、御主人に宜しくお執次下がら」公「ハッ」直に奥へ行たかと思ふと、水沼久太夫自身

に玄關へ出て来て、水「此は〜大高どの……コレ、洗水を進げい」大兄上、此は拙者同藩の中村勘助と申する者」水「然やうござるか中村氏、何卒お上りを願ひたい」久太夫大に喜んで色々款待す、「何は然れ一献参らせん」爰で膳部の用意を申し付けて其處へ出した、見ると膳部の上に鱒が焼て皿に盛てある、源吾と勘助と顔見合した 水「サ、一献参らせん」といふと大高が大兄上、折角の御馳走でござるが、武士たるべき者が忌べき腹切魚、此をお添下さるは其意を得ん、吾儕は兎に角、中村氏へ對して甚はだお氣の毒に存する、兼て御承知の通り、腹切前に鱒を膳部へ添へると申す、此より關東へ参り二君に仕へる我々兩人、忌はしき魚を御膳部へお添下さるとは、御厚意添けないが頂戴はいたさん」水沼久太夫此を聞まして 水「此はしたり、三月十四日殿中松のお廊下において……アノ一件から江戸表へお往でと存する、只今此席は吾儕と御貴殿、誰も居らんによつて此方お話しをいたすが、鱒を膳部へ添たる理由は、各々江戸表へ参り相手吉良どのを打ち、其後ち切腹をなさるは必定」大「ヤ、此は怪しからん話だ、誰が其やうな事をいたします」水沼久太夫、アハ、と打笑ひ 水「飽までお包み下さるとは其意を得ん、義の兄弟になつて居るが、元は他人ゆゑ、此事他言でもいたすと可んといふ、御心配でもござらうが、決して然やうな事はないお話し下され、御城代の大石どの、山鹿流

の軍學、小田宮流の兵法に心得のあるもの、關西に開えたるお方なれば、必らず寄來る大軍を引受け、花々しく戦ひをなされると、世間に専ら風説もござつた、然れども吾儕は、ナカナカ大石どの、然やうなる事をなされまい、屹と城を開かれるであらう、と思ふ間もなく四月二十日に彌よ赤穂退散と聞く、ヤ倅こそ我思ひに違はず、ト尙其先の舉動を伺へば何か山城の山科へ立退れたといふ、ハ、ア、同地は天領、殊に京伏見に近く、東海道に接近してゐる、眞に宜き地を見立られたり、爰において時節を伺がひ、必らずとも主君の御仇打をなさるものと、始終其ことを念慮に留め置たるころ、圖らず今日御貴殿のお入來、江戸表に参り充分に此はなされることと思ふたによつて、右やう膳部の魚は、イザといふ時のために参らしたるなり、最早お隠しあつたところが、致し方がないから有體にお話し下されい」源吾は飽まで白ばくれ 大「夫ア貴殿が勝手な申し分、我々どもは主取仕官をする、大石どのも又山科に永住をなさるお見込」水「夫では大高、全く其許は主取仕官におよぶ、アノ二君に仕へる、フウン……扱々見下果たることだ」爾のやうな奴に對して、最早言葉を交すに及ばぬ、コレ中村どのには御飯を進ろ、此畜生武士には遣に及ばん」スルト大高が、大「然らばお暇をいたす」とソコ〜に玄關のところへ、脚絆草鞋かけ草鞋を穿て這々の體で出た、中村が 虫「大高、だから拙

者が止せと言つたんだ」大ヤ、何うも水沼久太夫の一言、急所を刺してきた時ギクツと言ひ、併しながら祿盗人、畜生武士とは何ぼ何でも甚い、浪人をした彼れが困つてゐる時、十二兩二分といふ金を用立てたこともある、其恩義も忘れて此の方を恥しめるとは、餘り言ひかたが甚い」出夫ア大高氏、引返して其貨をお取なさい」大ヤ、夫ア正可に」出イヤ、何うせ喧嘩をしたんだから、飽まで此方が腹を見せんやうに何うせ畜生武士、祿盗人と言はれたからは夫を取にお引返しなさい」大然やうでござるか、餘り夫は何うも……」中「イヤ其んなことを言てゐる場合でない、先方で彼ア見なすなら、飽まで祿盗人畜生武士になる方が宜い」大「では」引返して大「頼ウむ」中「何うれ」オヤ復來たなと執次は審かる 大「アー御主人に御執次下さい、以前御當家に御奉公の前、神田紺屋町に浪人中裏屋住居をして、食や食すでお居でになつた、其時吾儕が病氣のお世話をして、金を十二兩二分お貸申してある、祿盗人畜生武士であるから、其金をお返し下さいと主人へ言てくれ、今は大層立派な身分だが、以前は然ういふも困んなすつた事もあるので……」と懇と嘔鳴た。

堪りかねて水沼の御新姐、夫へ出て来て、新是は大高氏、何のことでござる」大イヤ、先頃お貸申した拾貳兩貳分「新エーッ」呆れかへつた、大「夫を御催促」新「サア拾貳兩貳分お受取下さ

」大イヤ、長い間のことから、何程か利足を下さい」イヤ此は驚ろいた、新然らば利子を此へ添ました、何卒……」大ハイ、祿盗人畜生武士、然やうな者からお借になつて居つては、却つて御當家身分の汚れてござる、然らば確かにお貸は受取ました」新「御念に及ばん」と御新姐は眞赤になつた、水沼久太夫は呆れ果て、彼は全く墮落をして二君に仕へるに違ひない、見下果た彼の精神、と切齒をした、此方は此ま、一晚城下で泊り、夫から津を出立いたして、龜山から順に江戸表へ泊りを重ねて到着する、爰で大高源吾中村勘助は、南八丁堀に浪宅を構へましたのは、元彼の邊の町人は淺野家へお出入をして居りました、然ういふところから懸意な者がありました、家を持ちにも都合が宜いから、南八丁堀へ家を持って、大高源吾は假に脇屋新助と名乗てをりました、で、毎日姿を變て吉良どの、動靜を伺つて居る、其内彌十二月になる最早大石内藏之助も下向して、十二月十三日は寺評定と號して泉岳寺に集り、爰に打入の手配其相談を遂ましたる時に、大高源吾の脇屋新助は、南八丁堀の家に戻て、明日は仇打の當日だから、今日は何とか姿を變て、松坂町の吉良どの、動靜を伺たい、と斯う考へてをると、表へ、△「竹屋ア、エー竹屋ア」と言て笹の付ました竹を擔いで賣に來たのは、此日が上つ方のお煤拂ひ、町人は勝手に行まするけれど、大名旗本は此日が煤拂ひだ、源吾は頓悟て、

此竹は今日皆買ふに違ひない、大「コレ竹屋」竹へエ、有がたうございます」大「コレ、其方の擔いでゐる竹は残らず買って遣はす」竹「エ、旦那さま、残らずお買下さいます、大層お廣いお住居ですな」大「イヤ文句を言に及ばぬ、何程ぢや」竹「残らず買って下さいますなら貳百で宜しうございます」大「夫から其方の著てゐる衣服も悉皆賣てくれんか」竹「エ、衣服を賣れと仰しやるんですか、此ア驚ろました竹は賣んでございます、衣服を賣た日には裸體でゐなくツちやア成ません」大「ヤ、此方が然ういふ服装をして竹を賣んければ成ん役目を擔任たのだから、其方の服装を悉皆賣てくれ、其代り此裏へ入ッてくれ、衣服を其方へやるから」竹「然やうなら結構でございます」大「夫では金子を貳分遣はすから」竹「へエ、有がたうございます、斯うと知ららモウ二枚ばかり着て来りやア宜うございました」爰で自分の家へ連込で、竹賣の親父に古い衣服を遣た、襦袢と中古の衣服と交換へた上で金を貳分貰つたから、竹賣は大喜び、乃で大高源吾は衣服をスツカリ著換へ、大「何うだ竹屋」竹「貴君、其汚ない服装が能似合ました」大「ハッ、」爰で大高源吾は其竹を擔いで永代橋を打渡りまして、彼處より深川の邊から本所へかゝり、松坂町の吉良どの、ち屋敷の周圍を、竹屋ア〜と呼で一廻りして、打入る時は表門斯うして彼アしてと心中合點いたした源吾、折しも朝から催してゐた雪は烈して降出し、殊に

爰交りにて忽ち積る其雪を、踏分、松坂町から駒留橋、兩國橋の真ん中まで竹を擔いで来ると、前向から蛇の目二重彈きの傘、鼠羅紗の被布を着て、バツチに白足袋、青漆の爪掛のかゝつた足駄、裙を端折たまゝで頭巾を冠り來かゝるところの容子は何う見ても俳諧の宗匠といふやうな風、竹を擔いだ大高源吾が、ハテナと思ひ橋の真ん中右と左りに替さうとすると、其宗匠體の者が其「子葉どのではござらんか」ハッと思つて竹を橋の欄干に立かけて、冠れる手拭を取て、大「此は〜宗匠でござるか」其「何も此は珍らしいお方にお目にかゝつた、貴君は赤穂から江戸へお出になつたとは承たまはつたが、不思議な處でも目にかゝりました、併し今日の御扮装、何といたしたことでござる」大「ヤ、武士たる者が浪人いたし、お葉うち枯すと斯のごとく、實に宗匠に合する顔もなく、恥入た次第でござる」其「ヤ、此雪の中に煤竹を賣るほど御零落なら、何故此其角をお尋ね下さらん、何とか御相談もいたすものを」大「ヤ、宗匠の御厚意添けないが、面目ないから何方へも尋ねいたさん、斯のごとき仕宜でゐる」其「ヤ、レ〜お氣の毒なと」と突然に傘を欄干に立かけ、被布を脱で、自分の著てをりました黒縮緬の全羽織を脱で、其「子葉どの」大「ハッ」其「甚だ失禮ではござるが、餘り御貴殿がお寒さう、此は綿が厚う入ッてゐるから寒さを凌ぐ、何うぞ此をお著下さるやうに」其角が餘り大高の容子が寒さう

だから、思はず羽織を與れました時、大「此は〱御厚意有がたく」押頂いて襦袢の上へ黒縮縮の羽織を着たから、妙な姿が出来あがった。

其角は被布を着て傘を開いて雪を除け、其子葉どの、何か一つ久々のこと、お附合を「大」ハ：「其年の瀬や水の流れと人の身は」と其角がやると、源吾は宗匠の顔をチロリと見て、大「明日待るゝ其寶船」サア其角が分らない、ハテナ、年の瀬や水の流れと人の身は、明日待るゝ其寶船、ハテ合點が行ん、其花も實も斯くなるものか冬木立」大「かねも氷れる別れ路の霜、宗匠眞に御厚意有がたい、お別れを申す」其ア子葉どの、何れ其うちお入來下され」一人は西、其角は東、兩國橋を渡って行く此方は源吾、黒縮縮の全羽織を着た竹賣が通るから、皆な往來の者が振返って見る、氣まりが悪いから酒を一杯飲で、其縮縮の羽織を襦袢の下へ著込で、何處ともなく、源吾は立去る、其角は、横網町の松浦壹岐守さま、當時御隠居、壹岐入道意信軒、此お方さまへ御機嫌伺ひに出て参つた、御近習が案内して、松浦公の御前へ出ます、其此は〱、麗はしき體を拜し御悦に存じます」其オ、其角出たるか、苦しうない近う」其御免下さい近年稀なる雪でございます」其ヤ、眞に結構なものに違ひないが、寒氣が強くてなア」此殿さまが爲された事を、松浦の肉布團といふ、お年を老ても足が冷るので、十七八から二十三

留りの肥満た女子、其新造を大勢お抱えになつて、お休みになる時に皆お傍らへ寄て、お足の方へお寝かしになる、此は決して色情のためには遊ばすのではない、血氣の女の温氣といふものは宛然燃るやうだ、然ういふ通な殿様で、殊に大の茶人であらうしやる、又俳諧は其角宗匠を初め杉風、去來が始終伺がう、中に其角が重にも屋敷へ出ます、其何か面白きとはないか」其エ「早速ながらお上にお謝を致すとがござります」其オ「何ぢや」其實は先頃拜領仰せ付けられました、御當家さまの御定紋の付ましたお羽織でございます」其「フン」其今日若用いたしました、兩國の橋の真ん中まで参りますと、播州赤穂浪士の大高源吾、俳名子葉に出會ました」其オ、然やうか」其「ところが見る影もない身には魚服、破れてをるのを著いたして、此雪の中に煤拂ひの竹を商うてをりました、餘りの零落見るに忍びず、我を忘れて羽織を脱で彼に與へました、只今お屋敷御門前まで來りまして、初めて心づき、ア「飛だことをした、彼れは御當家さまより拜領した御定紋のお羽織、今更取戻すわけにも参らず、早速ながらお謝をいたします」此とき壹岐守さまホロリと落涙を遊ばし、其「昨年三月十四日、殿中松のお廊下にて、主人内匠頭師匠番の吉良へ刃傷いたし、江戸かけての臣下は散々破亂〱、大高源吾ともいふべき者が然やうなりしか」子葉の詠ました句で、兩三度お目に留り、名吟だと被仰つた事もある

ので、右やう御嘆息のお言葉があつた。

其併し私が望みまして附合をいたしました」松夫は又何といふのぢや」其私が、年の瀬や水の流れと人の身は、と申しました、ア、宜いのウ」松源吾は何と申した」其明日待る、其寶船、と附ました、年の瀬や水の流れと人の身は明日待る、其寶船、何うも此其角には合點の行んでございます」壹岐守さま、松ハ、ア、然うか、ウ、ン、ヤ、此は感心、流石は大高子葉ぢや、明日待る、其寶船、フ、ム……」あ一人で御感心あそばし、松此は其角、其方には分らんよ、此は其方には分るまい、合點ゆかぬと申するは道理ぢや、成ほど此は俳諧師、大宗匠、寶齋其角には分るまい、ウ、ン感服いたしました、今日は十三日ぢやな」其御意にございます」松ア、明日待る、其寶船に違ひない、此ア其角に分るまい、斯申す意信軒は武士であるによつて、其儀は能分る、俳諧師宗匠ではヨモ此は分るまい、ア、上手い、ア、子葉は名吟を吐た」サア其角は爾には分るまい、俳諧師では分るまいが、と言れ何ういふ意味と聞のは恥だから、其甚は恐れ入りますが、今日はお暇申します」と早々松浦さまの屋敷を出て、今日は十三日だな、俳諧師では分るまい……今日は十三日明日十四日、十五日十六日十七日十八日十九日二十日、二十一日が大師さまで二十五日が天神さま、ハテ解らない、と途中頻りに考へたが分ら

ない、茅場町の我家へ歸る、△宗匠と歸り」其今日は十三日か」△御尤もさまで」其明日が十四日か、十五十六十七十八十九二十日、二十一日が弘法大師、二十五が天神さま、三十日が諸湖定を受取に来る商人の忙がしい日、明日待る、其寶船、ウ、ン……」ところへ鯉谷杉風が尋ねて来た、松オ、イ兄きはゐるか」其今日は十三日か」松何を兄キ考へて坊主頭を振廻してゐる」其誰だ」松鯉谷杉風だ」其ア、鯉谷か……マア此方へ通んなせエ」松何だ」其何うも分らねエことがある、今日は十三日だ」松何を言てゐる」其其ヤ、實は杉風の前だが今日淺野家の子葉に會た」松夫は珍らしい人に會たな」其處が此の雪の中に竹を賣てゐる」松ウ、ン」其今日は例年の十三日の煤拂ひで、竹を賣てゐるのは皆賣てゐるが、子葉の竹賣といふは珍らしい話した、僅か二年経ないうちに大層零落をしたものだ、餘りのことに氣の毒に感じたから、私が松浦さまで拜領の羽織を與て寒さを凌がした」松夫ア宜いことをした」其乃で思はず一句附け合たが、年の瀬や水の流れと人の身は、と詠たんだ」松成程」其スルト子葉が、明日待る、其寶船と附た、是が何うも己の腹の中で合點が行んだ、他人に羽織を貰つて著るやうに零落をしてゐながら、明日待る、其寶船とは、明日になりヤア美しい衣服でも著るといふ有さまだ、夫から松浦さまへ出て其お話しを申し上ると、松浦の御前が、夫ア俳諧師風情には分るまいと仰

しやる明日は十四日、明後日は十五十六十七十八十九二十日、二十一日が大師さま二十五日が天神さま」杉オイ兄キ、確かりしなくツちやア可ない、何を満らないとを言てななる、成程今聞て見りやア明日待る、其寶船は妙なだア」其訝しからう」杉待よ兄キ、明日が十四日、淺野内匠頭さまが殿中で吉良さまへ御刃傷なすつたのは、去年の三月十四日ぢやアねエか」其然うだ」杉フウソ、事によると兄キ明日またるゝ其たから船、は何か十四日にあるのぢやアねエか」其ア、分つた」杉兄キ何と分つた」其此ア明日またるゝ其たから船だ、夫を先刻は分らなかつた」杉兄キ何う分つた」其事によると杉風、明日の晩が大變なことになる、主君の御命日だから、吉良さまへ打入て警討をするかも知ない、夫だから俳諧師風情の者には分るまい、と松浦の殿さまが仰しやつたんだ、明日首尾よく行ば三途の川、俱誓の船に乗る、其俱誓の船を寶船に言て利したのか、ア、先刻は氣が注なかつた、豪い流石は大高子葉だ、時に杉風、何處へ行んだ」杉マア兄キ、涙を拭なさい、鼻汁と涙と一緒になッてる、此から本所松坂町の本多孫太郎さまの屋敷へ出るんだ、今夜殿さまがお招で運座があるのだ」其何うだ、此其角を連れてくれ」杉夫ア兄キが同道すりやア君公がお喜になる」其ぢやヤ雪が餘まり烈くならぬ内に出かけやう、モウ直に日が没るから」爰で鯉谷杉風が案内で、其角が越前家の附家老

本多孫太郎さま、此は一代が孫太郎で一代が内藏之助一代替のお名前、丁度吉良さまの屋敷、杉風も屋敷へ出まして、其角を同道しました旨を申し上げると、本多さま大層お喜び本寶齋が来たか満足に思ふ」爰でお茶の湯のお料理、其夜は運座、終つて兩人がお暇を告て歸らうとすると、烈しい雪、殊に爰が交つてをる、こゝで本今晚は泊まれ」と仰せられる、彌よ爲ういふ事になりましたから恐れ多いが其夜は本多さまへ御厄介に相成ました、スルト其翌日の十四日が如何にも大雪、乃で本多さまが兩人を御前に召て、本今日は此雪であるから、杉風も其角も余の屋敷に留まつて、歌撰を巻うではないか」其真に有がたい事で、私がお文題を勤めませう」と終日本多さまの屋敷に日を暮しました 其今晚は此方から願ひますが、一晩お長家へお留守下さるやう」其角は胸に一物ありまするによつて、其夜は御用人の眞柄勘兵衛さまのお小屋へ泊つた、丁度此眞柄様のお窓を開れば、吉良さまの御門前が能見える、杉風も、杉兄キ、爾が何か思つてゐるから私も一緒に」と杉風が眞柄さまへ御厄介になつた、杉實に今夜は何かあるに違ひない」と嘶ながら兩人は枕に就た、併し其角は然ういふ譯だから、横にはなつたが眠はしない、頻りに耳を立てゐると、其夜子刻少々前、何となく表がザツ／＼するかと想ふと、頓て本多さまの御門をドン／＼叩く者がある。門番が、誰人ぞござる」六一寸御開門

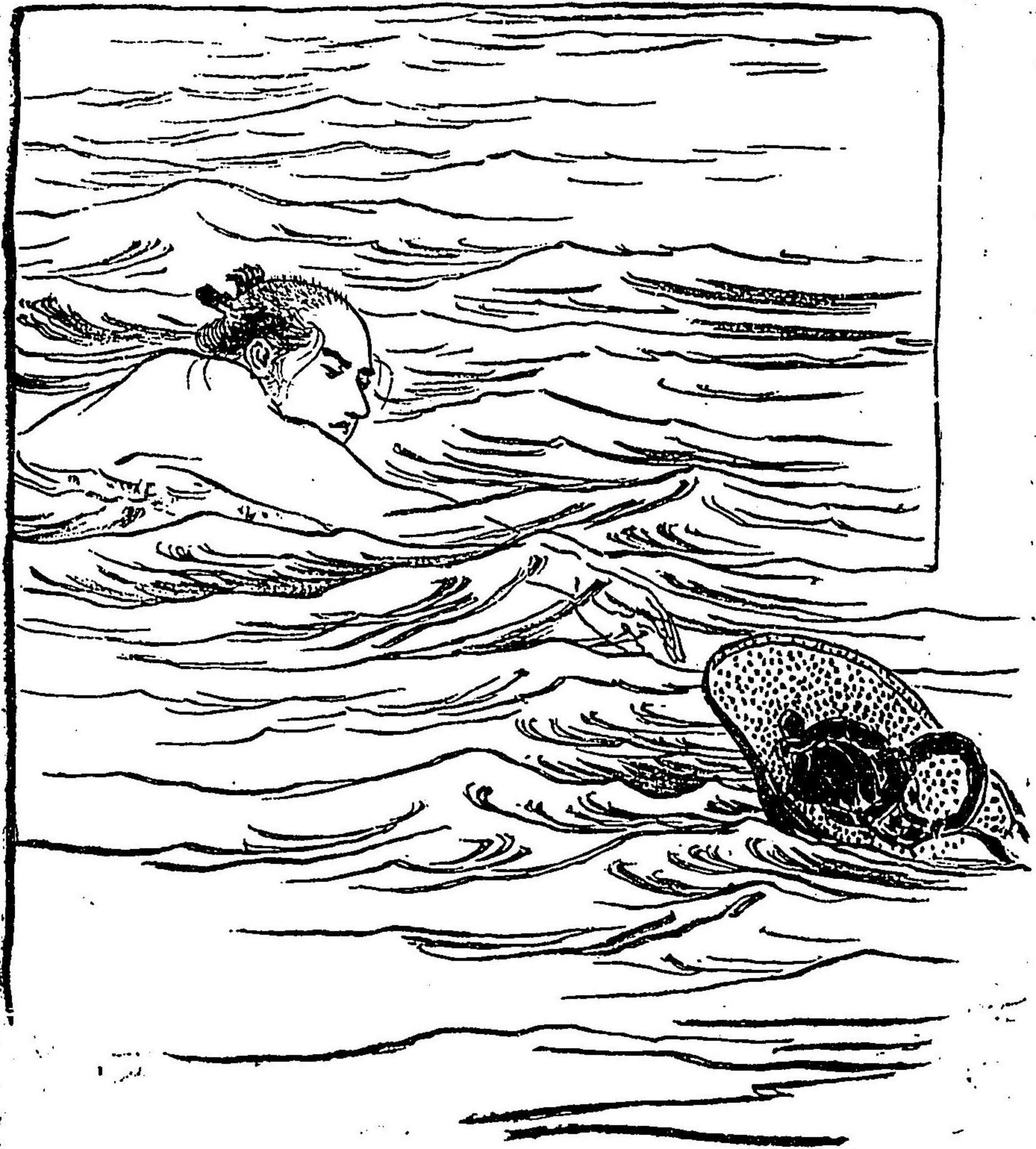
を願ひたい、我々どもは播州赤穂の浪人大高源吾、富森助右衛門の兩人罷り出ましてござる。番ハ、何事でござるか。大今宵御隣家へ、仔細あつて罷り出ましてゐるが、夜中聊かお耳障りもござらうが御別段の事もござるまいから、此段お届をいたす。番「暫時お控へ」と此事を直にお玄關へ通じる、乃でお玄關番からいたして、御家老の眞柄勘兵衛さまへ此事を申しあげ、乃で勘兵衛わざ／＼立出で、勘此は／＼御兩名においては、御念の入たるお届、何事がある。其心得で居るから仔細ござらん、随分ともに御本意をお遂下さい、何かお入用あらば主人は兎に角此勘兵衛御用立をいたさう。本多さまの眞柄勘兵衛と来た日にやア、名代の人でございます。大其の御注意は有がたく存じます、此段御主人へ宜しう」と言つてズツト兩人の者が暇をつげる、トタンにドン／＼、山鹿流の陣太鼓、飛起たのは寶井其角、直表の窓を開ると眞晝のやう、十四日の月は冴わたり、雪に反射して物すごし、其子葉どのの／＼／＼「大ハッ」と振かへつて、大オ、是は其角宗匠。其實に昨日は失禮をいたした、お免し下されい、明日またる、其だから船、アアも勇しい、此世の名残でござる、お手向の句を進ぜる。大此は千萬忝じけない。其月雪の中や命の捨どころ」と其角が吐鳴ました、大ア御名吟有がたうござる。其ア子葉どの、我ものと思へば輕し傘の雪。子葉が振かへつて、大日の恩や忽ち碎く厚

氷」と附まして、大「宗匠御免」トタンにドン／＼と太鼓が鳴る、此夜大高源吾は抜群の功名を現はし望を達して引揚げると直に伊勢の阿濃津にをります。水沼久太夫に委しく書面を認め、其時の手紙の端に

山を裂く力も折れて松の雪

と云つてやる、久太夫も大に感心して流石は自分の義兄弟だと家中へ振れ廻つて喜んだと申します。

大高源吾終



1954

原惣右衛門

原惣右衛門元辰、此仁は後には足輕頭三百石を頂戴する身分となりましたが、淺野家譜代の臣下ではございませぬ、夫が淺野家に仕へるやうになつた事情は、爰に丹波の國の黒井村といふのに、以前赤井悪右衛門の家來にて、其悪右衛門滅亡の後、此黒井村に土著いたして、代々郷士にて姓を杉下と言ひ、現代の當主を平太左衛門政盛入道一風軒といふ、此人は杉下眞影流といふ劍術の有名な達人で、大したもの、惣領を平太郎政吉、是は讃岐の丸龜の城主山崎虎之助どのの家來になつて、次男に平次郎政道、是は播州明石の城主松平左兵衛門守に仕へ、夫から三男平三郎政基、此は父の手許にあつて劍術の修業をいたし、先父の代りも勤まるやうになつた、其杉下平太左衛門について杉下眞影流を學んで同じ村に居りましたのが、郷士原勘兵衛の伴惣太郎といふ、然るに父勘兵衛は惣太郎二十一歳の時に病死した惣太郎は幼少の時から杉下の門に入り杉下眞影流の極意にわたり、馬術に大坪本流、鎗薙刀の心得があつて先武藝一般のことを心得て居ると言て宜いくらゐ、だから太平無事の世とは云へ徒らに郷士百姓で一生を送りたくない主取仕官して一廉の武士となり名を擧げたいと母と相談の上、弟惣次郎に跡の事を

託し諸國遍歴に立出でました。先づ京都大阪を見物し夫れから便船を求めて大阪の川口から、金比羅船と稱する多度津へ参る船に打乗り、多度津から上陸をして象頭山金比羅大権現を拜し段々道を通つて丸龜に参りました、此讃岐の丸龜城に生駒雅樂頭政持、此が寛永十八年に滅亡いたし、其後山崎甲斐守家治、同じく志摩守俊家、同じく虎之助、此虎之助殿の代に此御城下へ来りましたのが原惣太郎、頓て御城下へ入つて土屋彦六といふ宿屋で足を洗ひ湯を濟して御酒は餘り戴かん方であるが、少し氣が鬱とりしたから、御酒を一口申し付まして御酒を飲で居る、スルト隣座敷がゴソ／＼するから、ア客が来たんだな、と思つた、玄何うぞ旦那さま方此方へ「甲ア此處が一番宜い座敷だ、直御酒を持て参れ」玄ハイ、畏まりました「甲直、急いでくれ」玄ハイ、畏まりました「甲毎も繁昌で結構だ」玄有難うございます「此方は原惣太郎一人で御酒を頂いて居る頓て隣室も酒を始め様だ」甲吉田「玄ヤ、宮島、何だ」玄眞に何うも残念のことだ「玄然やう、大澤」大ア「玄如何にも先生にお氣の毒である」大ヤ、何うも致方がない、長いものには捲れるの例ひ「玄本當に残念至極だ、然し其うちに何とか又先生の雪冤も立ことであらう」大夫アモウ無論のことであるが、如何にも残念だなア、定めて御無念でいらつしやるだらう」玄ナニ、夫はな、又何れ御疑ひの晴る御時節もあらうと存じて居る」

大ヤ、夫には相違ないが、然し残念至極だ、マア當時彼のくらゐな達人はないな「玄ヤ、惜い御指南番を失なつた、マア一献やれ」玄ヤ、何うも先生にお別れ申すときの心もちをお察し申すと何となく御酒も味美しく戴けない、然し何うにかして彼奴を打てしまはなければ可んよ」玄無論のことだ彼の先生の御父上といふのは、矢張丹波に御存生でいらつしやるのか「玄然うらしい」玄皆な御兄弟が出来るんださうだ「玄ヤ、夫に違ひない、何しろ杉下眞影流といふ一派をなした先生だ、お父さんは杉下平太左衛門政盛入道一風軒と仰しやるんださうだ」玄何しろ杉下平太左衛門先生を失つてしまへば、今日の指南番大村丈五郎に指南をして貰はねばならぬ、ア一残念／＼、サア／＼一杯やらう、大きなものでやらう「ツイ飲ながら話しをする、夫を次の室で聞てをりましたのが原惣太郎 原ナニ、何うも尊師杉下平太左衛門殿の御息平太郎どの、噂に違ひない、ア一先頃大先生より伺つたる時、我總領は讃岐の丸龜侯に仕へてゐると仰しやつたが、借は今の話しのお人に違ひない、シテ見れば我師匠も同様、何か其話しの模様でみれば容子がありさうだ」乃でボン／＼と手を打ました。

玄ハイ、旦那さま御用でございませうか「原ア、隣の座敷にお泊りの方に、拙者が一寸伺ひたい事があるのだが、帳場へ然う言て此事を執次で貰ひたい」玄畏まりました「頓て女中が階下

へ行た時分、番頭がやつて参りました、番旦那さま、只今隣室にゐらっしゃる、彼れは皆御城中の旦那さま「原」ア、然やうか、拙者は杉下真影流の武藝をもつて諸國を修業してをる、原惣太郎元辰と申すものだ、一寸お目通りをしたいが、お願ひ申してくれ「番」ハイ畏まりました夫ぢやア、私が行って申し上げて見ませう……「エ、一寸御免下さいまし」言「何だ」番「私は當家の番頭」言「徳藏か」「魚」へ「エ」言「ヤ、今宵も厄介になる、ア、只今賀茂から立歸つて来た、で、其方のところで夕飯をして歸るつもりだ」魚「有がたうございませう」言「何か用か」魚「へ、此の隣室にお泊りなすつたのは、杉下真影流の剣道をもつて諸國を御修業になる原惣太郎元辰と仰しやるお方で、何ういふわけでございませうか、皆さまに一寸お目にかゝつて願ひたいことがあると仰しやる、何ういたしませう」言「ア、然うか、ヤ、夫は宜しい、此方へ御案内をせい」魚「へ……エ、旦那さま、彼方さまへ申上りましたら、宜しいといふ仰せでございませうから、何卒お通りを願ひます」魚「ア、然やうか、では案内してくれ……御免下さるやう」言「サア、此方へ、甚はだ取亂して失禮でござる」魚「何うつかまつりまして、飛だ御酒宴のお妨げをいたしましたるやうで甚だ失禮でござるが」言「イヤ決して然うではらん」魚「エ、手前は丹波の笹山の傍黒井村といふに住居まかりある郷士でございまして、原惣太郎元辰と申します者、當國へ出まし

て金比羅大権現に御参拜をして、今晚當所に圖らずも一泊をいたしましたる次第、就まして只今隣の座敷にて各々様のお話しを伺ひますと、何やら杉下真影流の杉下平太郎といふお噂でござつて、夫は手前の師匠、杉下平太郎左衛門政盛入道一風軒先生の、總領の御子息のやうに兼て承知いたし居「魚」ハ、「魚」で、此山崎家に仕へてをると師より伺がつて居りましたが、今お話しのお容子では、何か其平太郎先生のお身の上に、一大事でも起つたやうに存じられ、心配のあまり失禮を願ひみず、聊か其話を伺ひたいと此へ出ました次第「魚」な、ヤ、何うも御深切のこととござる、何うだ、吉田、大澤「兩人口を揃へ、兩人」ヤ、夫アお話し申しても仔細はなからう、何も悪いことをなすつたんぢやアないから「魚」然うだとも、では吉田、貴殿からお話し申してくれ「言」では然ういたさう、ア、拙者は吉田又三郎、是は大澤幸之進、此は宮島仙藏と申す者で、皆杉下平太郎先生の手ほどきからの弟子で「魚」な「言」乃で實は只今此城下から僅か隔つた賀茂といふところに、平太郎先生が閑居してゐらっしゃる、其處へ我々三名が今日御機嫌伺ひとして罷り出で、實に先生のお身の上をお氣の毒と存するの餘りツイ話頭にはぼつた次第で、我々は其歸るさ是で夕飯を喫し城中へ歸るのでござる「魚」ア、然やうでございませうか、シテ其先生のお氣の毒といふは、如何なる次第でありますか、伺ひたいもので……」

二九
直他ではござらん大村丈五郎丈助といふ兄弟の者が、主君の大層御意に入の妾の舍弟でゐる「
馬な」直此妾は當時主君のお部屋さまと申し上げてをるものでござる、夫は何ういふわけでござるか、眞に君公のことを申すは我々恐れ入が、何が御意に適つてをるか知んが、其妾お静の方といふのを頻りにお用ひある、其御寵愛を幸ひと、妾は自分の舍弟を御指南番に推擧たいと思ふところから、豪い杉下先生に宛の罪を負して、トウ／＼先生は長のお暇を申し付られまし「馬ナ」直乃で先生は何うも此疑ひの晴さるうちは當國は去ん、失から賀茂といふところにわらして、只今御新姐お子さん、お三人で閑居してゐらっしゃる、お静の方の思ふ充分大村丈五郎丈助といふ兄弟の者が、劍術御指南役になりました次第でござる「馬成ほど」直其様なやうなわけでござるから、我々此大村丈五郎の道場へは月に一遍、ホンの浮世の義務でやる次第、如何にも残念、何とかして先生の御歸參相成るやういたしたいので「馬ハア、夫は一體何ういふ宛の罪でござる」直夫は先生が當君公のことを、大層影で悪ざまに申して、眼のない主君であるとか、家來を取立るといふことを知んとかいふやうな、我々能は知んが、マア然う言たやうな、マア杉下先生が君公の事を、馬鹿殿様ぐらゐな事を風聴したといふんで、ところが我々知てをるが、先生は朝お起になると、未明の頃ほひ日の出に對つて今日斯のごとく

人間の目を送るは、皆太陽の御陰なりと、日の出に三拜をいたして、夫より伊勢の大廟を拜され、夫から金比羅大権現を念じ、次に主君の御武運長久を祈り、天下泰平國土安穩と仰しやるくらゐのお方だ、夫ほどの禮を行なつてゐらっしゃる先生、貴公の前だが何で主君のことを毛頭悪ざまに仰しやるやうなことはない、謂ゆる此惡魔のために魅込れてゐらっしゃるから、何うも是非におよばんで、我々は先生の御歸參になるのをお祈り申してをるのでござります「馬夫は皆さまから好き話を承まはり、眞にもつて忝けなく存ずる、ア！然やうでござつたか、一向に其やうな事を辨まへず當國へ参りました、賀茂といふところにゐらっしゃる」直「ア！然やう」馬眞に御邪魔いたした「直イヤ、飛だことを申して」馬「イエ、私も先生の御息ゆゑ失禮を願ひます」直「マア／＼一献」茲で盃をかへして、馬眞に恐れ入た、時機あらば御禮「直イヤ、然やうに及ばん」爰で惣太郎は隣座敷へ引取まして、お三人は食事を済してお歸りになつた容子、其惣太郎は寝ながら考へて、何しろ此に先生の御息平太郎どの、佞人の讒言より長のお暇とはお氣の毒なこと、我當所に逗留して、何とか其惡人ばらを遠ざけて殿さまの御安泰、先生の御歸參になるやう計らひたいものだ、斯う思つて夫から此玉彦の家に逗留しながら漸々と容子を探つてみますると、何うもお妾の評判が宜ない、彼様な妾の言ふことをお

用ひになつて、大村兄弟のやうな者を取立になると、終には國亂の元だといふ噂がチヨイチヨイ耳に入る、爰で原惣太郎、何とかして此ア城中へ入込やうにしたい、足輕でも宜いから住込たいものと、漸々城中の容子を伺った。

此丸龜の城内には生駒家以來の慣習で、武士と足輕が兩手に分れて源平野試合といふのがあつた、山崎家になつても盛んに是を行れる、謂ゆる治にゐて亂を忘れず、武士道を立る劍術を盛んに行はれるといふは眞に宜いことだ、乃で足輕でも腕の勝れてゐるものは武士を打込むと、言たやうなわけ、乃で原惣太郎が、此ア一ツ足輕奉公に住込み、尊師の御子息平太郎殿の歸參を計らはうと決心をした。

スルト此丸龜の御城下に桶職の親分、桶職こそしてをりませすけれど、ナカノ豪い金左衛門といふ者がございます、此ア御城中身分の方、其他御城下近郷近在から頼むくらの手廣くしてゐる、某日のこと惣太郎、御城下を散歩してゐると、其桶職の金左衛門の家の前に多くの人立がしてゐるによつて、立留つて見ると、丁度今醬油の造り桶でもあらうといふ、恐ろしい大きな桶を往來で轆をかけてゐる、臺の上へ乗かつて弟子がドゥンと一つくらはすと、トントンツシン、トントンツシンと調子を取て大才槍で打込でゐる、見てゐる大勢の者が、甲「何うです、

金左衛門の親方は毎も威勢が宜い、第一何うも彼の弟子の三吉といふ者が、彼アナカノ大變なもの」乙「エー彼ア此處の家の弟子でも氣が利て、親方が片腕とも思つてゐる、彼ア豪エ」皆な感心をしてゐる、夫を見て惣太郎が、惣、豪い……豪い……ヤア豪い」トントン、ツシン、ツシン、豪い「甲「何だ、彼の豪い」といふなア」と不思議をうつくらる、其うち金左衛門が、金「サア、皆な、仕事は仕舞だ……サア、仕事は仕舞だ」△「親方、ご苦勞さま」○「ヤア今日は」頻りにやつてゐる、金左衛門見ると、若い武士が頻りに感心をしてゐる、金「旦那、恐れ入ました、此様な轆を締るんでも、本當の氣合に行ねエと轆がグイと締りません、私がトントン、んと調子を取る途端に、弟子がツシンと來ます、其ツシンと下して來る利目にやア、貴君が豪いと仰しやる」厚「イヤ、甚はだ失禮いたしました」金「ナニ失禮なやアございません、チト手前がたへ立寄下さい」厚「然らば御免蒙むる」金「オイ女房ア、酒の用意をして、旦那御酒を召上りませう……私が飲ますから何ぞ肴を一つ見立て」四國の丸龜の鯛などは結構なもの、四國の金手沖の鯛、此ア鯛の名物、失ア鯛と來た日にやア盛んに漁獲ます、鯛網へ鯛の数が五六千ぐらゐる乃で大きな鯛がないので、先一尺から八九寸、大きいところで一尺二三寸ぐらゐる、夫ア何うも美味い、潮の加減の宜しいところでございますから、其何うも結構なことといふものは、ナカ

「大したもの、其鯛を買つて酒を求めて、金旦那、マアお上んなすつておくんなせエ、ご遠慮には及びません」金「夫ア忝じけな」金「何だつて此通り鯛の宜いのがございますから、此を一つの刺身でやりませう」主人の金左衛門が吩咐まして、何處の武士だか分らないものを引張込で酒を飲む餘ほど變つた者、金「時に旦那、何方でございます」金「拙者は丹波」金「失禮ながら丹波の篠山の荒熊」金「夫ア随分山中に參れば居らんことはござらんが、世間の評判ほどではない」金「何うも私どもは見たことはございせんが、大層居るさうで、就ては旦那此方に御滞留でございますか」金「然やうでございます、圖らず御當家の御厄介に初めてお目にかゝり、斯やうなことを申すも如何だが、此方既に四國の丸龜近邊に主取の望みあつて罷り越たものでござる」金「へエ、然やうでございますか、夫ア恐れ入りましたねエ、何にしろ何うかお遊びに、お宿は何方でございます」金「宿は直此先でございます、玉屋にをります」金「ア玉彦にゐらっしゃるんでございますか、私も彼處の主人とは懇意で夫アマア何しろ結構でございます、ヤ、然やういふわけでございますなら、毎日のやうに私のところへお遊びに、何から御都合によつて私の宅へ入つて宜しうございます」金「ヤ、然やういふわけなら、身共も其方が工合が宜い、ぢやア當家へ御厄介になるとしやう」金「ぢやア然やうなさい」此話を登所の方で聞いた金左衛門の女房が呆れ

た、當家の主人さんの物好も大概にしなざるが宜い、冗談ぢやアない、何處の何だか分りもしないものを、自分の氣に入りやア引張込む、女「チヨイと爾さん」金「早く酒を持って來い」女「マア何處のお方」金「何處のお方でも己の氣に入りやア當分引張込む、此が道樂だ」女「此前氣に入た」金「と云つて、終に拐帶にあつた」金「彼の時分にやア未だ己の目が利なかつたんだ、此節はモウ立派に此方の目が利やうになつてゐるから、更に差問はない、心配するな、間違つた時に身代をすつてしまへば濟んだ」金「此は御家内初めましてお目にかゝる、拙者は原惣太郎と申する者でございます、何分宜しうお見知りかれますやうに」女「初めまして、私は金左衛門の妻」金「只今御主人と御相談の上、御當家に居てあげることにしたした」驚いたなア金左衛門の女房目の寄るところへ玉、居てあげるなんと本當に呆れてしまふ、サア玉屋彦六の方へは其話をし、荷物を此方へ運んで宿代を拂ふ、奥の一室を惣太郎の居室と定めまして、金「マア御遠慮なくお居でなすつて下さい、萬一盜賊が來た時にやアも武家さまがゐりやア大丈夫だ、マア御緩くりとお居でなさい、其内にやア宜い事がございませうから」金「イヤ、宿屋とは違ひ自分の家と思ひ何となく安心だ」此を聞いて弟子が驚ろいた、弟「マア女房さん、彼様なことを言てゐますぜ、自分の家と思つて安心だなんて、エ、安心されてゐられて堪るものか、親方も親方だ、當

家の親方の變り者より、彼の武士の方が餘ッほど變ッてゐる」

其翌日になりまして時刻を計ッて入湯に参りました、其内に「甲」ハイ御免下さい「金」ハイ「甲」酒屋でございます、勝鬨といふ酒を一樽持て参りました「金」フウん、夫りや何うしたんだ「甲」此方にゐらッしやるお武家さまが「金」感心だ、酒を持込んだ「甲」一寸恐れ入りますが、代價を此方から「金」ナニ代價を、迂濶り貰られもしない、オイ女房ア、勝鬨の代を一時立替るんださうだ「女」本當に我夫さん考へて御覽よ、夫で……「金」宜いよ、己が承知だ「女」宜いよなんて能考へて、チト繕をお縮なさい「金」安心してゐろ「女」安心出来ないから言んだよ「金」宜ッてエことよ「女」何が宜いんだエ「スルト今度は肴屋が、魚今日は、鯛を持って來ました「金」オ、大層宜い鯛だ「魚」エー此ア其何でございます「金」何だい「魚」此方にゐらッしやるお武家さまで、代は貴君の方から貰ッてくれと……「金」何だッて、宜い加減にしる、エ、一時立替てやれ、オイ女房ア鯛の錢を拂ッてやんねエ「女」驚いたねエ、酒を一樽持込んで鯛の代まで拂はせるなんて「金」ア荷物があるから安心をしる「女」本當に爾さんのすることは安心は出來やアしない「然ら斯ういたしまする内に原惣太郎立歸り、「甲」只今、ア一宜い心もちになつた「金」オイ旦那、酒を今……「甲」ア、何うも此勝鬨といふ酒が餘ほど宜い、此は灘の一本生、我が父が御酒が好

で、拙者も十四五から頂き、能御酒の味は拙者も心得てゐる、就ては頂戴をいたすやうな次第、只今酒屋の前を通ると、勝鬨と銘打つたる酒がござる、扱は此御酒はナカク結構な御酒と、夫ゆゑ此方は入湯の行がけに申し付、此方へ持込み一時代價のお立替を頼んだが、お拂ひ下すつたか「金」エー只今拂ッて置ました「甲」夫で此方も安心をした、モウ斯うなると主人の前だが、何も斯も遠慮なしに「金」ヤ、私も其方だが、貴君のは少し遠慮がなさ過るんで、私も驚きました「甲」イヤ、別に驚くには及ばんよ「金」爾さんの方ぢやア然うだらふが、此方が驚いてゐるんだ「甲」併し眞に快い心もちで、何となく此方氣に入て、只今御酒をやつてゐるやうな次第「金」マア何でも宜しうございますから手和かに願ひたい「甲」サア一つ煙やうではないか、モウ呑口が附てゐる筈だ「金」先方からチャンと附て來ました「甲」サア飲う「此から御酒が初まります「甲」ア一美味い、ア一何うも人が代を拂ッてくれるものを、安心して飲ぐら美味いことはない、ア一甘露「金」オイ旦那、冗談ぢやアない、一時立替たんですぜ「甲」ヤ、モウ斯うなると親類交際、何も遠慮しないから「金」餘まり遠慮がないんで、此方が煙にまかれてしまふ「甲」椰輪半分頼りに冗談を言ながら惣太郎飲でゐる、會時に旦那、何の奉公をなさらふてエんで「甲」足輕奉公でも何でも宜い「金」夫ア爾さんなんざア人物が宜いから足輕は勿體ねエ、

然れども山崎さまは足輕が初まりでも、いよ／＼源平試合といふ時に武士を打込み、武士になれぬエとはございませぬ、随分宜いよになつてゐるなア御當家の掟、モシ其様なことで奉公をなさるらうてエのは、私が一つお世話しても宜うございませすが一體此四國に渡つて足輕奉公をしやうてエのは、何か仔細があるんでございませるか」眞親方、然うも尋ねになれば、此原惣太郎が事の仔細を打明けてお願ひ申さう、實は武士道の意氣地、何うしても恩人のために義を立んければならぬのでござる、乃で拙者が此山崎家に御奉公をして、我が爲に大切の恩人の御子息を、御當家へ歸參の叶ふやうにしたいといふんで「金」失禮でございませすけれど誰人でございませす、貴方の御懇意の方は「眞」拙者が其懇意と申するのは杉下平太郎先生「金」彼の劍術の御指南番「眞」然うでござる「金」私の弟子ども、皆劍術を習つたんで、彼の先生が仕込で下すつて、可成やるんで、私は彼の先生とは御懇意にいたし、善いお方で上下の通りも宜つたんですが、人間てエものは何時災難が來るか分らねんで、お聞及びでもございませすが、大村丈五郎兄弟は、彼の杉下先生からみれば遙かに劣つた腕前、ところが其姉が容貌が美いで、大きい聲ぢやア言させんが、此姉が君公のお妾、此女があるもんだから良い殿さまが馬鹿に見えるやうなわけです、マア何奴が讒言をしたんだか杉下先生は長のお暇、門人も泣の別れ、其大村

丈五郎が今は杉下先生の代りをやつてゐるんで、滅法界評判が悪い、其評判の悪いので私ちどもは宜い氣味だと思つてるくらゐなものでございませすから、夫ぢやア其何でございませすか、全く貴方は杉下先生のために……」眞然やう、其仔細御存知ならば申すが其杉下平太郎と言れるは、我師匠の總領の御子息、何うか拙者が奉公をして御歸參になるやうに、此が武士道の義でござる「金」御尤もさまでございませす、夫ぢやア宜しうございませす、大言を吐やうでございませす、私の隣家の加賀屋八五郎、加賀八と申しまして、此ア御城中へ入入業をしてをります、此と私と兄弟同やうの中でございませす、其加賀八に頼みまして、一つ御城中の方を事を定ませう「眞」夫は幸はひ、然らば何分宜しう「金」宜しうございませす、其代り私が請合たら大丈夫でございませす……オイ女房ア「眞」ハイ「金」大變などになつたんだ何しろ此旦那が武士道を立てエといふんで、己のやうな者でも肌ア脱で力になつてくれ、斯う仰しやられちやア跡へは退ねエ、今容子を聞て見りやア、如何にも義の強い、斯ういふ御方なら、一肌どころか素ッ裸體になつても構はねえ、素より己が見込で此方へ御入んなさいを言たくれえだもの、何の酒の一樽や肴の代くらゐ拂つたつて構はねえ……マア旦那、飲を食ませう「眞」然らば頂戴をしやう「金」構はねえから當家の若エものをシツ使つて、主人同やうにおしなせエ、實に恩に報い武士道を立る

てエナア勇ましい、然う行なくちやア可ねエ」此からいたして隣の加賀屋八五郎のところへ出
 かけまして、稍あつて歸つて来て、金「マア旦那、明日加賀屋が御城中へ参ると言ますから、明
 日になりやア分ります」風「ヤ、何かについて有がたいこととござる」と安心をする、借翌日に
 なる、加賀八が「金右衛門どの」金「オ、此ア加賀八さんが来た、サア加賀屋さん此方へ」
 「昨夜は賑々」金「ヤ飛だ迷惑」「ナニ迷惑ぢやアない……丁度先刻高村善右衛門さんにお目
 にかゝつて乃で高村さまの仰しやるにやア、足輕で宜けりやア早速吞込んで、連れて来い斯う仰
 しやツたから、御迷惑でなけりやア直に御常人に」金「ア然うですか、旦那、此ア隣家の加賀
 屋八五郎さんです」風「夫は、初めてお目にかゝる、手前が原惣太郎元辰と申す者、以後御入
 魂に」「此ア申し遅れました、私は此方の主人と兄弟同やうに親しくいたしやす、加賀屋八五
 郎と申す、御城中へ人を入れてあります者、當家の兄弟から昨夜話しがございましたが、何か足
 輕の御奉公をなさりてエとの事、早速今日御城中へ参りまして、足輕頭の高村善右衛門さまへ
 御話をしましたところ早速御當人さまを同道するやうにとの仰せ、乃で只今参つた次第、お
 宜しければ此から行らして」風「然らば其御頭高村さまに御目にかゝられますか」金「旦那、此
 加賀屋はモウ私と兄弟のこととございますから話しが早いんで、モウお出でになりやア大丈夫

で……何うだい兄弟、此旦那足輕にやア勿體なからう、爾が此旦那を連れて行けば、何う見て
 も供だ」「巫山戯るな」金右衛門の女房が、玄「何卒八さん何分御願ひ申ます」此から原惣太郎
 加賀屋八五郎に連れられて御城中へ参ります。
 兩人は頓て足輕頭の高村善右衛門どの、お宅へ来る、お待受でございますから、加賀屋八五郎
 が、お御免下さいまし、先刻お話し上げた方を御同道いたしました」高「ア能こそお入來、
 サア此方へ」真に手輕な方、其前へ出た時に惣太郎が、風「初めてお目にかゝる、手前は原惣
 太郎元辰と申す、丹波の黒井村の者、仔細アツテ此度四國に渡りまして、御當家様へ圖らずお
 足輕奉公を望みましたところ、加賀屋八五郎どの、お世話をして今日お頭さまにお目にかゝ
 れるは身に取て有難く、何卒お目をかけお引立を願はしう」と口辭をした、高「ヤ、身共は足輕
 頭高村善右衛門と申す、ア早速御出頭あり喜ばしく存する、御當家足輕は四石二人扶持で
 ござるが、宜しいか」風「有がたい仕合せ」高「然らば宜しければ其手續きをいたす」是から夫々お
 届けを、何しろ一人召抱へるんだから、御城代までお届をして、彌「爰で高村善右衛門の計
 らひをもちまして、お足輕にお抱へと事定つてお手當を下さる、乃でお足輕小頭近藤重助が、
 一同に紹介してくれまして口誼をする。サアお足輕が何も惣太郎を見て、好人物で、何でも出

来さうだ、と影で評をする。乃で惣太郎が夫となく段々容子を聞と、大村丈五郎舎弟丈助の兄弟が、足輕へ對して劍術の指南をするといふから、一人の同僚に對つて、眞當今の先生の御指南は如何でございませうか、何うも可ません、先の杉下平太郎先生のお稽古を願つたのと同じへると、今度のは形が崩れて、全で形なしでございませうか、失禮ながら其お稽古日をお待なさうらんで、此御道場でお行なすつちやア如何か、夫ア結構、吾々願ふところでござるが、併し師匠と頼むべき人がありません、杉下先生お取立のうちに、吉田又三郎どの、宮島仙藏どの大澤幸之進、此お三人に御師範代出来るんでございませうか、何うも先生御退身の後は、些ともお氣が乗んと見えて稽古をして下さらん、何うも先代の御指南番は杉下眞影流「眞」や、不思議なこと、拙者も杉下眞影流「眞」へ、妙なことがござるな、眞「先代のお仕込のお手の内であれば、拙者も同流であるから、お稽古といふほどの事は出来んが、聊か小手固めに致さうではござらんか」△夫は願つてもない幸はひ、然らば何うか然う願ひたい、眞「委細心得た、サア致しませう」此から毎日原惣太郎元辰が仕込むと、同僚の足輕一同稽いた、△大した腕前だ」と評する、大村丈五郎丈助兄弟に知らないやうにして、三月ばかり稽古をした。

た、原惣太郎愛だと、眞「如何な腕前か大村丈五郎の手の内を拜見をしやう」足輕一同が、眞「何うか先生」眞「先生などと仰しやつては困ります」眞「イ、ヤ、此足輕部屋では貴君を先生、何うか大村丈助とお立合を願ふ、先代先生のために残念でござるから」眞「委細心得ましてござる」と其時の來るのを一日千秋の思ひで待うける、其うち彌よ今日が大試合といふので、足輕の方では各自腕を摩つて今か〜と初まるのを待つ、大村丈助此容子を見て、近ごろ足輕輩の劍術の質が、なか〜宜しくなつた、聊さか心づいたものと見える、其りや宜しくなつた筈だ、原惣太郎人知れず仕込んでゐる、其うちに大村丈助が連て参りましたる、殿村金彌といふ者が、眞「サア足輕のうちで誰でも構はんから一本來い」眞「原氏」眞「ハッ」眞「一ツち出ください」眞「私はお後で」眞「マア〜」眞「ではお先へ」夫へ出まして、眞「手前は新參お召抱への原惣太郎と申す」眞「然うか、遠慮をするな」と竹刀を執る、此方は御免と竹刀を取り互ひに位どりをして、エイヤアボン〜 眞「エイお面だ」と一本行た、眞「負つたお美ごと、此は感心だ、サア來さうしやい、モウ一本」眞「エイヤア、ボン〜」眞「お小手ツ」眞「負つた、此ア感心だ、モウ一本」眞「エイ、ヤア、眞「お胴ツ」ピシリ、眞「ウン」ドウン、尻餅をついて、眞「負つた……今日はチヤ身體の工合が悪い、ヤア感心〜」苦笑ひをする、足輕の方ではクス〜笑つて眞「何が身體

の所爲だ何うも原氏は豪いな、面を打て小手を打て胴だ、眞剣だッて、顔を切れて手を切れて
 胴切になれば世話はない、尊公の前だが、今の胴はナガ／＼利た」こ然うだ彼れはナカ／＼利
 た、ビシリと行た、驚き入た、尋常のお堂ぢやアない京都本願寺のお堂だ」甲何故然うお洒落
 なさる」甲ヤ、注文のお胴だ」なんと云て、各自が頻りにコン／＼言ふ、大村丈助がツカ／＼
 と現れて、大原徳太郎とやら、ナカ／＼其方は感心だ、サア参れ」原此は先生」大遠慮に及ば
 ん充分に來い」で互ひに位どりをする、エイヤツ、ボン／＼ボン／＼、ナカ／＼先生を打込な
 い、大村丈助追立てられて二廻りばかり廻つた、馬お面だア」聲ばかりで打ない、馬お胴だア」
 是も聲ばかりで打ない、ヤ丈助驚いた、モウヘト／＼となつて、汗をダク／＼流し、最早眼
 が眩んで其處へ打倒れた、大コレ水をもて來い」ゴツクリ飲で、大ア／＼ナカ／＼感心だ、昨夜
 からチト頭痛がいたして、何うも目が眩んでサツパリ向ふが分らん」分らん筈だ、此ときの大
 試合には、大村丈助も殿村金彌も只這う／＼の體で引あげた、足輕一同、甲何と心もちが宜う
 ございしました、我々をとらへて足々と呼で少しも眼中に置ん、モウ我々を塵芥同やうに心得て
 をツた、夫を足輕の中から御貴殿がお出下さつて、斯のごとく先方を打込で下さつたのは眞に
 忝けなく實に結構だ」馬何ういたしまして未熟」甲イヤ未熟ぢやア彼様なことは出来ません、

何うでございます這々の體でヒヨロ／＼して、ヤ彼れでも御指南番とは呆れかへつたもの、何
 うも驚ろいたわけのもの」こ然やうでムる」甲只々驚ろき入た」こ然やうで」一同が噂してゐ
 る。

此方は大村丈助が兄の丈五郎に對つて、大何うも兄上、足輕の間に頗る出来る奴がござる、此
 八月の大試合はチト面倒でござる」大フウン、其様な腕前か」大ヤ、全體杉下平太郎其まゝと
 いふ流義でござる、私だから凌いだが、大抵の者なら打れてしまふ」ナニ自分だつて凌げやア
 しない。

スルト其後ち丸龜を離れますること僅かのところに東村といふのがある、此處に其代々郷士で
 ございまして、篠崎勘兵衛といふ人がをりました、是へ丸龜の藩士が來て勘兵衛どのに軍學な
 どを教はる、此勘兵衛はナカ／＼豪いもので軍學は頗る出来る、夫であるによつて今日來てを
 るもの七八名、其中に殿村又六、板垣藤藏、松原部、此殿村又六といふのは金彌の兄で、其他
 五六名をツて、今稽古が終つて勘兵衛どのから一口御酒を頂いてをるところ、用があつて参り
 ましたのが原徳太郎、此は頭高村善右衛門さまの使に來たので、勘ア何ぢや」ハハイ、只
 今高村さまからお使が参りましてござる」勘ア何か、使の者の口上か、宜しい此方へ遠慮に

及ばん通さッしやい……ナニ足輕だ、足輕でも苦しうない」此人は足輕だからと區別するんぢやアない、何うして足輕の内から願ふる人物も出るから、と少しも輕蔑しない、取次の女中が「女何うぞ貴方、此方へお通り下さい」案内に従がッて原惣太郎、今勘兵衛が對酌してゐる次の座敷へ手をついて、原此は旦那さま、御機嫌よう」勘ア、原惣太郎、先頃も罷り越たことがある、御苦勞ぢや、用事は何だね」原、エ、高村善右衛門さまよりのお口上」勘、ア、頭から、何事ぢや」原、兼て申し上ましたる願は御聞届けに相成まして、近々のうち退隱をいたしますの心得なれば、其節のお打合せ等もあれば、近日罷り出委細を申し上るとの事でございます」勘、ア、然やうか彌よ君公も御聞届になッて高村氏も隠居仰せ付られることになッたとは結構ぢやモ、ウ長いことだし兩三年前からの願ひだッたが、御聞届けにならないのを今度彌よ君公が御聞届けになッたか、ヤ、大きに御苦勞だ」スルト殿村が、原彼は何と申す者」勘、彼は先頃高村から話しのあッた、新參お召抱への原惣太郎、年は若いナカ、役に立つ、殊に評判にて承まはッたが、劍術がナカ、能出来るさうな」勘、何と幸はひ御當家を拜借し、今日御庭前で彼を相手に手の内を見たいもので、餘ほど能出来るさうでございますから」勘、コレ惣太郎」原、ハイ、勘、其方は劍術は大分能やるさうだ」原、何ういたしましたして」勘、イヤ、やるのだらう」原、ナカ、もちま

て、私劍術など能出来はいたしません」勘、イヤ、出来るだらう」原、何ういたしましたして、他人さまの御覽あそばすところで、劍術をつかふなんといふ程出来はいたしません」原、コレ原惣太郎」原、ハ、原、此方は殿村又六と申す」原、ハ、原、其方が劍術を知んとは言ない、確に其方劍術を辨まへてゐることは拙者存じてゐる、今日幸はひ篠崎先生の許にて、爾を相手に一本立合ふ所存だが、相手をする事は出来ないと申すか」原、イエ、お相手をいたすことが出来んとは申しません」原、夫とも武藝を知んといふのか」原、此はしたり、武藝を知んといふわけはござらん、併し能うは出来ませんが、劍術も少しはいたします、又馬も少々いたします、弓の方も水練も柔術も、聊かは心得てをります」原、ア、大層其方並べ立をする、然らば相手をするから、只今御當家の御庭前を拜借いたして……何うか篠崎先生お道具の御拜借を願ひたい」勘、承知いたしました……是よ」ハ、ハ、ハ、殿村どのが劍術をなさるから道具を出してお貸申せ」忽ちの間に篠崎の家來が道具を持って参りまして、△此でも宜しうござるか」原、サア參れ相手をして遣はすから來」原、御免下さい、折角の仰せでございますから、然らばお相手をいたす」原、ナニ、お相手とは願ふる出来る者が申すのだ、此方は大村丈助殿道場で師範代を勤めてをるぞ、サア來い、先頃は舍弟か爾のために三本負ッたさうだ、未舍弟は未熟だ」言れて惣太郎腹の中に、ハ、ア、此

ア強て剣術の試合を望んだのは、彼の金彌といふ人の兄貴か、其様なことは知んであつた、夫
 ぢやア其意趣晴しに此方を打うといふんだなと腹をすえて惣太郎スツカリ仕度をいたしまして
 お庭を出る、芝原でございませす 殿「ヤア」原「エイ」殿「ヤア」原「エイ」殿「ヤア」……此ア出来る」
 殿「ヤア」原「エイ」ボン／＼ガラ、と打合た、思はず篠崎勘兵衛乗出して、拳を膝車に取
 蕙「ウーン、立派な立合」見合ッてゐる中に、原「エイお面だ」ボウンと打れた、殿村又六面へ
 美事に來たが、殿「エ、微打た」又エイ、ボン／＼、原「お小手だ」ビシリといッた、殿「オット微
 打た」微打てばかりゐる、原「エイ」ア、／＼、原「お面だ」ビシリ、殿「オット微打た」二度目も
 微打たといふ、正面から美ごとに打てゐるのを微打たといふ、五六度打れたが微打たどばかり
 負つたと言ない、終には面倒だから、原「お面だ」と惣太郎若いから疝癪を發して打ばたいた、
 何うも物の美ごとに、小手の研で充分に胸へいつた、トタンに顛倒かへる、背後の捨石の角で
 頭を打てウーンと眼を眩した、スルト惣太郎は手早く胸も小手も除去、面を脱し、支度を取除
 て、原「御免下さり」といふとサアツと逃るやうに歸ッてしまつた、サア打捨て置れないから、
 夫へ飛出した朋友は、原「殿村、確かりさッしやい」殿「殿村」殿「ウーン」殿「確かりさッしやい」
 「ウン」原「宜いか」殿「ウン宜しい」原「確かりさッしやい」殿「確かりしてをるウーン」原「何うし

た」殿「ウーン彼は何うした」原「疾に戻つた」殿「未充分に試合ないうちに戻るとは怪しからん奴
 だ」原「勝負はつかないと言て附てゐるぢやアないか」殿「馬鹿ア言ッしやい、己ア負つたと言
 ん」原「夫は師範代、能あるまい、我々には分らんが、初手面を打たらう、二度目が小手だ、又
 面へ打た、何うも其うちに御貴殿はへト／＼になつて」殿「馬鹿ア言ッしやい」原「何うも最後の
 胸へビシリと言て聲も出せない、顛倒かへッて氣絶をしたんだ、何うも凄いほどの胸だツた、
 衣服を脱で見さッしやい、何うかなツちやアゐないか」殿「なアに石に頭を打付たんだ」夫から
 胸を取除け、衣類を捨て見ると、右の方から肋へかけて、青ダイシヨウのやうに腫上ツてゐ
 る、殿「オ、負つた」今になつて負つたと云たツて仕やうがない、篠崎先生が、蕙「イヤ、殿村
 どの、耐忍づよいには感心した」殿「ヤ、お賞下さいますな、併し彼の原惣太郎といふ奴は餘ほ
 ど剣術は能出来る、各々何うだ」原「イヤ實に何うも師範代が海鼠のやうになつたんだ、倒れて
 石の小端で打て目を眩す、近頃にない師範代の大出来だ」殿「怪しからん、お賞下さいますな……
 …實に何うも大した奴だ」と氣まりが悪いから殿村又六立歸る、跡は大笑ひとなつて一同暇を
 告ました。

原惣太郎お使を濟して立歸りましたが、別段に試合をしたなんといふことは同僚には言ない、

濟してゐる、ところが此方は殿村又六、舎弟は打たれ自分は右のごとく、實に無念やる方ない
 身體の痛みに二三日稽古を休んで、大村丈五郎の道場へ参ると、大ヤ、此は殿村どの、兩三日
 道場へち出なさらんが何うなすツた」鷹「チト頭が痛んで」大「夫は悪い、頭は大切、御病氣か」
 鷹「イヤ、病氣ではござらん、少々仔細がござる」大「ホ、ウ、何ういふ仔細でござる」鷹「實は
 篠崎先生の許に於いて、新規にお抱へになりましたる足輕の原惣太郎と試合をいたしました
 ナカ／＼もッて私どもの及ぶ奴ではない、何うも容子が訝しうござるから、二三日探つて見ま
 したが、何うも彼は先代御指南番杉下平太郎の父、杉下平太左衛門より極意皆傳の腕前ださう
 でござる」大「フウン」鷹「杉下眞影流にいたして天晴なる達人、其者が御當家の足輕に住込むと
 いふは、何か是には仔細あるに違ひない、此ア先生の前だが、此ま、捨置ますと、彼は必らず
 源平の試合の其時は、足輕の内から名乗出て貴君と試合をする、失禮な申し分だが、私が及ば
 んのだから、貴君も逆も及やアしません、是は今のうちに何とか工風をいたしませんと工合が
 悪うございませう」大「フウン、何うしたら宜らうかしらん」鷹「何うにも此は致し方はござら
 ん」大「然らば斯やういたさう彼は他出をするか、或は夜行をするを附狙て、人知れず彼を殺
 しまはう」鷹「夫なら至極宜しいのでござる」大「夫では然やういたさう」となりまして爰で其密

談を擬して、原惣太郎が夜行でもするのを附狙ました、殿村兄弟、大村兄弟、松原節、此五人
 の者皆附狙てゐる、スルト此高村善右衛門といふも頭が、長らくの間足輕頭、モウ老體のこ
 とゆゑ勤まらん、三年前から此隠居を願つた、漸く今年にいたりまして隠居を仰せ付けられまし
 た、伴の高村順吉知高、此が彌上跡役を勤めることになりました、乃で宜い家ではございませ
 んが、御城外の水神と名づけましたるところに隠宅を設け、其萬事の用意が出来ましたについ
 て、今まで長い間勤務中の報酬かた／＼、同藩の御身分の方をお招きをいたして、隠宅開き
 といふので祝ひをいたしました、夫について自分吹擧した廉もあり、萬事役に立によつて、其
 客をする間惣太郎を頼んで、其他足輕などが皆お手傳ひに参りまして、總てを惣太郎に任した
 といふくらゐ、若いけれど何事も出来る人だ、二日お客をなされて、二日目の晩お客さまが皆お
 開きになつたから、善右衛門どのが、善ア「原」鷹「ハイ」善「イヤ何うもご苦勞であつた、マア
 緩くり一つ飲で、今宵は當方へ泊つても宜い、チト遅くなつたから」鷹「イヤ、手前は假令遅く
 とも、明日チトも稽古がございますから、お暇をいたしませう」善「然らうか、餘り遅いが」鷹「イヤ
 エ、決して仔細はございませせん」と云つて暇乞をして歸つて来る田甫傳ひに入幡神社の前杉の大
 木が生へ茂つて居る處へ來かゝると突然に物影より惣太郎目がけてピニと槍を突出したもの

がある、其槍先を原惣太郎、危ふく轉して蟻首掴んでウーンと引張り込む、乃で松の樹を小楯に取て早くも禰鉢巻、刀の鯉口を切て、原惣太郎と聲をかける、スルトバラ〜と取巻く原惣太郎者ッ、何者なるか「善哉止れ、爾においては先頃能も此方へ對して恥辱を與へたな」

原惣太郎、然ういふ爾は殿村か「善哉止れ」ビユウ、チャン、原惣太郎元辰夫と察したによつて、モウ充分此處を切抜ける覺悟、其うち突然切てかゝりたる殿村又六此奴を横に拂ひましたるによつて、肋へ切込れてドウと倒れる、續いて舍弟金彌が飛込で来る奴を、大袈裟がけに切倒す大村丈助、丈「爾れッ」と正面より来るやつを、體を轉してパァ〜と突の一本をかける、鳩尾をつかれて仰向けに倒れる其うち又々飛かゝつて来るのは松原節、夫を眞甲より切つける、殘る大村丈五郎、丈「爾れ覺悟をいたせ」と切込んで来るを、原惣太郎尋常に名乗もせず暗打を計るは、武士にあるまじき卑怯者、覺悟をせよ「チャチャンと切結ぶ、エイ、ヤア、爰ぞと原惣太郎、杉下眞影流の極意の一刀、大村丈五郎眞甲より切付られ、受は受ましたるなれど、其受たる刀が下つたから、眉間に割付られ、ヒョロ〜と踏眼めくところを、透さず踏込んで胸へ切込み、忽ちその間に五人を切り、夫から八幡宮のお燈籠に點火のあるを幸ひ、其燈籠の許へ参りまして、懐中より紙を出して、今宵の始末を短文明瞭に認めて、お家のお爲にな

らざるところの大村兄弟、其他の悪人を我れは切て立退くによつて、武を嚴重になさる思し召なら、杉下平太郎どの御歸參仰せ付られるやう願ふ、と認め、松の樹の枝へ其願書を結びつけまして、夫から直に仕度をいたしまして、城中へ歸らないで桶職金左衛門のところへやつて来た、トン〜叩いた、遅いから熱寝てゐる、トン〜、金「エ、誰人でございます」原惣太郎「シ拙者だ」金「誰人でございます」原惣太郎「金」原さんでございますか、只今開ます、お待下さい」直に飛起まして、金「女房、原の旦那が大層遅くも入來なすつた只今開ます」金「ハ、い〜入ッしやい」金「未戸外だ、寢惚ちやア可ない、確かりしねエ」ガタ〜ガタン、金「エ、此ア何らも大層遅く」桶職金左衛門の女房は手燭をつけて、女「此は〜、能入ッしやいました」と惣太郎の姿を見て「キヤッ」と驚いて跡へ退る、金「何を其様な聲をする」と金左衛門も見て、金「オ、此ア驚いた、此ア何らも……マア何らなすつたんでございます、大變な何らも血でございませぬ」原惣太郎を隠さう、實は是れ〜、今宵八幡宮の神前にて大村兄弟を始め五人の者に取巻れ、彼等五人を切て此へ参つたのでござる」金「夫はマア豪いことをなさいました、で、此から何らなさらうてんで」原惣太郎然れば杉下先生の歸參になるやう、其願書を認めて松の樹の枝へ結びつけておいた夫ゆる此方モウ當地に用事はないから立退うと思ふ、其許には一方なら

んお世話を蒙ったから、一寸お暇乞ひに來た、随分御夫婦とも御機嫌よう」金「マ、一體何處へ往らつしやいます」屋「先大阪へ出やうと思ふ」金「夫ア宜うございませう、ちやア斯ういたしませう、私もウンと借金で首が廻らなくなつたんで、今まで何でもござれと引受たんで、マア私の身分で借金が千兩も出來たんで、何うも致方がございせんから、幸はひお供をいたして逃ませう、女房ア支度をしやう」女「マア爾さん……」金「エ、爾さんちやアない大阪の名護町に熊の野郎が住てゐるから兎に角熊のところまで旦那をお連申して而して大阪で何とか身の振かたをつげやう」女「夫ちやア然ういふことに」と此から忽ちの間に支度をする、二階へ登つて、金「三吉」三「ヘエ」金「オイ友藏」三「ヘエ」金「起てくれ、他の者は起さなくつても宜い、實は爾等兩人に話しをするが、何うも知ての通り己も借金で首が廻らねエ皆な他人のために借金を」兩人然ですとも」金「就ちやア己が逃るんだ、マア大阪まで逃やうと思ふ、乃で何うか爾等兩人で跡の始末をしてくれねエか」屋「夫ア宜うございませう、然ういふわけで逃るんでございませうなら、此方ア私等兩人が先へ立て稼いで、親方がねエとなりやア又話しにつげやうもあります、私どもは金比羅参りに來て、親方に救ひあげられて、斯うやつて押しも押れもしねエでゐるツてエナア皆親方のお影、何しろ其恩返しをしなけりやア濟せんから、兩で氣を揃へて、當家

の職人を使役つて、充分二三年もやりましたら、此通り仕事のある家でございませう、親方のやうに何程利得たツて、他人のために費つてしまつちやア、幾ら仕事で利得たツて、夫ア足りやアしません、ですから跡の事は私どもが引受ますから、安心して支度をなすツて、お出でなせエ」金「夫れちやア吉も友も頼むぜ」兩「エ、宜うございませう、如何なことがございましても、追手のかゝるやうな事はしませんから、御安心なすツておくんなせエ」乃で家は自分の所有だし、材木は積であるし、職人で消光せば、マア自分に冗費をしなければ貯られるんだから、乃で金右衛門は支度をして、三吉友藏に跡は任して衣服を著かへて、金旦那も支度は宜ございませうか」血の付たる衣類は此は油紙に包んで荷物の内に確かりと此をしまひ込み、夜道をかけて丁度其翌日の正午少々前に、高松に着いたして、高松から大阪への便船に乗りました、乃で海上穩やか、先何ごともなく船が大阪に來まして、夫より名護町三丁目の桶職の熊吉を尋ねて参りますと、イヤ何うも來て見ると驚いた 金旦那、此が桶職の熊の家で」間口が三間半ドンくやつてゐる、其處へ疲れてゐるから金左衛門が、金熊ア」熊「ヤア親方さん、此アお入來なせエ、ヤア此ア母親、大阪見物でございませうか、能來てくださつた、此ア有がたい、マア皆な仕事を止る、己の親方さんが來たんだ」金「此ア己が御案内して今度も連申した、己の御懇

意の旦那だ」此アママ門口ですから、何卒此方へも上んなすつて、サアママ奥の方をドン
 掃て、悉皆奇麗に爾たち掃除をしてくれ、何うも親方さんの前だが、男世帯だから」金未
 女房がねエのか」熊慌アくつて貰ッちやア碌なのはねエ、マア精々と稼いで、少し身代の小確
 りした後貨はうと思つて、今んところは男世帯でございます」金ウん然うか」熊此方がサツバ
 リしてゐるんで、親方さんの方を引揚てから早いもんだ、モウ十年になる」金何歳になつた」
 熊「三十一です」金「三十一になつて女房を持ねへとは……」熊「マア其様なことは何うだつて宜
 うございませす、夫ア親方さんの前だがマア兎に角口誼をしなくツちやア、能親方さんも母親さ
 んも来て下すつた、毎も御無事で」金「マア熊や、爾も御無事で、近ごろはマア稼業も盛んだそ
 うで」熊有がてえことに、大きな店がたの仕事を受て、仕事は山のやうに聞えてゐる、とい
 ふなア皆な親方さんの丹精で、マア有がてえことに、決して如何なことがあつたつて困るやうな
 事はしねエんだ、マア親方さんの前だが、爾さんが華美だから何日何どき如何なことがねエと
 も限らねエ、其時に海を一つ越て来りやア、何日何時親方さんや母親が来ても差支へはねえや
 うにしてある安心して鞋を解いてくんせい」
 原惣太郎、傍らで此を開てをりましたが、風ア「只今承はれば、其許の御一言、人情の深い

思し召、此方も不思議な御縁から金左衛門どの御夫婦の御厄介に相成つた原惣太郎と申す者、
 此度金左衛門どの御夫婦と共に此大阪へ立退ました、といふは、丸龜に事故出来いたして御同
 道申した次第でございます」熊然やうでございますか、何が何だか分りませんが、構ふことはござ
 いませんから、私の許で緩くり御滞留を願ひたうございます」爰で桶職金左衛門夫婦と原惣太
 郎、滞留をいたす、兎に角大阪を見がをなさい、と一日二日は仕事を休んでズウツと案内を
 する、三人は眞に喜んだ、先見物も済まして、サア原惣太郎、何か稼業をしやうと思ふと
 此頃ほひ大阪には水汲稼業といふのがある、乃で當分水汲をしやうといふ考へ、風「倍親方」
 熊「旦那、何でございます」風「私は水汲をやらうと思ふ」熊「其様な稼業をしねエでも……」風「イ
 ヤ、チト考へがあるから水汲をしたい、就ては貴君の衆に厄介になつてゐるんだから、一荷で
 二荷ぶん入る擔桶を造へて貰ひたい、夫で矢張一荷の割合で汲込だら、少しは頼む人がありま
 せう」熊「夫アあるどころぢやアございません、大したもので、何せう然うなつた日にやア
 夫はモウドシ／＼頼み人があつて、大層なわけのもので、夫ぢやアマア一つ棍か槍の極上等ん
 で造へませう」風「何うか願ひ申す」此から惣太郎力もあるし、荷桶が出来あがりますると水
 汲を初めました、乃で桶職の熊吉が近所近邊を頼んで水を賣込むことになる、小さな桶一荷

と違つて、此原惣太郎のは二荷ぶりツつ擔いで来てくれる、サア彼方からも此方からも評判になりまして、漸々花主が出来するうちに、同じ名護町で工面のよい荒物渡世の和泉屋久兵衛爰の家へ水を汲に参りました、漸々戀意になりましたんで、夜分チトお遊びにお入來なさいといふ、惣太郎も晝間稼いで、夜は暇だから言るゝまゝに遊びに行くと、子僧たちが見世で手習をしてゐる、其手本をみて、厩此ア私が認てやらう」と認てやつた、主人の久兵衛が其認てくれた手本を見て感心した、實に美ごとな手跡だ、乃で惣太郎に、久實にも立派なもので、何卒一つ看板を書て下さいまし」厩ヤ、ナカ／＼其様なわけぢやアございません」久マア然う仰しやらすに何うか書て下さいまし」ト頼まれた事もある。

スルト一日の事と泉屋久兵衛が惣太郎に、久借水屋さん濟ませんが結納を一ツ」厩エ」久結納を」厩如何なことを書んで」久是々書ば宜いんで」厩ハ、ア」久當家の伴へ東久太郎町の紙間屋、三澤屋利右衛門の娘お君、是が嫁に参ります、何うか結納を認て下さい」厩宜くは書させんが」といふので結納書を認ました、何うも實に立派なもの、久何うか嫁入の當日にも手傳ひを願ひたい」厩へエ宜しうございます」と戀意の中だからいたします、彌よ十一月十五日に日出度婚禮は相濟ました、スルト翌年の正月の十一日が若夫婦に水浴びせといふことになる是

を大阪の水浴せの挨拶といふ、其前に惣太郎が和泉屋久兵衛かたへ参ると、主人が大層心配をしてゐる、厩今日は」久ヤ、惣太郎さん能お入來だ」厩一體貴君は何か御心配の御容子ですが何をお考へなすつてゐらッしやるか」久實は困つたことが出来ました」厩夫は何ういふことで、斯うして毎日出入りをして、若旦那が嫁をお取の時手傳もいたした私、何か御心配なら私にお話し下さい」久夫ならお話しをするが御深切に能お尋ね下さつた貴君は初めてでございませうが、此大阪に水浴せといふ習慣がありません」厩へエ、夫は何ういふわけでございますか」久正月の十一日に若夫婦を門口へ揃へまして、而して頭から水を浴させる幡隨院長兵衛の時代に一時止んで居たのが此頃辨慶の吉松、仁王の八十五郎といふ、此が近ごろソロ／＼行出して参りまして、人の難儀になることを、始めたんで、厩フウン、夫ア怪しからん話だ」久明日は何うでも此家の見世を破壊されるか、水だらけにされるので昔しは家の門口へ、新しい手桶へ水を盛て山形に重ね、一番上の手桶に若松の枝を折添へて、而して見世の内外を綺麗に掃除をして、金屏風を立て、毛氈を敷て其上に俠客の何某が坐つてゐる、然ういふ工合夫を今度の辨慶仁王なんといふ俠客は、自分の方から水を持って来て打かける是を止て貰はうといふのには、ドエライ金を取れます、」厩ヤ、夫ぢやア私が一ツ失禮ながら口を辯ませう」久夫

ア惣太郎さん、貴君宜うございますか」惣失禮ながら私が先方に對つて一通り述べて見ませう、萬一先方で左や角う申しましたら、其時には私が據ころないから、亂暴すれば又心得もござる當日は私にお任せを願ひたい」久「夫ぢやア何うか宜しう願ひたうございます」惣「是まで大分やりましてござるか」久「是まで皆大金を取れて、甚い難儀をしてゐます」惣「夫ア宜しうございます」乃で延寶二年正月の十一日には名護町三丁目の荒物商、和泉屋久兵衛の見世さきのことろズウツト趣向をして原惣太郎一人武士の扮装になつて控へてゐる。

サア最う此事が評判になりましたから、近所近邊の者が、今日は和泉屋へ水浴せが来る、といふのでワアワツといふ騒ぎ原惣太郎は二十年も前に行なつた水祝ひといふのを悉皆承知してをりますによつて待かまへてゐる、辨慶仁王の兩人は子分を七八十人連れて、各自に一杯づゝ水をもつてウワアツと遣て來た、辨「サア和泉屋久兵衛はんの若夫婦に、挨拶のために來たのぢやサア出なはれ、何うしなはつたのや、とつとと出なはれ」仁王の八十五郎、とオイ和泉屋何うした、サア今日は若夫婦に初對面の水浴せぢや」其處へ原惣太郎が出て、惣「此は皆さま方、私は常家の主人に代り申し上げます」辨「何だい」仁「何だいゴテ」言やはつて、何やい」惣「一體此水浴せは慶安の元年正月行はれたざり、只今のところでは打絶たものでござりますし

て、其節江戸の幡隨院長兵衛といふ方が、斯ういふ事は諸人の難儀をすることであるから、止たら宜らうといふので、大阪三郷の若い者は遂に其長兵衛さんの御説諭に、ピタリと止た次第でござる、然るに近ごろにいたり、又々水浴せといふ事が初まりましたが、以前の水祝ひとは事異り、各々方には甚はだ其式も相違してをるやうに思はれます、承まはりますれば、此大阪において男を立てござる俠客の人々と聞あよぶ、抑も俠客といふは人の弱みを助け、強きに向ふといふのでござらう、何卒いたして今日の水浴せのことは、私よりお謝をいたしますからお免しを願ふ、お聞濟下さるか」辨「エ、何言うてやる、獄道や、其ないな青二才の言なざること、何で諾ことが能ふものか、措ておくれ、措なはれ」惣「ヤ、然やう仰せられんで」仁「エ喧ましいや」ザブリと惣太郎に水を注た、惣「ヤ、各々においては、理合分らずいたして無法なる舉動をなさるか無法なる事をなさればお爲にならんぞ」辨「何を言てゐる、獄道めが、イヤアイ」と各自に今手桶を打付つてかゝる、體を轉して陥込で行と、仁王の八十五郎の利腕をやつといふと押へた、仁「ア痛エ、何を」といふ奴を肩に擔いでエイと投つける、夫を見て辨慶の吉松、辨「爾ツ」と打てくる奴を、體を轉してドスンと松風の當身をくれた、ドシンと倒れる、ウワアツと騒ぐ、惣「各々抵抗をすると、生命がないぞ」と刀を引抜くワアツと驚ろいて一同の

若い者が後へ退る、途端に鳴戸瀧浪右衛門といふ相撲が、眞「ナニいうてのやはる、サアやんたはれ私が承知だ」弟子が、眞「スリヤ師匠さん宜うがすか」眞「サア皆の衆、日頃お手入をしてご恩を受けてを私が旦那はんのお家にかゝはる大事ぢや、サア無法なことを言やはるなら抵抗するぞ、其丸太を持って来い、サア皆の衆、何うしやはるんだ」ビユウと丸太を振廻す、幸ひといたして負傷人もなく、相撲取が丸太を振廻したので一同がワアツと逃る、途端に大阪東の町奉行石丸石見守

此の人は寛文三年卯の八月十五日、大阪東町奉行仰せ付られ、翌辰六月二十六日に上著し、延寶七年未の五月十一日大阪において卒去さる、

其石見守殿御勤役中、延寶二年正月十一日に和泉屋久兵衛方の騒動、夫が爲に御出張に相成まして、直に天満與力其他同心を率て夫々悪黨共をお召捕になつた、和泉屋久兵衛方は別に構ひはない、原惣太郎は鳴戸瀧浪右衛門と共に奉行所へお呼出を蒙り一々お所調べになる、と惣太郎の申分は立派に立ち却てお賞めに預り、辨慶の吉松、仁王の八十五郎は、罪狀明白なるにより遠島になる其他の悪人どもは追放等の殘らずお處刑を蒙る、乃で大阪市中は穩かになりまして、和泉屋久兵衛、無事に此が相濟だったので、原惣太郎へは謝物を贈る、鳴戸瀧浪右衛

門へは相當なる仕衣施をした、然るに惣太郎は夫ほどの事をしたが、相替らず水汲をしてをります、ところが茲に淺野采女正長友公、此の方さまが大阪のお藏屋敷にも居であそばした、播州の赤穂へお歸城になりする途中お藏屋敷にて何かお取調になることがございまして十日ほど御逗留、其とき御供をして参りましたのが、大野九郎兵衛、奥田孫太夫、岡村松之助、岡野金右衛門、堀部彌兵衛、重立たところでは是だけだ、然るに一日の事采女正さまは、天満天神にも馬でお往でになりました、此ときお供をしたのが、奥田孫太夫、岡村松之助、岡野金右衛門、乃で采女正さまには御馬上で、右三人の外に、馬丁草履取をお連になつたゞけて、丁度御參詣が濟で天神橋へおかゝりになる、此天神橋は大阪名代の大橋でございします、折しも烈い風で冠ッておらせられるお陣笠を飛ばさうであるから、岡野金右衛門が、金恐れながらお脱あそばしては」と申し上る、采女正さまも、采女尤もなり」とお笠の紐をお解あそばす、タトンに一陣の強風サツト吹来りました、お笠はお手を離れて、ビユウと飛び其ま、水面へ落た、尤も沈みはいたしません、漸々と流れて行く、御家來の面々は、アレ〜といふ内に、お主君のお陣笠が水面に落ち、然も大河の真ん中だから手の付やうがない、各々顔見合せて如何せんお躊躇ふ折からは通りかゝつた水汲體の一人の若者、斯と見るや、突然擔いでをった水

荷を下し天秤を置き、向ふの岸よりザンブと水面へ飛込だかと思ふと、全で半身水面に浮てを
 る、忽ち援手を切て其流れ行く陣笠に近寄り、忽ち此を取て引返す、其水練の早きには、
 八方より見てゐた一同の者感服して、人間業とは思はれんくらゐ、頓て陸へ上りまして、其濡
 たるお笠の水を拂つて此方へ來り、御馬上の采女正さまへ一禮して、次の衆へ差出した、岡野
 金右衛門此容子を見て、實に感服いたしたによつて、禽失禮ながら其許は何處に在だ、御手
 前は名護町の桶職熊吉方に厄介になつてをる、原惣太郎と申す、禽何をして在だ、御水汲渡
 世をしてをります、禽左様でゐるか、之は淺野采女正様、主君も御満足にあらせられる、何れ
 御沙汰をいたす、御苦勞でござつた、惣、エー恐れ入ります、爰で原惣太郎、マア衣服は濡ました
 が其まゝ、水桶を擔いで戻つて参りまして、此事を桶職熊吉へ話しをする、金左衛門夫婦此を聞
 て、禽夫は結構だ、マアお湯にでもお往でなさい、で湯に入て相替らず二階へ登つて書箱を讀
 である、ところへ羽織袴、立派な大小を帯したる武士、家來を連れてやつて來た、去、御免下され
 △「視方、大變立派な武士が來ました」熊、然うか、ぢやア此方へ粗忽のねえやうにお上申せ
 △「何うか粗忽のねえやう此方へお上んなせエ」熊、ういたのは武士、不作法千萬なことを申す
 と呆れる熊、ヤイ、其様なことをいふ奴があるか、爾たちに粗忽のねえやうに、お武士さまを此

方へお通し申せと云たんだ、△然うですか、ぢやア言なほしませうか、頓て武士は、去夫へ控
 えてをれ」と下郎を控へさして、去、御免」と上つて、「此方は淺野采女正家來大野九郎兵衛と申
 する者、當家が桶職熊吉と申すか」熊、エー私が熊吉でございます、何か御用でございますか
 △「此方に原惣太郎といふ方が在であるか」熊、エー夫りやをります、惣太郎さんに御用です
 か、エー惣太郎さん、呼れて二階から降て來た、熊、此も武士さんが御用だ、惣、ハ、此は
 お尋ねを蒙りました原惣太郎は身共でございます、△「ア、此方は淺野采女正家來大野九郎兵衛
 と申す者、今日主君が天神橋にいてお陣笠をお落し遊ばしたるを、其方が水中に飛び入り
 お陣笠を取揚げくれたるよし、主君が大層お喜びである、此は其方へ下さるから有りがたく
 頂戴いたせ」大層な権柄づくでも目録三千疋を夫れへ出した、スルと惣太郎が、惣、拙者は只今
 當家に食客の身でございますが、斯かる謝物が欲しさに水中へ飛入て、お陣笠をお取り揚げ申した
 わけではない、斯やうなものは欲くござらん、お持歸りを願ひます、△「コレ其方遠慮には及ば
 ん、折角の思召だから頂戴してあげ、何うだ、惣、イヤ、斯やうなものは欲くござらん、御
 免」ツウ、ツと餘まり大野九郎兵衛が、眼下に見下した言種だからツウ、ツと起てしまふ、ス
 ト傍らに聞てゐた熊吉が、熊、オイ、武士、私のところにおなされるも武家は、金銭づくで水の中

へ飛込やうな、人間ぢやアない、三千疋ばかり有がたく頂戴しろたア、何てエ言種だ、サア用はねエ、トットと歸れ、グズ／＼すると打き擲るぞ、ヤイ皆な、此武士を擲れ」ヤ、大野九郎兵衛驚いた、去此は怪しからん」熊「何が怪しからん、乞食に物をくれやアしめえし、有がたく頂戴しろなんて、構はねエ、此九郎兵衛でエ奴を打擲け」大野九郎兵衛主従は這々の體で歸つてしまふ、弟子等はワアワと囁して、鳥親方、面白うございませす」熊「惣太郎さんへ、無禮者を逐拂つてしまひました」熊「イヤ、今二階から見てもたかナカ／＼の騒ぎ」熊「エー爾さんだから耐忍をしたんですが、私どもなら疾に腹を立てしまふんです」熊「大きにお手数」熊「エ、モウ彼様な奴は有アしません、人面白もねエ、榎柄づけに有難く頂けなんて、威嚇してやつたらドン／＼逃て往ました」熊「夫ア大に御苦勞でございませす」跡で、熊「サア／＼マア武士を逐拂つた祝ひに酒宴をしろ」何が祝ひぢやない、熊吉が職人一同に酒を飲してゐる、彼此れ二時ばかり経と、又一人武士が來た、主御免下さい」△親方、又武士が來ました 熊「サア棒の用意をしてあげ、今度氣にくはねえ事な吐しやアがツたら、頭から水を打かけて打れ」主御免下さい、桶職熊吉どのお宅は此方でござるか」△エー熊吉宅は此方で」主御免下さい、淺野采女正家來堀部彌兵衛と申す者」△親分、今度ア堀部彌兵衛、先のと違つて大變に可憐だ」熊「ぢやア可憐に

お通し申せ」△何卒町噂にお通んなすつて」熊「ナせ然う爾たちは物が間違つてゐる、仕やうがねエな」熊「此は初めましてお目にかゝるが手前は堀部彌兵衛と申す者でござる」熊「私は當家の主人熊吉と申す者」熊「先刻の大野九郎兵衛といふ、彼れは淺野家御家老でござる、然るところ此方のお氣に障り、大野殿も大きに驚いて屋敷に立歸りましたが、實に先刻のは貴君方のお氣性、又御當家に御厄介になつて居られる、原惣太郎殿の御心中を試すため、態と榎柄づくに參つた次第でござるから悪からず御勘辨くだされい」熊「へー、其様なことゝは存じませんから私どもは御無禮をいたしました、何うか御勘辨なすつておくんませエまし、其様なことは一向に存じませんでございませす、で、御用は」熊「何うか原氏にお目にかゝりたい」熊「然やうですか……原さんへ」今度は惣太郎、袴を穿て夫れ出て參りました 熊「ア身共は堀部彌兵衛金丸、御貴殿は」原「手前は原惣太郎元辰」熊「先刻大野九郎兵衛、御貴殿へ對して御無禮を申し上たやうでござるが、彼は態と御貴殿の心中をお試し申したので、失禮ながら三千疋の目録を慌てゝお手をおかけになるやうな御心底では、我主人も餘りお好みなさらん、然れども金に目をお呉れなさらず、水練をもつてお陣笠をお取くだされた、其水練のお美事なるにも目がつき何うも町人のやうでない」と仰せられる、乃で我主人藏屋敷までお往で下され若主取のお望みあ

らば、此彌兵衛と周旋をいたす、如何でござらふ」馬真に有がたい仕合せ、手前は丹波の國黒井村の郷士原勘兵衛の一人原惣太郎元辰と申す、主取仕官の望ある者にござる劍術は杉下真影流の極意、馬術水練其他聊か心得がござります」馬、夫は幸ひのこと、然れば彌兵衛、此より御案内いたす、兎も角も我君公の思召でござるから、北濱藏屋敷まで御出張下さるやう」馬「然らば御供致すでござらう」此とき桶職金左衛門夫婦、熊吉も大きに喜び、馬いよく原さんが武士道の心もちを達する時節が到来した、真に御目出たい」と言て送り出しました、夫から惣太郎は堀部彌兵衛の案内で、北濱の淺野家の藏屋敷へ参りますと、モウ主君はお待受であつた、不思議なもので、後にも家の騒動の時に、お爲になるべき人であるから、何となく見ぬ内から慕しく思召れ、夫となくお待受である、其處へお次まで罷り出ましたる時に、馬「恐れながら只今原惣太郎元辰、同道つかまつりましてござる」今太儀に存する、早速此へ出せ」と仰せらる乃で采女正さま御前へ原惣太郎罷り出ました時、最前は水汲の扮装で川に飛込ましたから、餘り容子も宜しくなかつたが只今袴を着て夫へ出ました處は、一見識でござります立派なものであるから爰で段々お側から身分等をお尋ねになります、で、馬「私は丹波の國黒井村の郷士原勘兵衛の倅原惣太郎元辰と申す者、當大阪に出まして主取仕官の望みある者」と申し

上る、今然らば當家へ隨身いたすか」とお尋ねであつた時、馬有難く御奉公申し上げます」今然らば祿に望みがあるか」馬「決して食祿等に望み此なく」夫より段々お尋ねがあつて、本人の容子を御覽になりましたところ、ナカ／＼一通りに心得てをるに、況て讃岐の丸龜にあいて、山崎家の悪人を切て立退たる次第までを仔細に申し上た、仍て尙夫等をお賞しあつて、百石にお召抱へお馬廻りを仰せ付られ、早速お手當を下しおかれる、爰で惣太郎初めて自分の本意を達しました、丁度國を出てより此が三年目でござりました、で早速此事を國表の母親の許へ申し送る、何れ住居が定まれば又々申し上げるといふので、爰で御奉公いたす、夫からお國表へ御供をいたして、赤穂城内にをりまして、尙采女正さま御代、御奉公してより三年目に鹽田のことについで功あつて五十石御加増を賜り、百五十石にお取立になる、其時堀部彌兵衛は江戸表にてお留守居になりました、乃で堀部は初て御奉公をした節、同道してくれた廉で別て親しく心得てをるから、其出世の喜び状を贈つた、乃で彌兵衛から其厚意を謝したる返辭を遣した末に、如何にも其許の名が、惣太郎と言てゐられては幼年の者のやうだから、改名されては何うだといふ忠告がありました、成程と茲で惣太郎を惣右衛門と改めました。夫から三十一歳のとき二百石に昇進した、乃でお國表に居る頃ほひに、御城下お出入の町人木屋作左衛門といふ

者がある、苗字帯刀御免である、此者から、本如何であらふか、失禮ながら我娘を貰って下さらんか」と言れ、自分でも至極良縁と心得、承知の趣を答へて、此作左衛門の娘お政といふのを貰ふことになり、君公へもお届か濟で、惣右衛門三十一歳のとき、二十三歳になるお政を迎へる、乃で自分が斯く出世をしたのは、最初桶職金左衛門の厄介になり、夫より是に同道せられて熊吉方へ世話になつた、其報酬をせんければならんといふ考へから、モウ金左衛門は老人だから、伴分の熊吉を引立やうと、乃で熊吉を大阪の淺野家お藏屋敷の、桶職お出入を取計ひまして、此が傳で尙御本家の大淺野家のお藏屋敷へまで、お出入が叶ふやうになり、茲で熊吉は五人扶持を頂くやうな身になりました、眞に何うも昔しの恩義を忘れずいたして斯のごとく周旋てお遣になつたから、桶職親子の喜びは一通りでない、是より惣右衛門は尙追々立身いたしまして江戸詰となつて、足輕物頭三百石にお取立、モウ此とき主君は内匠頭さまである殊に赤穂の藩中で原惣右衛門ぐらゐ出世をした者はない、夫だから他の譜代相傳の家來方は、原惣右衛門は人物も伶俐だ物も出来るが、眞に幸運な人である、と二代の君のお覺を目出たき出世の有様には、皆羨やむくらゐ、何うか原どのに類似たいと何れも慕ふくらゐ、夫であるから矢頭右衛門七の父長助が初めて男子を儲けたとき、惣右衛門に名づけ親になつて右衛門七と命て

貰たくらゐ、夫から惣右衛門は、初めて内匠頭に令弟のあることを申し上げた、で、公夫も取立つかはす」と眞に有がたい思し召にて、丹波の黒井村にをりましたる舍弟惣次郎、此者を呼寄せまして、母もろともに自分かたへ引取りました。

で此惣次郎が原惣太夫となりまして、淺野大學さまの御家來となる、此は淺野内匠頭さまの御舍弟、其御分家附を仰せ付られました、然に未惣太夫の方に嫁がございせんから、母は其方へ往て始終此惣太夫の始末をしてをりまして、眞に何うも親孝心でございます、兄弟ともに忠勤を勵み、何れも其主君を大切に母親に孝をつくしてをりましたが、自由ならぬは浮世の例ひ眞に残念ながら、元祿十四年三月十四日、内匠頭さま殿中の御手違ひとなる、即日田村右京太夫さまお屋敷の御庭前にてお腹を切といふやうな有様、サア此時に原惣右衛門、實に江戸お屋敷にあつて、堀部彌兵衛金丸と相談をして、江戸お屋敷の始末萬事を取斗ひました。

乃で第一番の早打が茅野と早水の兩人、第二番の早打が片岡源五右衛門、乃で第三番の早打といふ場合になつて、モウ此時は江戸の屋敷は公儀へお取上となる、家中の面々は散々破亂々々といふ際で、血氣の者は早打を勤めてくれず、是非なく惣右衛門が此を勤めねばならない事になつた、併し自分は近頃餘り身體も宜しくないから、逆も赤穂城まで身體は持まい、と斯う思

ふから、妻の政と四歳になる倅の惣十郎を、大學さまの許に御奉公をしてをる舎弟の惣太夫の許に預け、母親には早打に参る次第を申し述べて、餘所ながら暇を告げ、跡の始末を能舎弟に頼んで、彌々江戸の屋敷を出る時に、モウ途中で死でも早打の御用向は達するやうにといふ考へで、此度主君が傳奏使響應の役を蒙りつた初めから、殿中の御刃傷、田村家にての御切腹、高輪泉岳寺に御尊骸を葬送申し上て冷光院殿前相府朝散太夫水毛玄利大居士といふ御位牌、江戸家老の藤井安井の兩名は有あふ金子をもつて逐電いたした次第から、江戸御家中の四方に散亂する目も當られざる状況、悉皆認めて、此を堅く封じて御城代大石内藏之助殿の宛にして、尙此を油紙に二重三重に包んで、駕籠の天井へ此を確と結びつけて、乃で江戸の屋敷を出るときが當年とつて五十歳、先に早打をいたしました早水藤左衛門は三十八歳の血氣の人、茅野三平は三十一歳、片岡源五右衛門は三十五歳、モウ早打といふものは四十が止り、四十以上になりましては、逆も長の道中保わけのものでない、百七十餘里の行程を、晝夜打通しで、駕籠に乗って揺れて行のだから身體が保ません、夫を原惣右衛門元辰は勤めました、途中で死でも不都合のないやうに、書面で分るやうにして江戸御屋敷を出ました、で駕籠の中では、名古屋ぐらゐまで保かしらんと思つてゐるから、風「コレ人足ども」人「ハイ」風「此は何處だな」人「ハ

イ、川崎の宿でございませす」風「モウ川崎まで参つたか」人「エッサアヨイサア」風「此は何處だ」人「ハエ、藤澤の遊行寺門前でございませす」風「フウん、藤澤まで参つたか……此は何處だ」人「小田原でございませす」風「何だ、小田原……此は何處だ」人「駿河の沼津でございませす」風「モウ箱根山を越たのか……此は何處だ」人「駿河の府中」風「此は何處だ」人「遠州濱松でございませす」風「此處は何處だ」人「尾張の宮でございませす」風「此處は何處だ」人「伊勢の龜山でございませす」風「此處は何處だ」人「攝州尼ヶ崎でございませす」風「ホウ、尼ヶ崎まで生きてをる」風「此處は何處だ」人「播州那和でございませす」風「エッ那和まで生きてをるか」風「此は何處だ」人「追鷹山の間道でございませす」風「オ、……此は何處だ」人「千種川でございませす」風「扱は、此りヤ赤穂まで生命があつたワエ」人「エイサア、ヤッサア、」風「此は何處だ」人「お城の大手でございませす」風「オ、お城まで無事であつたか」乃で御城中へ早打と言つたとき、大石内藏之助が、大「早打は誰だ」駕籠に判然と姓名がついてをりますから「人原惣右衛門殿でございませす」原惣右衛門と聞て内藏之助眉を顰め、大「ア、扱は江戸表若武士のうち早打を勤める者が無かつた、足輕物頭原惣右衛門元辰、當年五十歳に達する者、逆も無事ではあるまい、何につけても一方の片腕と頼むべきものを残念至極だ、近藤源四郎殿」近「ハッ」大「原惣右衛門は五十歳にして、初老を過たるものなれば、回生劑は充

分濃く御用意を願ひたい」近心得ましてござる」徳籠が降る、近御城中だ、氣を確かに持て」惣右衛門は、氣は確でござるから各々騒ぎあるな」近アツ」といふと近藤源四郎、回生劑の用がないから自分がグツと服用だ、スルト何ともない身體へ、恐しい濃といた回生劑を一杯に飲だから、近ウーン」てエと近藤源四郎夫へ卒倒した、甲ソ、近藤どのに手當をしろ」早打で乗込で来た原惣右衛門は何ともなくつて、無事で御城中に控へて居りました。乃で原惣右衛門は、馬江戶表の始末は此書状を御覽になればお分りになるやうにと認めて参つたに、生命あつて斯御城代にお目にかゝる事を得て、惣右衛門安心いたしました」と後は何とも言ないでポロ／＼泣れた、内藏之助も、内能うこそ原氏は早打の大役をお勤め下された、江戶表の始末もお察し申す」馬真に千萬添けなうござる」此から惣右衛門、江戶表の始末を悉しく物語る、借此より原惣右衛門は、城中にあつて萬事大石内藏之助とは以心傳心、言す語らず其意を通じ、死ばもろともといふ事は面に現はれてゐる、然るに此原惣右衛門元辰、いよく江戶表へ出まして主君の仇打をいたさうといふ時、亡君の御舍弟大學さまは、藝州侯へお預けの御沙汰を蒙り夫がために原惣大夫、母親、惣右衛門の妻、倅惣十郎等を引纏めまして、是非なく丹波の黒井村の以前住居つた地に退ぞくことになりました、其事は兄惣右衛門に告て

あるから、爰で惣右衛門は丹波の黒井村へ参りましたのは、此度自分は江戶表に出まして醫の容子を第一番に探り事をしやうといふ、尤も先には秘密として、前原伊助も堀部安兵衛も参つてをる其他の人も出てをるが、兎に角一同の取締をするのは、此原惣右衛門の役廻りであるから、兼て大石と打合をしまして、夫より次第に進んで黒井村へ廻つて来ました、ところが黒井村へ退いて以來原惣大夫は、兄上の御容子は如何と心配してをるところへ、惣右衛門が尋ねて来ましたから、實に母子兄弟夫婦久々のことゆゑ、互ひに涙を流して、御家の不幸が臣下一同の不運となり、今日散々破亂／＼と相成たが、併しながら斯の通り母上の御力で、未だ黒井村の田地畑が名主に預けてあつたのが不幸中の幸はひ、先食祿には離れたが、今日別に困ることがない、と夫や此やのことから段々に話しをする、乃で惣右衛門は、馬扱母上、此度私はテト用事を兼まして、一旦江戶表に罷り下るの所存でござります、就ては本年を老れました貴母さま、妻の政や舍弟惣大夫等がお傍らにをりますから何の仔細はないと安心はいたしてをりますが、當春以來お家の大變より、殊の外御苦勞をかけまして、何とも申し分がござりません」此時に母親は、世イヤ惣右衛門、主家の不祥は身の不祥と申して、實に主家の御家はち氣の毒に存じます、併し此度爾の江戶表へ出府するといふのは、妻は眞に喜ばしい、で何日

出發なるか「母、ハイ、今宵一夜は御厄介になり明早朝に出立いたす所存でござります」母、夫は結構なことであります」爰で惣右衛門、其夜は泊り、翌日になつて出立をしやうといふ時、母親が「室どうちへ惣右衛門を呼び、母、惣右衛門、お金の用意は宜いか」母、ハイ、お心づけは有がたうござります、金子は用意いたしてをります」母、では其方が此度江戸に行れるのは大石内藏之助殿を初めとして、警の上野を打取る所存であらうかな」母、ハイ、エ、然やうな事は毛頭此なく」母、ハイ、ヤ隠しやるな」母、夫は一寸お考へあそばせば、然やう思召かは存じませんが、ナカ／＼もつて然る大望はござなく、聊か自分に考へあつて江戸表へ参るのでござる」と言れて母親は扱は慎重をとつて母子の中でも眞實を明さんのだな、と早くも察して、母、夫では爾の考へを遂げて、立派に武士道をお立なさる」母、然らば母上、追て御沙汰をいたします、身をお大切に」母、其方も身を厭つて」母、夫では旦那さま、御道中お氣をつけあそばせ」母、兄上、途中までお送り申します」母、イヤ、夫では却つて人目に立つ」と爰で其暇を告て、黒井村を立出る、一二町此方へ来たが孝心の惣右衛門母上の事を思ひ出し、天にも地にも替がたき只一人の母上を、妻や舎弟に任せた上で、此より江戸表をさして主君の仇打うが爲に下ることなれど、ア、親子といふものは別なものぢや、これが今世の別れとなる事だから、尙

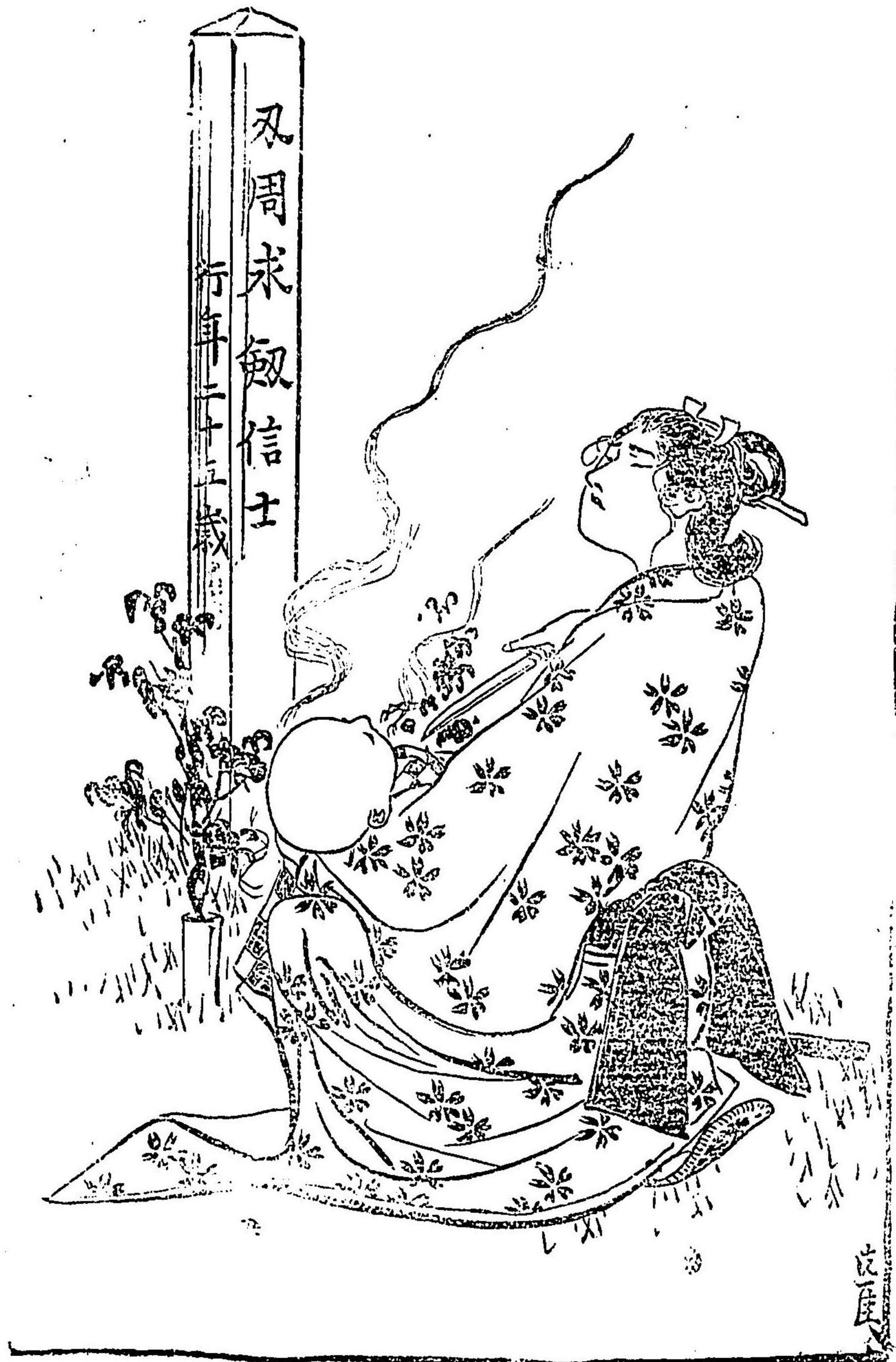
一晚逗留して、母上の何か心を慰めたいものと、爰で惣右衛門小戻りをして「此よ」母、ハイ」妻の政が出て、此は旦那さま何うか遊ばしましたか」母、ア、少と腹工合が悪いから、又途中にゐて重るやうでは如何と實は此へ戻つて参つた」母、ア、然やうでござりますか」惣大夫が、惣、兄上何うあそばした」母、ア、腹工合が何となく悪く、尤も昨夜から催ほしてをるので、若途中で重るやうでは如何と引返した……是は、母上、お暇を告げ引返し申したるは申し譯がござらん」と母親の手前、さまり悪げに辯疏をする、母、オ、爾が腹工合が悪いのに押して道中するのは宜ありませんから緩くりと養生しなされるが宜い未急ぐともあるまいから」母、ハイ」乃で其夜は母子兄弟一つ室に睦しげなる物語り、餘所ながら唐土の故事などを引て話をいたしてをる、此時母親は、扱は惣右衛門は孝心深き忤なり、一旦首途をなしたるも、途中より引返へせしは此母親に心のこりしものと見える、妻よりも尙重き主君に御恩を報さず、萬一不忠者にいたしては、冥土にござる亡夫勘兵衛どのに申し譯なし、と心中に思ひ極めて、母、ア、今宵は妾は先へ臥ります」母、然やうなら母上はお休みでござりますか」と此からお政は、母、さまも褥を延ました、今宵は大層お早く」母、ハイ、妾はモウ臥りますから、皆の者も臥つたら宜らう」是から母は寢所へ往きました、茲で惣右衛門も臥房に入る、妻や惣大夫も皆それ／＼枕

につく、グッスリ寝入って夜明近くに相成まして惣右衛門がフト目を覺して見ますと、何やら容
 子ありげな母親の居間に苦しげなる聲、乃で惣右衛門起出で、母親の寢室の襖を開けてみれば
 這は如何に、四邊は血汐のからくれなる物の美事に自殺の體に、吃驚いたして消のこる曉の
 燈火を掻立て、見ますれば未だ呼吸は絶ず、眞惣太夫、コレお政「惣ハイ」政「ハイ」眞母上が
 斯る御自害「眞」エ、ツ「眞」イヤ騒ぐな惣太夫……母上……此は如何あそばしましたることぞ
 さる「母」ア、惣右衛門、騒ぐまい〜〜と苦しき息をやう〜に、母、コレ惣右衛門「眞」ハ
 イ「母」其方は大望抱いて江戸表へ下るのであらう、此母親に其大事を明してはならんと、如何
 やら尋ねても本意は知らさず、然れども夫と悟りし此母親、潔きよう其方に立出をさせたるの
 に、腹工合が悪いと申して引返したるは、常日頃母を思ふの孝道、眞にもつて忝じけなくは
 存するなれど、斯相成る上からは、母に對する孝道より武士道を立んければ、其方が今日まで
 頂戴したる恩祿の甲斐があるまい、此母一人の心を案じ、萬一の場合にお役に立ぬ其時は、人
 の讒を被ひらねばならぬ、然ある時には冥土に在する亡夫勸兵衛どのに、定めて柔弱なる育て
 かたをしたやうに聞えて申し譯がない、サ夫ゆゑに、老先短かき此母が生命を縮めた其仔細は
 今現に申さずとも兼て其方胸中にあるであらうから、跡に構はず早う立出いたしくれ、其方が

臆する其時は、此母は却つて黄泉の障りなり、其方が勇しく出立するのを眼前に見て死にたい
 ど「眞」ハ、母上が斯るところの御自害あそばしたるは、借こそ吾儕へ對しち力を添下さ
 まするのか、斯く相成るも前世の約束、且亦此惣右衛門の心を勵まし下さるは、眞にもつて、
 有難くも勿體なく、如何にもお察しの通りの大望を抱いてをれば、何卒御安心下さる様に「眞」オ
 、能う申しくれた、夫と察して此自害必らずとも、怯れるな「眞」ハ、ツ、コレ惣太夫水を持
 て「眞」ハ、此から母親の四苦八苦の苦しみ断末魔に水を與へました、其うち母は莞爾り笑つて
 其まゝ美事の最期を遂げました。
 で惣右衛門は、跡々のことは妻のお政と舎弟の惣太夫に佛事供養を頼み、我一度母の御上を氣
 づかひ引返したるに、母上は亦我が大望をお察しあつて、此がために心鈍つてはならぬと、御
 自害あそばす事になつたは、返す〜も残念のいたり是といふも元を糺せば吉良上野介、御主
 君の仇たるのみならず、大切なる母上の仇、ヤワカ此怨を晴さでは置ん、是より氣を勵まして
 丹波の國黒井村を跡にして、夫より山科に來りまして、大石内藏之助に對面をなして、母親の
 自害したことを語ります、と、内藏之助も涙を浮べ、眞ア貴殿の心中も察し申す、併し江
 戸表のこと何分も願申す「眞」委細心得ました」と此より原惣右衛門、いよ〜江戸表をさして

道中へ踏出す、頓て江戸表へ来りまして、吉良の容子を伺がうところの他の若武士の取締をして、自分も共に吉良の容子を伺ひたいと、既に吉良家が呉服橋うちより、本所松坂町へ屋敷替になつた事を聞出し、此幸ひと、未吉良家で建増等の工事にかゝらん前よりいたしまして、ツヒ傍のところが古家を買まして、小春屋治兵衛と變名して蕎麥屋を開業ました、其うち建築が出来て吉良家が引移しとなる、近いから奥も家中も此蕎麥屋に蕎麥を申し付けるといふやうなわけ、夫ゆへ幾ら嚴重になつてをりまして、吉良家の中間は皆此へ参りまして蕎麥を食ひ借などをするやうになりましたが、此主人を元淺野の家來の原惣右衛門とは、誰も氣がつかません、惣右衛門の小春屋治兵衛は、幸はひ丹波訛りの言葉を使つてゐるから、此りや氣がつかない筈だ、其様なやうな工合で充分吉良家の動靜を探りまして、大小となく一々山科へ知らせる、其うちに内藏之助も江戸へ来る、いよ／＼打入の日取も定りましたから、此蕎麥屋の見世を閉てしまふ、近所では彼のくらの繁昌して見世を閉店てしまふとは變だといづれも、其時は不審に思つたが、後に此が原惣右衛門であつた事が知れ、成ほど、初て合點したく／＼のでした。

原惣右衛門終



又周求劍信士

行年二十一歳

磯貝十郎左衛門

磯貝十郎左衛門正久は側用人、百五十石を頂戴して、仇打の時が二十五歳年は若い天晴なる者でございます、此方が十七歳の時に淺野内匠頭さまの御前で、お能の太鼓を打ましてお褒めに預り十八歳の時に江戸表からお國へ参ります節、御内命を受けてお先へ赤穂へ乗込むことになり、君公のお荷物を守護して参りました、然るに其當時三州から遠州にかゝりまするに、先舞坂新居、彼の近傍を通行の時に、松平彌五郎さまと申し上るお旗本が何時も下り上りの大名の荷物其他の物を妨げる夫を磯貝十郎左衛門が、松平彌五郎どのを取て押へて、以來諸大名の荷物を妨げをなさらぬ様にと教訓を與へまして、以來は道中に出て狼籍は働かぬ様になつた十郎左衛門は此事について一言も發しなかつたが、早晩内匠頭さまのお耳に入つて大層お喜び具に若年の身をもつて、松平彌五郎の亂暴狼籍を咎めたといふは威服の至り、倍々天晴れな者である、夫からお取立になつて、十八でお側用人となつて、お側を離れず君公の御用を勤める、學問が出来まして、お能の心得があつて槍が免許で劍術が出来来る、折々御道場へ出まして、槍を取て若武士に教へる、ア、磯貝先生の槍は恐れ入たものと、皆威服をする、何時の間に修

業したかと思ふくらゐ、處が十郎左衛門は僕の文内と兩人ぐらして未妻を迎えぬ、夫ゆゑに君公も良き妻を持して遣したいと、種々心配つてゐらつしやると、某時十郎左衛門を召て、

「其方は既に當年二十三歳最早妻を迎へて宜いではないか」士眞に有がたい思し召でございませうが、私は二十五歳までは妻を持たせぬ所存にございませう、二十五歳を過ぎまして、然るべき者がございましたる時迎へる心得でござります」因ア、夫も眞に其方の宜い心がけである、就ては余が疾より見抜てゐいて其方に娶合たいと心得るものがある」士ハ、夫は何人でございませう」因、夫人の手許に仕つて奥向のことを勉めをる、影山惣兵衛の娘八重、此を其方に娶合しとらせる心得、彼女は眞に良き心懸のものであるから然やうしては何うぢや」士眞に主君の思し召し有難く承知いたしました、就まして二十五を過ぎまして宜しく願ひ上ます」因、然やう致すが宜い」乃で夫人から八重を召て、去、其方は主君の思し召によつて、兩三年のうちに、磯貝十郎左衛門へ、主君の御媒約をもつてお遣しになるから然やう心得てをたら宜しからう」ハツと顔を赤らめまして、入、父母の考へもございませうから、宜しく親ごもへお話しを……」

其後、君公から影山惣兵衛を呼出しになつて此事を仰せになると惣兵衛も大に喜び三年の後に婚禮を舉るといふ事に婚約が出来ました、然るに其翌年の元祿十四年の三月十四日、君公

の御刃傷田村家で御生害と聞て磯貝は自分も腹を切て冥土への御供をしやうか、イヤ待て斯のごとき家の大變、御主君は田村家の御庭前にて御切腹、切てのことに御遺骸の御供をしやうと田村様へ出ました時、丁度千馬三郎兵衛、續いて富森助右衛門、片岡源五右衛門等に、田村さまの御門前で會た、兎に角此から御尊骸を頂戴をして、御近臣ばかり三十有餘人、御遺骸を、朱毛氈に包んで御怒籠に載せて哀しく泉岳寺へ御葬送申しあげ磯貝はお墓の傍に一夜泣つて夜を明しました。

翌十五日十郎左衛門は文内に申し付け、諸道具を拂つて金を纏め十六日の夜に江戸を出立て、文内を供に連れて泊りを重ね赤穂へ乗込み五十三人神文誓約血判の一人となりましたが十郎左衛門は大石の命により直に江戸表へ下り敵の動靜を探る事になり五月廿日京都から江戸表へ出立いたしました、佐世の中山館の餅の茶店で主従腰を下し種々な異つた話をして居ると彼方の縁臺に、年の頃は二十五六、品格の宜い商人體の者が腰を掛け、茶を飲でゐる、スルト其傍らのところへ兩人、矢張商人體の者が腰を掛けて茶を飲でゐる、其兩人の方は、年ごろ三十五六に四十二三、相格の悪い此一人の奴は道中刀を帯てゐる、上目をつかつて何れも二十五六の商人を、デョツ／＼と見てゐる、何うも其容子を文内が見て、其彼の彼方の町人は、兩人の連

の者に氣を置いてゐるやうですが如何でございますか」土「然うだ、訝しい」と見てゐる、其うちに先方は茶代を拂つて、「女中さん此處に置きますよ」磯貝主従も續いて立つ、女有がたう存じます、途中も氣をつけ遊ばして「餠の餅屋を出まして十六町の間は登り道、菊川坂、夫より諏訪の原、夫から兩側松山道に相成てをります、其今諏訪の原まで來ると、何だか大きな聲がする、文内を連れて磯貝十郎左衛門が、土「何だ文内」文「旦那さま、先刻の若い商人が兩人の相格の悪い商人に……」見ると一人が胸ぐらを掴まへて、甲「此野郎サア爾が懷中に持てゐる錢を出してしまエ」前後に往來の無いのを幸はひ、今兩人が此若い男を強迫してゐる、若「イエ、私は上方で仕入をしまして、お金は些とも持てをりません」甲「ナニ、金は少しも持てゐねエ、巫山戯たことをいふな、爾が金を持てゐるかゝるねエか分らねエやうな、其様な己ツちぢやアねエ、氣の毒だが、東海道中仙道股にかけてゐる己たちだ、誰が何程金をもつてゐる、夫が分らねエくれエなら、舞阪の宿から此處まで附て來ねエ、爾は懷中に百兩あまりの金を持てゐる、夫を出せ出さなけりやア致方がねエ、近頃荒療治をしたことアねエが、兄弟殺ちまはらう」と引拔た者「アン人殺し」と若者は逃出す、甲「爾れ」と跡を追かけやうとする、此方は身體を丸くして元の餠の餅屋の方へさして逃て來る、甲「爾う逃さねエ」と追かけて來る奴を、十郎左衛門、

土「爾れ何をする」と一ツ當てた、甲「ウム」と不意ですから「アツ」と顛覆かへる、スルト尙一人が、甲「此青武士生意氣なことをするな此奴」と懷中に隠でをりました七刀を抜て飛かッて來る、體を轉して、土「無禮をするな」乙「何を吐しやアがる、爾等のやうな小僧に仕事を妨げられて堪るものか、ヤイ己を何だと思つてゐやアがる、此街道で泣子も黙止る岡部無宿の文助、今爾のために顛倒けえつたなア、鳴海無宿の長次といふものだ、己たち兩人が仕事にかッつて逃したことアねエんだ、己の仕事を妨げる青武士、餘計なことをするなッ」突かけて來る、其利腕を取て肩にかけて投つける、乙「此畜生味なことをする」と起やうとするを、土「ソレ文内、繩をかける」乙「心得ました、何ういたしませう」土「ヨシ待て」暴れて可ないから、グツと一ツ咽喉をべると、ウンと呼吸が止る、土「裸體にしてしまエ」文「宜しうございます」倒れてゐる奴を兩人とも素ッ裸體にしてしまふ、尙其奴等の下帯を脱て高手小手に捕縛つて、傍らの松の立樹へ兩人を細で結びつけ、足も結びつけ、手拭で咽喉の所から後ろへ廻し松の樹へ結びつけ、乃でウンと一ツ臍の下を活を入れる、ウンと兩人が我に復ると裸體で松の樹へ縛りつけられてゐる、其前のところへ衣服が悉皆置てある、土「文内、最前逃たる町人は、江戸の方へ下るやうだから搜して來い」乙「ハイ、畏まりました」と搜しに行く、彼若い町人は、驚いて一散に驅た

が、モウ逃られなくなつて足が畏縮で松の樹の間へ飛込んで震へてゐる、ところへ文内進んで来て、文「モシ爾さん」若「エー、生命ばかりはお助けを」文「冗談言ちやア可ません、盗人ぢやアございません、私の旦那さまが、今悪漢を取て押へ、爾さんの危ふきところを助けて下さるんだから、決して御心配には及ばない」若「ハイ、夫では貴君お助け下さる」文「モウ大丈夫、旦那の仰しやるには、江戸に下るやうだから同道してやると仰しやる」若「へエ、有がたう存じます、夫から文内同道して来ると、松並樹へ結びつけられて二人の奴が青くなつて、甲「何卒旦那、御勘辨下さいまし」土「コソ能聞け、身共は其方等を成敗をする天下の役人といふわけではない、然れども弱さを助けるは武士の例ひ、今其方等が上り下りの旅人を捕へて金銭を強奪をする、間違へば生命を奪といふ強悪なる奴、憎んでも飽たらざる奴、捕へたるを幸はひ、上役人の手へ引渡すが當然なれど、然やうな暇のあらざるゆゑ、此松の樹へ縛りつけたのだ、以來改心を下さい」動くと咽喉のところを手拭で結ひてあるから、何うすることも出来ない、筆墨器を取出して半紙へサラ／＼と認めて、木の枝へ刺て懸て結へた。

此者二人は岡部の丈助鳴海の長次と申して自ら名乗る街道の曲者なり某旅人の難儀を救ひ此

奴等兩名を捕へて斯のごとく棒縛をいたしたり上下往來の諸人は能々此奴の顔を見覚えて此を道中のゴマンノハイと御承知なさるべく候

天下無祿の浪人

某

と認めた、土「サ文内、此で宜しい」文「成ほど此ア宜しうございます、ヤイ、其方たちが名乗つたから、旦那さまが此通りお書なさる」甲「へエ、有がたうございます」此れとも有がたかアない、乃で磯貝十郎左衛門、右の町人と文内を連れて、土「サア急がう」と急ぐ、二人は迷やうと何う身を悶いても、身體が痛むばかりだ」甲「オイ兄弟、何うにかならねエか」乙「何うにもならねエ」甲「何うも昨夜の夢見が悪い、土龍に臍を穿られた夢なんだから、何うしやう」乙「何うしやう」乙「何うも仕やうがねへ」ところへ下上りの町人が是を見て、甲「ヤア裸體で縛られ何か書てある」と近よつて讀で、甲「ヤアゴマンノハイだ、大きなゴマンノハイだ」乙「エーゴマンノハイ」

▲「此處の前にある財布や衣服は爾のか」賊「へエ、私のでございます」▲「己たちは江戸の職人なんだ、上方見物の歸りで少し路銀が足ねエんだ何うだエ財布の中の金を貸してくれ」賊「エー夫ア皆な他人から取た金ですから、繩を解いてくれりやアお持なすつてもございます」▲「ぢやア此處に三兩あるから一兩借る」賊「皆なでも宜しうございます、早く解て下せエ」▲「サン解

てやる」懐中から小刀を出して、「サア解てやるよ」騨有がたうございませす」突然頭髪の鬘と根の元結を解てやツた、騨「オイ、己の金を持ってくばかりで、繩を解いてくれねエのか」

▲「只解てくれといふから、頭髪の髪を解てやツた、金は借て行く、ハイ然やうなら」サア何うもゴマノハイと分ツてゐるから、往來を通る人の悪い者が頭を打る、蹴たふす、唾を吐かける、其揚句に助からないで、遠州濱松の御用聞加納屋才治といふ人が子分を連れて通りかゝつて、此容子を見て、オ、友「友」オ、紐を解て本繩をかける、兼て街道で荒仕事をして、多くの人に難儀をかけた丈助長次の兩人だ」友「御用だ」騨「ア、御勘辨なすツて下さい」友「神妙にしろ」騨「此よか神妙には出来ません、動くことは出来ません」夫から此奴を縛つて、加納屋才治親分が、遠州濱松をさして引致したのは其日の夕景でございます、磯貝十郎左衛門が此奴を棒しばりにしたのは、全く諸人助けのため、トゥ、天下の御法のお繩を頂戴したのは宜い氣味。此方は磯貝十郎左衛門が右の町人を連れ金谷の宿は煙草屋源助といふ宿屋へ着きました、其晩、十「貴君は何處の者」騨「私は江戸表芝源助町中田屋金兵衛の伴清次郎と申します父が古道具屋をいたしてをります危ない場合をお救ひ下され、眞に有がたうございませす」十「ア、然やうか、眞に道中に悪漢があつて諸人が難儀をする、是から拙者は江戸表へ参るから同道して遣は

さう」十「エ、有がたうございませす、未此から先に薩睡時かございませす、箱根山もございませす、何うかお連下さいませすやう、爰で磯貝文内兩人、右中田屋の伴清次郎を連れ、江戸に著すると、芝源助町の中田屋かたに一時草鞋を脱ぎました、で親父の金兵衛は伴の命の親と聞いて下にも置かず待遇をなす、金兵衛は禮の百萬遍も述べた上金「さて旦那様は失禮ながら何方へ」十「此度江戸表で浪宅を一軒かまへて、暫時心を養うて其道を求むる所存でございます」金「シテ旦那様は誰殿さまの御藩でゐらっしゃいますか」十「イヤ御主人、斯やうに御懇意になりましたから、決して偽りはいたさんが、拙者は播州赤穂の淺野の浪士」金「夫では彼の三月も家が御改易になりました淺野さまで、夫は、失禮ながら主家の不祥は身の不祥、と皆さまが仰せられますが、お氣の毒さまなこと、私は鐵砲洲に聊か親戚で魚渡世をしてをります者が、淺野さまへ始終お出入をいたしてをりました、其者から當時のお話を伺ひましたが、夫はお氣の毒さまな事でございます、然ういふ次第でございますから、私どもの長家がございませす、若其様なことお間に合ますなら、私どもの長家へ勝手よくお住居あそばしては如何でございませう、十「ヤ、夫は忝けない、萬事家來もをることだから、彼に相談をして……」と返答して兩三日厄介になつて、十「文内當家の長家を借て、主取仕官の時節を待とうと思ふが如何」文「然やうでございませ

す夫が宜しうございます」斯ういふので中田屋の裏で、尤も一軒別建になつてゐる家六疊に上り口が二疊、臺所の次に四疊半があつて、一寸九尺ばかりの庭がございます、で礒貝十郎左衛門が本名では行んから、名前を替まして、内藤十郎左衛門といふ、元來礒貝は側御用人を勤めてをツて、百五十石を頂だいてをりまして、別に厄介もなく、文内を置いて、未御新造のお話しが定つたばかりで、錢を使ひたくも、堅固なお人でも使ひなさらぬから至つて有福で、彌よお家騒動で皆浪人となつた御家來の中で、礒貝が一番金を持てゐた。乃で十郎左衛門は、表へ内藤といふ表札を出して、文内に賄料を渡して、毎日深編笠を冠り、敵の容子を何か探らうと、始終呉服橋うちの吉良上野介のお屋敷の近傍を、夫となく歩行て容子を伺つてゐる、然るに秋元但馬守さまの御所望で、此吉良の屋敷をお取揚になつて、本所松坂町へ替地を下され、屋敷を建築するといふことを、礒貝は早くも聞出して、此事を山科の大石どのへ告ました、夫だから未呉服橋内に、吉良さまがお住居になつてゐる時分に、本所松坂町相生町近邊へ赤穂浪士が來て商賣を營なみ、準備をしてお屋敷の此處へ移るのを待つた次第である、丁度元祿十四年の八月十四日、泉岳寺のお墓へ參詣して其歸るさ高輪の車町に搦米屋源兵衛方に小山田庄左衛門の父小山田喜内がある、是は老體の身の上で此に厄介になつてゐる、フト思ひ付て十郎左衛門

は、庄左衛門が出府をしたかしないか分らんから、其容子を尋ねやうと夫へやつて參つた喜内は久振りに同藩の者に面會して喜び、喜「此は〜礒貝殿でござつたか、イヤ浪人いたして後ち、中氣のために腰がつれて殆ど歩行も自由ならず、御無禮を免し下されい」喜「是は〜喜内どのの御病氣の爲に腰のつるはお氣の毒なれど久々打絶たるが御機嫌よく、此邊へ通行いたし當家にお在の由、承知いたしをツたが、同行の者があつたからお尋ね申さなんだ」喜「オ、然やうか、拙者は斯のごとく身體自由ならざるゆゑ、既に國表へ參ることも能はず、伴の庄左衛門のみは國表へ遣はしました、如何相成ましたるか、未其仔細を委しく承知いたさんであるが、能う言て聞いたられば定めし御城代さまの萬事お指揮を受けたことと存じます」喜「然やう赤穂城中において、御賢息庄左衛門殿に深く御相談いたしたこともござるし、又御城代さまのお指揮に御同意のお方、殊に庄左衛門殿とは吾儕と違ひ、大夫どのも甚くお力に思つておらつしやるから御安心なさい」喜「然やう、未熟な伴でござるのに、大夫が然ほどに思召して下さるの

は忝じけな、拙者が斯のごとく身體自由ならねば、切て伴が二人前の御奉公をいたし、先祖代々頂戴いたしたる御恩祿に、報い奉つらんければ成ませんが、伴は未大夫さまのお傍に在るが出府いたしません」喜「然やう、御息は小野寺重内殿と、何か御打合せをなさる事があつて、

暫らく京都に足を留めることになつたやうです、又拙者は當時芝源助町の中田屋金兵衛方に、内藤十郎左衛門と申してをりますから、何ぞ御用のごさいますしたる節は、大丈夫の者をお遣し下され「喜ア、夫は〱源助町とあれば、夫は都合よろしくござる」土「今日は突然のことゆゑ何も土産を持参しません」喜「然やうなことは御無用、決て土産などには及ばん、只々貴殿にお目にかゝつて、老人真に喜ばしい」其うち當家の源兵衛は御恩人喜内さまへのお客と自身御茶やお菓子運ぶ、喜「コレ〱源兵衛、用があれば呼よ、ちと申し上たい事もあれば彼方へ遠慮せよ……」磯貝どのお氣を置れるには及ばん、當家の源兵衛は聊か余の恩を著せた眞に正直な良い者夫婦とも此方を大切に親のごとく扱かってくれる、イヤ夫は、主家の改易になつた話しをいたすと、拳を握つて吉良を怨みまするくらゐですから大丈夫でござる「土」然やうでござるか「喜」就まして何か宜きお手が、りでもござつたか「土」別段に此といふ手が、りもござらんが、殊によれば味方に取れば最屈意、吉良殿が朱引外の本所方へも屋敷替になるやうで「喜」ヤ、夫は有がたい、此通り身體利されど朝夕冷光院殿さまのお位牌に對つて、一日も早く相手吉良殿を打まゐらせるやう此方も祈つてをる次第でござる「喜」夫は忝じけない、能お知せ下しおかれた」と言つゝハラ〱と喜内落涙する。

十郎左衛門は夫より進んで赤穂城の城渡しから、一旦花岳寺にて御法事をいたして、内藏之助殿が山科へ立退れられたる順序をズツと話す、忠義無類の小山田喜内、聞度ごとに涙を流して喜こんでツヒ思はずも話しが長くなり、喜内の許にて日が没る、乃で米屋源兵衛が、「何にもございせんが御飯を進る」辭退をしたがモウ用意をしてある、腹の中ではア「迷惑千萬、茲で魚類でもあれば困るがと、是から次の室にある膳部に向つて見ると、菜は残らず精進物、湯麩に焼豆腐に茄子の煮もの、鯉節を嫌つて砂糖のみで味をつけたらし、女「お客さま」土「此は御家内頂戴いたす」女「何卒美味くはございせんが召上つて、今日はお精進でございますゆゑ」土「ヤ、ウ、如何なれば當家でお精進」女「小山田様が、十四日には必らず魚類を用ひてくれるなど仰せられました、夫は當年三月十四日にお主君が彼の通りお生害あそばしましたから、夫ゆゑ家のものは見世の奉公人へまで精進をいたしてをるのでございます」土「ハ、ア、然やうでござるか」と磯貝十郎左衛門ハラ〱と落涙をいたし、偕は喜内どののお話の通り、此家のごときはアカの他人でありながら、家内中精進潔齋とは忝じけない、美味く頂戴いたすと涙を見せず箸を取て、土「ア」志ざしの御膳部、眞に山海の魚類にござる珍味を頂戴いたし、磯貝必らず忘れは置ん」と謝辭を述べて喜内の室へ再び来て、土「ア」御隠居、當家において十四

日には精進物を出來れるとは奇特なと「其」三月十四日に御主君御生害あそばして以來毎月十四日には、此方から申さんでも精進をしてくれる「土」イヤ、如何ほど厚く世話いたしやツた者でも、一日増に薄弱に流れる世の中當家の源兵衛夫婦のやうな者は稀でござる……然らばモウ暇を「其」又何卒も尋ねを此邊を御通行の節「土」先お身體を御大切に「其」然らばお送り申さぬ、此身體でござるから是で御免を蒙ります「米屋」夫婦に、土「今日は種々御厄介、又小山田の隠居をお世話下すして手前も有がたく存する」源「イエ謝辭では痛み入ります、大恩うけた旦那様、何のやうにもお世話申さんければならので、ナカク思ふほどにも届きません、然やうなら御機嫌よう、ア「宜い月でござります」土「ア「實に宜い見晴しだ」と磯貝十郎左衛門表へ出まして海を眺め、十四日の月は玲瓏として、其月を見ました、宜い心もちにて源兵衛夫婦の志ざしを感じつゝ、金杉橋にかゝつて來ました時は、モウ夜の亥刻過になりました、今日の時計で十一時ごろになりました、其頃彼の邊は寂として往來も途絶てる、尤も舊曆八月十四日は未暮いから、定めし起てゐる家もあらうが表は皆閉つてゐる、で十郎左衛門は今金杉橋を渡らんとすると、橋の上に悄然と立たる姿は、確に婦人に違ひない、ハテ今ごろ人通りもないに、何か知んと立留つて舉動を見ると、伴の女は兩手を合して水面を白眼で伏拜む容子、ハ、ア此「少女の投身だ。

の投身だ。

月の明りに遠くから見ると、年は十八九にもならうかといふ女、定めし仔細もあるだらう、死を決するといふは定めし容子もあらう、金にでも困つたことか、聊かの事なら助けてやりた、とアツヤといふ場合、バツ／＼と駆寄つてウンと抱しめ、土「お待下さい」女「何卒其處をお離し下され」土「イヤ、押へたからは其仔細を聞んうちは、此手は放し申ません、サア／＼此方へ來て一ト通りお話しを」女「ハイ」衣服は悪けれど品格のある容貌の美しい婦人、磯貝は訊ては見ましたが、匆々言ん、土「然らば深更のこととござるから、兎に角拙者の許へお入來あれ」此から此婦人は何者か知んが自分の住宅へ運もどる、土「只今戻つた、文内、只今戻つた」女「ハイ、只今も開申します」土「締りをしたのか」女「イエ、然やうではござりませんか……ヘエお戻りあそばせ」土「和女は此方へお入んなさい」女「ハイ」氣まり悪氣に一人の婦人が入りましたので、文内は吃驚して、女「此は何方さま」土「イヤ、少々仔細あつて同道いたした」女「サア此方へ」女「是は御免下さいまするやうに」其ところへ小さく坐るを、文内、女「モ少と此方へお坐り下さい」土「ア「文内、お茶など進い」女「ハイ」此から茶を煎て出す乃で十郎左衛門は右の婦人に對ひ、土「拙者は赤穂浪人内藤十郎左衛門と申す、決て怪しきものではない、御承知の通り主家

が断絶したるによつて斯のごとく浪人の身の上と相成つて、只今此へ住居いたして、此より身の方法をつける積り、和女は何人であるか、今見受れば花の盛りであるが、此より苦の花も開かんとする風情であるに、此世の中を捨て死を決するといふは能せきならん何ういふわけで入水をするとの覺悟ありしか、お話し下されい」玄、ハイ、何を隠し申しませう、妾は備中松山の水谷出羽守の藩士西田太郎の娘菊野と申します」土「何と仰しやる、扱は元祿の七年にお家改易となりし、水谷出羽守どの、御浪士のお娘子であるか」菊「ハイ」土「這は不思議なること既に水谷家の滅亡の際我御主人淺野内匠頭さまは、搦手へお向ひなされたるが、御病中のことゆゑ、御城代大石内藏之助どの御陣代を勤め、其節水谷家御城代、杉軍太夫どのに、親しくお話し申したりといふ事を承はりしが、ア主家の不祥は身の不祥、此方どもばかりと思ひしが、矢張和女も水谷家の御浪士、夫から如何なされたか」菊「ハイ妾は其時十歳、父母に伴なはれ暫らく大坂に足を留ましたが、浪人のこと、別段此といたすこともない内に、父が煩ひつき、看病いたした甲斐もなく、遂に父は大坂にて相果て、萬端葬吊をいたしましたして、夫より母さまと、聊さか頼るべき者が麻布狸穴に吉田和三郎といふ、此許へ参りまして身を寄りましたが、御承知の公儀の御家人でございまして、其和三郎と申しまする親類の者が、毎日のやうに賭博を打ち、放

蕩に身を持崩してをりますことを、母も知ずに此者の世話になるうち、聊かある金は皆借つくされ、其上に親子が著替の衣服まで、其和三郎に巻揚られ、併し母は一心に内職をして、漸うに今年の春までをりましたが、遂に母は病氣となり、其中で妾が手當に看病を盡しましたる甲斐もなく、此五月の十九日に母は空しく相果ましてございます」土「ヤレ」夫は御愁傷、重ねを沈めよ、とモウ度々のこと、夫りや世話にもなりましたことゆゑ、何か他のことにて身を立て恩を報りたいと申しても、聊かたりとも聞入す、何でも妾を吉原の遊女にいたすと申すのを、承知いたしませんゆゑ敷度の折檻を受まして、彌々明日は女衞とか判人とか申す者が参りました、妾を吉原町へ連行といふことを、内々夫婦で話してをるのを聞きました、夫も母が病氣中恩義でも被むりましたわけなれば、随分其恩がへしに是非もないと存じますが、病中に早く死ねがしといふ素振で少しも構つてはくれず、妾が聊かばかり得まする賃錢、夫をもつて漸う世話をいたしました次第、夫ゆゑ身を沈めてまでも恩を報する程のことも是なく、眞に行末過去のことを考へますれば、此先如何なる憂目を見るも知れず、父を失ひ母に別れて只々心細く導のことは覺悟をいたし透を伺がひ脱出して、金杉橋から身を投じ、死で冥土の御両親に孝養をい

たしませうと、既に飛込まふといたしたところへ、貴君様が御通行になり、お助け下さいました次第でございます」と涙ながらに物語る、終始を聞たるところの文内、膝に手を置いてポロポロ涙を垂し、十郎左衛門は此菊野の心根を察し、「ア、お氣の毒なること、然ういふ次第でありますなら、失禮ながら拙者が許に暫らくも居でなさい、で此文内を遺して、先方の吉田和三郎といふ者の容子を探らして進ぜやう、死なうと思へば何日でも死ねることだ、決して狭い心を出しなさんやうに……文内、梅の用意をして泊申せ」文「ハイ、心得ました……和女、私は長らく旦那さまに仕へまする文内と申す下郎、旦那さまが折角御深切に仰しやいますから、決して御心配なく此家に居らっしゃいませ、其内に一寸延れば尋とやら、又宜いこともございませう、サア、今宵は兎に角主人方にお居であそばして、又私が其吉田とか、悪たとかいふ奴の容子も探してあげます、ア、非道い奴でございませう」と其晩は主従が働いて此家に菊野を泊てやりました、で其晩は厄介になる、其事を中田屋金兵衛に話さうと思ふから、翌日金兵衛を呼だ、早速やつて来て、金「御免下さい」土「此方へ通つて下さい」金「イヤ此文内さんお早うございませう、此は旦那さまお早うございませう」見ると年齢十七八の奇麗な女がある、ハテナと思ふと、金「エ、何か御用で」土「他の事ぢやアないが一つ御相談がある、實は昨晚遅く金杉橋を通

行し、其處にをられる水谷家の御浪士の娘子の、危ふき生命を助けて自宅へ泊て斯ういふわけだ、金「ア、夫はお氣の毒なわけでございますな、手前にも娘がございまして、御奉公に某かたへ出てをります、ア、お氣の毒なことでございませう」土「就ては暫らく當方に置のだが、斯やうな拙者と僕とをる手狭なところへ置ては、外見も宜しくないから、他に一つ移したいと思ふが何と宜い御工風はござるまいか」金「夫ア斯うなされましたら宜うございませう、手前どもの隠居所が其儘明てをります、乃で私どもが萬事お賄ひをしますから、然ういふ御親切で貴君がお助けになりました人なら、何うか御本人の身の成立やうにしてあげないと、佛造つて魂ひ入すとやらで、又此先如何な愛目を見なさるかも知ない、萬一然ういふ事ではお氣の毒でございますから、然うあそばしては如何でございませう」土「成ほど、如何にも父母を失なひ、悪人の手にかゝつて、正しき少女が吉原町へ遊女に身を沈められるといふは、眞に氣の毒の至り、通りかゝつて助けるといふのは、是も何かの因縁でござらうから、金「仰しやる通り前世如何なるお約束があつたかも知ない、兎も角も手前かたへお引取申ませう」乃で其菊野と言ふものを、中田屋金兵衛が一旦宅に戻りまして、女房と相談の上で引取て、碓貝十郎左衛門は金子があつたから、其頃ほひの金子で十兩金兵衛に渡して、「何うか身の廻りの衣服を調へてやりたい」乃

で金兵衛の女房が萬事取計ひまして、常衣から著替から一寸した晴衣、何しろ元祿時代の華美なものを、悉皆仕立て著せて見ると何うも實に素晴らしい美女、此方は文内が麻布并橋の吉田和三郎といふ御家人の、其近傍の噂を聞いて毎日出かける、分らないから其角の髪結床に飛込んで、
 文「一寸髪を一つ結ておくんさい」親方が、親少々お待ちなすつて、跡二つあります宜うございませうか」文「ア、宜しい」と待つてゐるうち、表からブラツと入つて來たのが、某御家人といふやうな風だ、
 親方、直やれるか」親「エ、彼の方と丁度三つあります、何處かへお出かけでございませうか」
 親「イヤ一寸吉田のところへ往て、此から山倉のところへ出かけやうと存じて親「山倉さまのところは今日は何かございませうか」
 親「ウン、先祖の法事をすると言つて招によして、餘まりかぶつてゐるから、髪をやつて貰つて其方に髪を結て貰はうと存じて」
 親「貴君は始終お獨りで遊ばすぢやアございせんか」
 親「ヤ、獨りと稼業人の爾にやつて貰ふのは容子が違ふ」
 親「何うでございませう吉田のお嬢さんは」
 親「彼は吉田の嬢ぢやアない、西田太郎といふ者の娘なんだ、吉田とは縁類だから世話になつてゐたんだが、吉田が彼様なに身持が悪いから、彼の容貌の美しい女を、吉原町へ賣と云つてトウ〜逃られた」
 親「へエ、何日の事だございませう」
 親「五六日前のとだ、夫から三日ばかり探したがトウ〜知らない、足がつかない、何でも高輪

あたりから身でも投ちまつた様な容子だ」
 親「其いつは飛だことをしましたか、美しい容貌でございませうか」
 親「ナカナカ善い容貌だ、惜いことをした」
 親「溫和しうございませうか」
 親「イヤ威心なものだ、母の病中などは能世話をつくして、眞と待がたい女だ、モウ致方がない」
 親「惜いことをしました然うと知りやア宜いところへお世話したものを、身を投てしまつちやア致方がない、同じことなら、吉田の旦那が身を投てお嬢さんが残りやア宜いのに」
 親「夫ぢやア後刻に來るお氣の毒さま」
 親「其御家人らしい者は出て去てしまふ待かまへてゐた文内は、番が來たから髪を結て貰つて、夫から立歸りました。
 夫から文内は主人の十郎左衛門に右の話をする、始終を聞いて、
 夫「夫では女が身を投たものと、先方は然ういふ心持ちでゐると見える、愼じなま中女を出さうより、寧ろ末始終當人の成行やうにしてやらう、乃で、此ア芝邊に置いて、萬一外へ出ないとは限らないから、見附るやうでは却つて情が仇となる、何うか宜い工風はあるまいかと、相談をすると、中田屋が、
 夫「夫ぢやア斯うなすつたら宜うございませう、私どもの寺が東本願寺の寺内で、夫は徳本寺と申しませう、住持は眞に氣さくで、殊に其奥さんが粹な方だございませうから、此寺のお座敷を借て、此處へ隠匿まつて置たら、又何とか身の振方がつきませう」
 親「ナ、ぢやア然う頼む」
 乃で此東門跡の寺

内、徳本寺といふ寺、其中又何とか工風もあらうと往來をしてゐると大丈夫の人でも、戀は
 思案の外、遠くて近きは男女の間何時の程にか互に心を許す仲となりました、夫からといふも
 のは、今日は本所がたへ用達に行とか淺草邊に参るとか言て、毎日のやうに菊野のところへ立
 寄るを樂みといたす、乃で段々に深くなる、文内は主人の容子を知らないから、文切旦那さま
 何れ何とか遊ばすんでございませうが、菊野さんを御新造にお持なすつたら容貌がお宜し
 く、能物が出来て、茶の湯が出来てお裁縫が出来て彼の通り萬事内氣で、マア私の考へでは眞
 に何うも何處と非の打どころのない方ですが「イヤ、眞に其方にも面目ないが」文イエ、何う
 いたしまして、決して御意見をするんぢやアございませぬ、彼アいふお方ですから強てお勧め申
 したいと存じますので、實は過日私が旦那さまに吩咐つても届け物をいたしました時私の
 やうな者でもお見込なされて、熟々と身の上話しをなされましてございませぬ、其際伺ひました
 には、旦那さまのお胤を孕して御懐妊ださうでございませぬ「ナニ懐妊をいたした」文「ハイ、
 眞にお目出たうございませぬ」十郎左衛門胸に五寸釘を打たる、思ひ、世が世で迎へたる女房な
 ら、此上もない喜びなれど、何日何時打死をするか分らぬ身が、ツヒ情に絡んで此の始末、然
 しもう此上は能う手當を致してやらなければ成ん、と一日菊野の許へ参り容子を見てをると、

例の通り御酒の用意をして一献さし上、自分も聊か頂戴をするからお相手をして、菊實は此程
 より申し上たいと存じましたが、つひ此様な身になりましたので「イヤ、何うやら其容子で、
 婦人は懐妊をいたせば、身を大切にマメやかに出産の月来るまでは、能々大切にいたさんけれ
 ば成ん、又た良き子を儲けたいと思ふには、神佛を念じ、其行ひを正しうせんければ成んとい
 ふ」菊御意でございませぬ「ナニ身體を大切にしてくれい」夫からは餘り繁く参りませぬ、其後一
 二回来て手當をする、其うちに月満まして、元祿十五年の七月三日の、日に男の子を産み落す、
 十郎左衛門此沙汰を聞いて文内と共に参つて、何くれとなく世話をする、幸ひに母子は無事なり、
 乃で中田屋金兵衛此を知て祝ひ物をする十郎左衛門は金兵衛に對つて、十倍此ほど子供を儲け
 たが、謂ゆる妻と定まつたわけでもなく、甚はだ耻かきことだが菊野の身を如何にも氣の毒
 に感じ、ツヒ頼りなき婦人と情けをかけし拙者である「金御尤も至極でございませぬ」ナニ斯やう
 に子供まで儲けたれど、素より志望ある拙者、此事は餘り他言をせぬやうに「金夫りやモウ辨
 まへてをります」萬事は徳本寺の住職の良穩に頼んで夫から手當をする、七夜に十郎左衛門が、
 自分が幼名を吉平と申したから、何日何時鐘を打つて死ぬる身とは申しながら、我胤で出来た
 子だから、切めて我幼名をつけてやらうと、此で吉平と名づけました、追々母子が無事で肥立

まして、後にはモウ漸々可愛くなつて来る、其うちに彌々健打の時機到来となつて、大石内蔵之助は河崎在の平間村まで著になる、夫々浪士の人々は手配をする、妻子ある人は妻子に夫となく別れをする、乃で十郎左衛門は十二月の十二日に菊野のところへ来る、菊野は、此は此は能う入せられました大層早く、菊野ア少々都合あつて早く参つた、菊野然やうむらッしやいますか「予」借餘のことではないが、兩三日のうちに西國のお大名、眞に御小身ではあるが、相良遠江守どのへも抱へになつて「菊野」夫は目出たいことでございます「士」で、お目通をいたし、支度萬端茲のところ、兩三日は参らんから、然やう心得てくれますやう「菊野」夫ア眞に結構なことでございます「乃」で終日も酒を飲で、心のうちには此今生の別れなり、と一時吉平を立して抱て、ア一惘然なことだ、世の中に生れ出て父たる顔を覚えず父に先だられる、ア一氣の毒千萬、何となく虫が知せるか、血が知せるか、頻りに膝のあたりへ這上つたり、願のあたりを摩つたり、十郎左衛門の鼻を掴んだりする、夫を愛らしく、菊野君は其様にお父さまに「と菊野が自分の方へ取ると手を延して十郎左衛門に抱りたげな容子、心のうちで十郎左衛門、ア一此ア今生の別れと知ものと見ると、思へば飲だる御酒も發しない有様でございます、其うち日は没なんとするから、士ア菊野や然らば種々支度もあるから五六日参らんから、然

やう心得てくれるやう「菊野」ア畏まりました「士」乃で此金は其方へ與へておくから、手許へ置いて能大切に育つてくれるよ」と五十兩金を渡す、菊野此は莫大「士」イヤ御奉公いたすにツイて、此は其方の手許へ預けておくから、夫は自由に支消ても苦しうないぞ、モウ暇を告やう」と茲で十郎左衛門、後ろ髪を引れるやうな心もちで神田山徳本寺の奥座敷を出る、菊野は子供を抱て玄關まで送り出して、蕪然やうなれば御機嫌よう「士」ヤ、子供を大切に、和女も堅固に」と心のうちで泣いて別れる。

明くれば十二月十三日、泉岳寺の方丈に行つて同志の面々と當日の打合をいたし、十四日の朝になつて、士「文内」文「ハイ」士「此へ一寸来てくれ」文「ハイ」士「其方も長々の間、召仕つてをツたが、彌々今度此方は仔細あつて、身一つとなつて西國に赴く」文「ハイ」士「で今日かぎり暇を遣すによつて然やう心得てくれ」文「ハイ」士「其方は此の定紋の附てをる衣類、又此脇差は父の遺念である、新刀なれども加賀の兼巻、之を其方に遣はす、金子を五兩是は褒美だ」文「旦那さま、西國にお往で遊ばすならば私が御供をいたします」士「夫は千萬添じけなないが、西國へ参るのに其方を供に連るわけに行ん」文「イヤ、旦那さまの御容子が、兩三日以來私には合點が行んで、彌々私をお供にお連下さらんとあれば、私はお暇も頂きません」士「では何ういたすの

だ「文」是までの間旦那さまの御恩を蒙りましたれば、御立身を遊ばすまでは何のやうな苦勞をしても勤めたいと存じて、斯やうに今日までお供をいたしてをりましたに、俄にお暇が出来る見ますと、私も満らなく心得ます、何もお金や衣類が欲しいのではございませぬ」土「夫りや尤もだが、都合あつて何も仔細はないが暇を出すのだから、其方を連れ西國へ赴くわけに參らんから、夫ゆゑ暇を出すのによつて、拙者の胸中を察し、是は能々のことで主人も暇を出す、其方も悟つて承知いたせば此方も宜しい」文「然やうなら私が御奉公をいたしてをりますれば、旦那さまの御都合がが悪いので、然やうなら何うも是非に及びませぬ、御暇を頂戴いたしますでございませぬ」土「オ、僂は其方、暇を聞入れてくれたか」文「ハイ……是は頂戴いたしませぬ、脇差と衣類、金子を押頂いて自分の坐敷へ引取つた、暫らく音沙汰がないから、ハテナと思ひ十郎左衛門、自分の坐敷を立出でて、臺所の傍の文内の居る坐敷を密と伺がうと、文「ウーン、此御主人について生涯御奉公を仕とげて終らうと思つてゐるに、何が御意に入んか斯のことく俄かのお暇、幾ら嘆いても西國のお供は仰せ付られん、ト言て何の因果かお分れ申したくはない、ア「致し方がない、不忠にあたるかは知んが寧ろ腹を切て死でしまはう」と旦那さまより頂戴した兼巻の脇差をギリリと抜と手拭で帽子の方を巻て衣類を寛ろげ、既でのごことに

左の脾腹へ突立やうとする、土「待て」文「旦那様お留あそばさんで」ピンリ急所を打れて脇差を落す、文「エ、旦那さま、何うぞ其所を放して私をお殺しなされて下されませ」容子を見れば、文内は満面眞青、兩眼血ばしり死を決したる有様、土「コソ、此處へ來い」文「ハイ」土「然程迄に此磁貝を思ふゆゑに、今は我大望を打明聞さう、必らず短氣をするな」と脇差を拭つて鞘に収めた磁貝、土「サア此へ來い、斯ばかり偽り多き世の中に死ぬるばかりは眞なりけり、と古人の詠れし教訓の歌がある、今爾の容子を見ると、正しく死を決したに違ひない此りや」文「ハイ」土「西國へ赴むといふは偽りなり、眞實は御城代さまを始めとして四十有餘人、今宵本所松坂町の吉良邸へ打入て御主君の仇打をいたすのだ」文「エ、旦那さま、お見上申しました、旦那さまは其黨中の一人で、私は下郎でございませぬが、赤穂よりお供をして京都まで立退くとさ、ア「言甲斐なき方である、此文内が淺野家の御家來なら、假令一人でも吉良どのへ打入り、内匠頭さまの御無念をお晴し申すものを、ア「立派なお武士が大勢をりながら、只の一人も體をお打あそばす方もないと存じましたら、實に殘念でございませぬ、然れども今に何とか御沙汰があらうかと、心待ちに待て、毎朝く泉岳寺の方へ對つて内匠頭さまを拜んでをりました」土「其方が内々嗽水手水をいたすと、南の方へ對つて拜を遂てをるから、何か信心をい

たすこと、存じたら、扱は御主君内匠頭さまを「文」ハイ、何卒御家來さまが一致して、御無念をお晴し申すやうにと願ってをりました「土」然らば見上たものだ夫がために與へたる脇差こそは、此方の遺念と受納いたしくれよ」文「旦那さま、私もお供を「土」サア夫だ、御恩を受たる臣下の他には、誰一人も同意を得るといふが、神文書紙血判の序文にある、親兄弟といへど心見抜かぬ者は、一人たりとも他言はいたさん、といふ誓なれど爾の誠忠を見抜いて明すの跡に残つて切てもものに、此方に一言なりとも念佛を唱へ、弔ひ等をいたしてくれよ」文「然やうなら今晚は御門前まで御供をお許し下さい」土「其儀は仔細ない」文「有がたいことございませ、併し菊野さまや坊さまは「土」サア夫だ、手當の金を差置たるから、別に困ることはあるまいから我亡きのちは、一言此を菊野に申し聞て断念されてくれるやう」文「畏まりました、ア」土「懺然こと、返す」菊野さまは御運のない方、御容貌と言ひも氣立と言ひ、何一つ出来ざることはないに、私も旦那さまが望みあつて主取あそばしたら、願つて晴て御夫婦と成あそばすやうに、と存じてをりましたに、ア」土「氣の毒さまなこと……宜しうございませ夫ア私吞込んでをります」土「然らば文内、御酒を持って參れ、主従の名残り今生の酒宴をいたす」文「有がたうございませ」と文内涙を拭つて盃をいたす、乃で其夜いよ／＼本所林町で勢揃

ひをして吉良家へ赴くとき、遠見がくれにお供をした文内、裏と表からドツと打入る時に、脇差を抜て吉良さまの表門の柱へ切先きを通して、ウーンと一心を籠て、下郎で響打の御供をして、爾れ憎くき吉良上野介我が精神を貫かで置べきや、ウーンと夜の明るまで斯いたしてをりました、乃で翌朝泉岳寺まで遠見にお送り申した、ところが磯貝は泉岳寺の門前まで来て、後なる多くの人を方を見ると、文内が遠見がくれに来る、其うち文内駈來つて、文「旦那さま、然やうならお暇を」土「其方も無事でをれ」文「ハッ」他の人が見てをるから只頭を垂たばかり流石剛氣の磯貝も涙にくれて泉岳寺の門へ入らうとすると彼方の松の樹の影から、金「旦那さま」土「オ、此は中田屋金兵衛どの」金「ハイ」又一人此へ来て、金「旦那さま」土「オ、此は中田屋清次郎どの」金「恐れ入りました」金「實は貴君さまがお引揚になります時に、仙臺さまにお立寄りになつて近所近邊の者が、播州赤穂の浪士が仇打をせられたと申しますから、扱は其内に旦那さまが入ッしやるかしらと、一生懸命親子が先に參りました甲斐に、今此處でも目通りをいたしましたア」土「立派なとございませ」土「浪々中は長らくお世話になつて忝けない、萬事は文内に申し付いたれば、何れ文内から……」金「シテ貴君さまは此から」土「如何なることになるか、此から先は公儀の御沙汰を待つ身の上」金「然やうでございませるか」土「貴君はじめ御新造御

家内一同の御萬福をお祈り申す、然らば別れ申す」中田屋親子は、ハラハラ涙を流して別れ申す、サア江戸中大評判、頓て文内は源助町へ立歸りまして、中田屋の主人が、金「文内さんア、立派なことでございます、兎に角御主人のお身の定りますまで、貴君は私の家にお居下さい」で中田屋親子は、彼様な立派なことをなさいましたから、磯貝さまは今に何處かへお抱へになりませうだらう、と心配してくれる、此方は十六日になつた時徳本寺の住持が、佳「菊野さん」奥「ハイ」佳「和女、御承知はないか」菊「ハイ」佳「播州赤穂の御浪士の磯貝十郎左衛門といふ方が、十四日の晩に本所松坂町の吉良さまへ打入つた四十七人の内にあります」菊「エ、ッ」佳「内藤十郎左衛門と承知してをりましたが、確に此方ぢやアございせんか」菊「ハイ」乃でモウ磯貝といふことは菊野は知てをりますから、菊「然やうでございます、而して何うかありませんか」佳「磯貝どのの目下と大名さまへお預けになりました」菊「何方へ」佳「細川様へお預けです」菊「オヤ、然やうでございますか」と氣も顛倒、飽迄此方は所天と思ひ一子を儲けし兩人が中、扱は夫をお別れ旁た金子のお手當まで、と悟りまして、菊「夫では今宵は芝へ参り少と尋ねることがございますが世間を憚れば」と夜に入つて出かけやうとする、ところへ文内が来て「文」菊野さま「菊」オ、文内どの「文」お聞でございますか「菊」オ、承はりました「文」實に立派

な旦那さまのお覺悟でございます、就ては旦那さまは死を決して、二君には仕へんといふ思召、併し公儀にて何とお許ひあるか知ません、マア和女さまは何とか旦那さまのお身分の定るまで、御當寺に居らしつて下さいますし「菊」ハイ、待てをります「文」待てゐて下さいますし「菊」夫なら然やう致しませう」と朝夕十郎左衛門の無事を祈つてゐる、然るに翌年の二月の四日に至りまして、細川家において切腹をなされたといふことを、早くも文内が聞込んで知らせますと菊野は一子吉平を抱て、泣てく見る目も哀れ、文「サア菊野さん、此上からは和女さまは此坊ぢやまと、何うか身の成行をつけ、心落さず旦那さまの御菩提を弔つてあげて下さう」菊「ハイ」と答へはすれど正體なく、膝に這あがるところの吉平を抱て乳房を含ませ、其顔を見つめれば夫十郎左衛門に、瓜を割てと言たいが、割で其まゝ能う似たり、シゲくと顔を見つめながら兩眼より溢れる涙、文内も氣の毒に思つたが、文「夫では菊野さん私は一寸用事もあれば」菊「モシ文内どの、お歸りですか」文「此からお暇」菊「シテ十郎左衛門様の遺骸は」文「夫は高輪の泉岳寺に」菊「夫では濟んが、何うか明日未明、貴君のお手引で泉岳寺へ参り香華を供たく存するが」文「夫は宜しうございます、では明朝お迎ひに」菊「イ、エ、妾は貴君のところへ出ます」文「夫ぢやア寧ろ斯うなさい、今晚私かたへ入しつても泊んますつて、明日の朝早く御參詣遊ばし

たら「菊夫では然う致しませう」此から菊野は徳本寺御夫婦へ夫れを申して此奥座敷を出る、
 其夜は中田屋へも顔を出す、金兵衛夫婦も實に氣の毒に思つて、何や斯や世話をして、菊
 野は子供を連れて文内かたへ泊る、其翌朝早く暗いのに支度をして出ました、泉岳寺へ參つて、
 赤穂浪士の縁故の者と届けて、御本堂へ參り、菊何うぞ此で御回向と「包み物を出した、坊、誰
 方でござるか」菊磯貝十郎左衛門「坊、宜しうござる」文内は先に參りまして、小さな棒杭
 に各自の戒名が書て立てあります、頓て磯貝十郎左衛門どの、お墓に參ります、刃周求劍信
 士、行年二十五歳とある、又南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛「其處へ菊野が子供を連れて来て、ボ
 ロ／＼涙を流しながら子供を抱て伏拜む、背後に立て此容子を見て忠僕文内、ア、お氣の毒な
 ことだ、と此もボロ／＼と涙を流す、菊文内どの「又何でござる」菊、只今彼處へ包を忘れて來
 ました、何卒其包を持って来て下さい」で文内は包を御本堂まで取に來る、其後で菊野は、菊御
 承知の通り私は水谷家の浪人の娘、親戚の非道に身を縮めやうといしたたを、昨年よりお情け
 を頂だき、お世話を受けて力と頼む貴君さまが此御忠死、女の身で此子を抱へて、跡に残つて如
 何なる艱難辛苦をいたし、萬一恥辱をのこす其時は、折角の御誠忠に傷がのき、妾とても如何
 なる愛目を見やうも知ず、勿體ないとは存じますが、此一子吉平と共に冥土の御供をいたしま

す」と覺悟なしたる菊野ゆゑに、用意の懐劍引抜いて、兩眼閉て愛らしきところの一子吉平の
 咽喉をブスリ刺通せば、キヤツと玉ざる悲鳴と共に、兩手を悶がき締ぎれる其體を見て取直す
 短刀、我と我咽喉を目がけ、刃がたを外に頸動脈を刻る、美事の自殺に母子とも、磯貝の墓前
 の露と消たり、然うとは知す文内は包を持って再び此へ參り、又菊野さま、／＼、ヤ、此リア大
 變だ、菊野さまア、と臆の下へ手をかけてグツと抱起して見ると、鮮血淋漓として最早締切れて
 る、又ア、大變なことが出來た」と乃で文内は方丈へ此事を知せる、方丈が來る、早速町奉行
 保田越前守どのへお届をする、で、お檢視が出張ました、磯貝の妾と分つたから文内へ屍體は
 お引渡しになる、夫から中田屋父子も來て萬事世話をいたし、神田山徳本寺へ此を葬ひりまし
 た、併しながら是を磯貝の妾とは餘り知ものもございません、中田屋の縁故の者として葬ひり
 ました、是から文内は中田屋父子に萬端跡を頼みまして、此より靈地靈山を巡拜して、御主人
 十郎左衛門様と菊野どのと吉平さまの菩提を弔ふと、夫なり行方不明になりました、忠義の武
 士に仕へたる忠僕文内の志ごしも亦感心でござります。

磯貝十郎左衛門 終



法屋

吉田忠左衛門

吉田忠左衛門兼亮は、元常陸の國茨城郡笠間の城主、井上河内守正利の御家來、ところが我々連中が、丹波の篠山の青山家の御家來だと誤まり申上げて居ります、一體此忠左衛門兼亮の父吉田忠左衛門は北條流の軍學が能出來ました、忠之丞といふ御子息がある御新造に下女下男といふ御家内、或時先祖の墓詣りに行らした。佛參をして歸り道、お寺の坂へかゝつて來るとオギヤア〜といふ聲が聞える、ハテ子供が泣いてをると立留る、下男の八藏が「ハ、旦那さま、大層子供が泣きます」言、何うも容子が訝しい、見てやれ」ハ、此笹の中で泣いてをります」言、可哀さうに男の子のやうだ」ハ、エ、男でございませう、其んなに賤しくない者の子と見えまして衣服も然のみ見苦しくはございません」言、イヤ、夫ア眞に憫然だ、夫を拾ひ取て遣はせ」ハ、ヘエ、然やうなら拾つて持て參りませう」言、イヤ此方へ出せ」是から御自分が可哀さうに思召ましたから懷中へ入てお歸りになる、御新造へ「眞とに可愛らしい子を拾つて參つた、此方母の命日に子供を拾つて來るのも、何かの因縁だらう」眞に宜いことをなさいました」言、早速乳のある者を抱へて育つてやらう」是から乳のある者を捜しまして、育てる、齒

氣もなく育つて行く名前のない子も訝しい、寺の坂で拾ったから爰で寺坂吉右衛門とつける、追々に成人をいたします、其内に御子息の忠之丞どのが二十五歳、こゝで其嫁をお迎へになるところが何うも豪いもので、お父さん以上の學問も劍術も出来る、眞に御家中の評判も宜しいから、親父が隠居をする、間もなく父さんが二十八歳の時に亡なる、乃で忠左衛門の名を襲ぐ、御新姐のお國さんといふ御夫婦の中にお子さんもない、ところが先代から御恩を蒙つて始終御奉公をしてをる吉右衛門、早や二十二歳となる、スルト此御新姐のお國さんが、實家から幼年で連れておるでなさいました竹といふ、現時十八になる、吉右衛門が若いのに、お竹も一寸した女で、遂に何うも手が障り、足が障り、トウ／＼好い交情になつた、然れど主人の吉田忠左衛門は御存知がない。

スルト御家中で漸々評判をする、早エー先代の吉田忠左衛門どのは、萬事お届きになつたが、現時の忠左衛門兼亮といふお人は、マア何も彼も能出来て温和な人だが、奉公人がアノ不始末をしてゐるのを、叱責を言ないといふのは、日頃の嚴格に似合ぬ家事不取締である」と言てゐる、一日城中詰所において、吉田忠左衛門書物をしてゐる、其次の室で、早何うも吉田も宜いが家事不取締で、若者が不義をしてゐるのを氣が注んのか「サア是が耳に入つたから捨ては

置ない、此から自分のお小屋へお歸りになる、直「サアお國」ハ、「ハイ」吉「どうも今までは氣が注いであつたが、吉右衛門は不義をいたしてをるか」國「御意でございます、お尋ねでございますから申し上ますが、竹も此程より常ならん身體でございますして」直「さうか、吉右衛門を此へ呼べ」國「ハイ」吉右衛門は呼れたから、お次の室まで参りまして、旦那さまと御新姐さまの御容子が變だから、ハテナ、餘ほどお憤りの御容子だが、と思つてゐる、直「吉右衛門」吉「ハイ」直「其方は父忠左衛門より、一かたならない恩を被たものであらう」吉「ハイ」直「其方は何者の件か知んけれど、父が佛參の戻りに拾つて立歸り、乳母を置いて其方を育てあげた、夫ゆるに拙者も目下其方を召使にはしてをるが、何となく愛情が深い、此方が十四歳の時から爾かをるか、舍弟のやうに思つてをつた、然るに爾は主人の顔に泥を塗つたな」吉「ハイ……」直「其方はお竹と不義に及んでをるであらう」吉「へ……何れ此様なことになるだらうと思ひましたからお竹に断つたんで、悪いことは出来ねえんだ、若是が旦那さまのお耳に留ると、不義はお家の法度だから、スルト吉右衛門さん、廣い世界に男といふのは爾さん一人、私か是ほど思ひ込でゐるのに言ことを聞てくれなければ淵川へ身を投るといふです」吉「控へろ、不埒ものめ、主人の前にいいて何といふ其申し分だ、本來なれば一刀兩断にするが家の法だが、併しながら格

別なる憐愍を加へて、爾は當家へ裸體で參つたんだから、裸體で追出すから、何方へでも出て失ろ」突然立上つて吉右衛門の帯を解き、衣服を脱して襦袢一枚となし、言「サア出て行け」寺「是までの間御恩を受け、何一つ御恩がへしもつかまつらず、飛でもないことをしてしまひました、何卒旦那さま、御勘辨下さいませうやうに、ア飛でもないことをいたしました」圓「コソ吉右衛門、旦那さまの思召もありませうが、爾は日頃働らいたのであるから、一時お暇になる、早く何方へなりとも出でなさい」寺「ハイ」下帯に襦袢一つでお屋敷を逐拂はれる、ボンヤリとして腕を組で、眞暗なところを徐々歩行ながら、ア飛でもねエことになつちまつた、だから己が可ねエといふのに、お竹め無理に面白くもねエ、此んな事になつちまつたんだ、何處へ行つたつて、是ぢやア行やアしない、一層お手打になつた方が宜い、ア満らねエ、コソ、魚屋の倉吉さんか」寺「此ア不思議だ、吉右衛門さん何うしたんだ」言「何うにも斯うにも此んな姿」倉「賭博にでも取られたのか」言「冗談言つて、己ア賭博は嫌ひだ」倉「何うした、賭博なんぞをする人ぢやアねエ、一體何うしたんだ」言「イヤハヤ此んな姿だ」倉「何する己の家に來ねえ、其様な姿で何處へ行けるものか、多分お竹さんの一件が露顯でもしたんだ

らう」言「能くあてられた、實は始めツからお竹が、私に惣菜の盛やうが違ふ、ヒジキに油揚げの時なんぞ、上の方にヒジキがあつて、下の方から油揚げがソロ／＼出る、此ア尋常ごとぢやアねエと思つた」倉「吉右衛門さん、何を満らねエことを言てゐるんだ」是から魚屋の倉吉、自分の家へ吉右衛門を連れて來る、倉「オイ、今歸つて來たよ」言「何うしたんだい倉さん、何だい其處に裸體でゐるのは、誰だい」倉「ナニ、吉田さんの吉右衛門さんだ、マア吉右衛門さん、其處にボンヤリ立てゐたつて仕かたがねエ」言「何うも寒くつて仕かたがねエから衣服を一枚貸ておくんませエ」倉「オイ、其處にある己の衣服を出して貸てあげねエ」妻「マア吉右衛門さん、何うしたんだい」言「何うしたつて斯うしたつて私は倉さんの知ての通り、御先代に拾ひあげられ、當時の旦那さまも御新姐さまも目をかけて下さる、世間で吉田の旦那さまは爾を思ふ、爾さんも御主人を疎そかにしちやア濟ねエせ、といはれるくらゐ、如何にも御主人を大切に勤めてゐれば、裸體で逐出される氣遣はねエが、アノお竹が近來私に副食物の盛ッ振が違ふ、氣があれば目も口ほどに物をいふ、ツヒ手が障り足が障り、エツヘツヘ、」倉「オイ吉右衛門さん、冗談ぢやアねエ、涎が垂るぢやアないか、お竹さんが腹が大きくなつて、方々でガヤ／＼言て、彼を打捨て置ア、吉田の旦那は分らねエと、他から言れるから、旦那が屹とお腹をお立なすツ

た本来なら不義は家の法度で、お手打になるべきところだ、裸體で逐出すといふなア旦那がお惜いだ、マア詮方がねエ、其うちに何とか話をしやうから吉右衛門さん、少し當家に居ねエ」直有がたうございませ」ところへメソソ泣ながら、竹「御免下さい、此方に吉右衛門さんがをりますか」見るとお竹だ、是も大きな腹をして腰巻に褌一枚だ、倉吉驚ろいた「鳥マア何だい、其形装は」竹「吉右衛門さんは居りますか」吉右衛門見て「直、何うした」竹「何うしたぢやアない、御新姐さまが實家の方から連れて来て、目をかけて召仕つたに、能も不義を働らいた、旦那さまに申し分がないから、と仰しやつて、此通り衣類を剥れて裸體で逐出された皆な吉右衛門さん爾が……」直今更其様なことを言つたつて、汝も裸體、己も裸體モウ斯うなりやア何うすることも出来ねエ」魚屋夫婦が「鳥マア其んなことを言つたつて仕かたがねエ、兎に角今夜は二階へ登つてお寝、オイ鳥、何にか汝の物をお竹さんに貸してやれ」鳥「貸してやれたつて、有りアしない」鳥「無けりやア汝、裸體になれ」鳥「何だい……」鳥「マア宜いつてエことよ、汝は夜具を冠つてたつて宜い、今夜寝りやア、又明日は明日の風が吹くんだ、明日は御城中へ行つて、吉田の旦那さまへ一通りお話をしなけりやア成らねエ」直「竹、倉さんが然う言つておくんなさるから、宜しきやうにお願ひ申さう」鳥「何しろ二階でお寝

なさい、だが枕が一つしきやアない、チエ吉右衛門さん、枕は一つで宜いだらう」直「それどころぢや御座いません、お竹……夫ぢやアマア御免」竹「まことに飛でもない御厄介、さやうなら御免下さい」二階へ登つて此から先を何うしやうといふ相談、泣たり笑つたり下ぢやア倉吉が、倉「オイ静かにしてくれ、漸々夜が更るから」吉右衛門二階から首を出して、直「皆さんへ、別に何も言つてゐる譯ぢやアムいません、斯ういふ事になつて、逆も生ちやアおられな、寧ろ兩人で死なう、と相談をしてをるんで」鳥「其んな短氣なことを言ちやア可ねエ、オイ吉右衛門さん涎が垂る、衣服に汚點が出来る」其晩兩人を二階へ寝かして了ふ、翌日倉吉御城内の吉田さまへ出てお謝をする、處ろが、直「不義密通は手打にするのが武家の法だ、然れども格別の憐愍を以つて、最早久離さつて勘當したから、吉右衛門も竹も屋敷へ足踏はならん、併しなから、此は吉右衛門へ遺すのではない、是は其方に遺はすから、宜しく取計つてくれ」と三十兩、當今とは違ひ其頃の三十兩の金は莫大なもので、倉吉が、鳥「此お金は確かに預り申し、吉右衛門さんに渡しますが、此御恩は忘れはいたしますまい」スルト御新姐が、鳥「アノ倉吉や、御家中の手前もあるから裸體で逐出しましたが、差詰困ることであるから、此衣類は竹に遺して下さり」鳥「エ恐れ入りました」で、其衣類を持つて歸つて来る、吉右衛

門夫婦は二階でボンヤリとして、吉「どうしたら宜らう、汝は其身體になんて己は一文なし」
 竹「何うも致方がない、倉さんがお謝に行つて下さつたッて、逆も聞て下さつてツちやアない」
 直「飛でもねエことをいふ、倉さんがゐないから宜いが、聞いてたら悪い」竹「何うして」吉「何
 うしたッて斯うしたッても情ぶかい旦那さまだから」と言つて居る處へ倉吉「二階へミシ」登
 上つて来る、直「此ア種々お世話さま、有がたうございませう」倉「吉右衛門さんお竹さん、只今
 行つて来た、吉右衛門さん、私が出てお謝をすると、旦那は何んとも仰しやらない、不義は家
 の法度、手打にいたすのが武家の法だ、格別の憐愍をもつて助けて遣はしたのだ、夫れだから
 何んなに謝をしても屋敷に足踏をさせない、久離さつて勘當だと然う仰しやつたが、其の仰つ
 しやるうちにも兩眼に一ばい涙を浮べて、憎んで勘當するのではない、御家中の手前、此れを
 捨て置けば家事不取締、此の三十兩は吉右衛門に遣るのぢやアない、爾にやるから宜いやうに
 してくれ、とは仰つしやつたが兎に角爾さんに下すつたんだ、此の旦那の御恩を忘れちやア可
 けない」吉「ア申し譯がない、お手打になるところを助けて下さるばかりか、此のお金まで下
 さる、何たる有がたい旦那さま、一體お竹、汝が己に惚れやアがつたから悪いんだ」倉「吉右
 衛門さん、今更其んなと言つたッて仕やうがない……お竹さん、此ア御新姐が涙ぐんで、此

れをお竹に遣つてくれ差向き困るだらうと一風呂敷、御新姐も然う仰つしやる内に涙が籠つて
 みた、御恩を忘れちやア可ねエよ」竹「有がたう」とお竹はワツとばかり夫へ泣倒れてしまふ
 倉「時に吉右衛門さん、爾お金を頂いたからと言って此笠間では何も出来ねエ、斯うなッたら江
 戸へ出て、江戸で何とか身の振かたを附たら宜らう、爾、江戸に知てゐる人があるか」吉「どう
 いたしまして私ア此笠間の吉田の旦那さまより外に、誰も知る者はございませぬ」倉「夫ぢやア
 私の伯父の久兵衛てエのが、芝の片門前で八百屋をしてゐるから、此處へ行って足を落ついたら
 宜らう」吉「さう願へますれば結構」倉「夫ぢやア兎も角己が手紙を認めてやらう」乃で倉吉が手
 紙を認めて、吉右衛門は衣服をこしらへ、お竹の衣類を兩掛にいたしまして、支度が出来たから、
 朝早く倉吉の女房に暇乞ひをして倉吉に送られて出る時に、御城中の方に對つて、涙を流して
 伏拜ひ、途中まで倉吉に送られ此から吉右衛門お竹は、漸うの事で江戸へ出まして、芝片門前
 へ来て八百屋久兵衛を尋ねて見ますと、夫婦で八百屋をしてゐる、吉「御免なさい、私は常陸の
 笠間から」と書面を出す、久「ナニ笠間、甥の倉吉のところから、マア此方へお上んなさい、此
 んな手狭なところだが二階へ……」此方は久兵衛手紙を開いて見るとお出入の吉田さまに長ら
 く仕へてゐた者だが、今度兩人が出来合つて、お手打にもなるところをお情けでお暇、就ては

笠間にゐては悪いから、何うかお世話をお願いとの文面、久「ア、若エ時は有がらだマア私のところにお在なさい」と置いてやる、容子を見ると吉右衛門至ッて正直だから此久兵衛江戸へ出て來てから八百屋をしてゐるが、子供がない、一つ此男を仕込でといふ氣が出たから、某時、久「吉右衛門さん、何うだい八百屋をやッて見ちやア」吉「私のやうな者に出來ませうか」久「マア私が教へてあげるから、八百屋をやッて御覽なさい、持つてゐる金を消費してしまッてから、何うしやうたッて、追付ない、何程でも持つてゐるうち何にでも取付なくッちやア可ない、實は私は城中の旦那さまが、江戸へ御出府になるとき、見物をしてエんでお供をして來て、段々江戸の賑やかなところを見たら、サア歸るのが否になッて、笠間のやうな猫の額みたいところよりは同じ生計なら此大都會でと、斯う思ッたものだから、實は此八百屋になッて、今ぢやア何うぞ斯うぞやッてゐる、爾さんが八百屋をする氣なら私が八百屋にしてやる」吉「夫は有がたうございませ、何うか八百屋を教へて下さい」久「其んなら早速教へてやる」と相談が纏つた。

此から吉右衛門、八百屋久兵衛のところへ身を落ッけまして、直「汝が産に近くなると何處へも出られねエ、子供が出來りやア尙更だ、是から二三日兩人で江戸見物をしやう」と今日は上野明日は淺草と出かける、竹「吉右衛門さん、妾ア江戸の演劇を見たことがないから」吉「ア、見せ

てやらう」と演劇見物、で、モウ宜いとなりました、爰で八百屋久兵衛に連れられて青物の買出し、市場へ來て二三日見習ひ、出來ないことはない、此から八百屋をして商人となッたが、習ふより慣ろの例ひ、遂に一日二日と漸々と商ひをして、何程か口錢を得るやうになる、サア面白くなッて來て、調子づいて、素より力があるから、人より倍の物を賣ッて歩行くらちに、某日久兵衛が吉右衛門に對ッて、久「モウ八百屋も一人前にならシッた、夫について爾も、他に姻戚親類もないやうだし、私も此年になッて頼る子供もないが、何と爾、私の養子になッてくれまいか」吉「エ、宜しうございませ」爰で吉右衛門、八百屋久兵衛の相談に乗て、爰の家の夫婦養子となッた、其うちに十月十日の月満で、玉のやうな女の子が出來ました、此を七夜にお加代と名をつける、虫氣もなく、母子共追々と肥立ます様なわけ、吉右衛門は娘を儲けまして大喜び稼業を一層勵む此娘が三歳の時義父になッた久兵衛が没します、夫から義父の三年目に母親が亡なる、兩人の弔葬を濟して今は立派な八百屋になッた、一生懸命になッて子供の成人を待つ、丁度暮のときでございませから、吉「オイお竹」竹「吉右衛門さん何です」吉「今己が愛宕下まで、干大根を持って來るから」竹「寒いのに御苦勞だチ」吉「ウン今日は素敵に寒い」言ながら干草の股引に腰さき半纏、腰には大きな矢立をさして、頬冠りをいたしました吉右衛門、一

檜半分の干大根を兩方へ分て畚の綱へ天秤棒を通して、是を引かついで、お出入のお屋敷へ干大根を納めた、で、畚を天秤の先へ突かけて、夫を引かついで、愛宕下の島村八右衛門と云ふ三千石のお旗本のお長家のお窓下へ来て、言、オ、寒い、寒いと無暗に小便が出る「其お窓下のところへ吉右衛門前を捲るとシヤア、とやり始めた、トタンに其窓の障子をサツと開られたから、ハツと思ふと小便が留る、先方は氣がつかないか、塵を溝の中へ捨ると、直に障子をピタツと閉てしまつた。

言「ア、吃驚した、小便を皆な股引の中へ放さ込てしまつた、ハ、ラ、何うも見たやうな方だな、違えねエ、忘れもしねエ二十三年以前、常陸の笠間を立退くときお情けのお言葉を頂いた彼れは吉田さまの御新姐さまに違へねエ、何うも吉田の御新姐さまに能似てゐる、併し此ア心の迷ひだ、吉田の御新姐さまが居らツしやる氣づけエはない、イヤ待よ、アノ左の耳のところの黒子、何ぼ、似てゐると言て、黒子まで似てゐる氣づけエはねエ、不思議だ」乃で吉右衛門御門のところへ来て、頬冠りの手拭を脱て腰へ挟み、天秤を彼方へ立かけて御門番へ、言「エ、少々何がひます」旗本の門番は横風だ、言「何だ」言「此四つ目の窓のところにお住居なさるお方様は、失禮ながら何と仰しやるんで」言「彼れは當家の用人林甚木夫さまの懇意で、近頃移轉

て来た、お名前は吉田忠左衛門といふ」言「エ、ツ」と駈出す、門番が、言「エ、吃驚した」言「何です御同役彼奴は」言「變な奴ですな」言「何も来た時から訝しいと思つた」言「何か大變でせう」と、言てゐる、此方は吉右衛門、精々と駈て来た、言「今歸つたお竹」言「オヤ吉右衛門さんお爾さんの家は隣家で」言「慌ア、くつて隣の家へ飛込んだ、漸く氣がついて、自分の家へ来て、言「只今は濟ません」言「何を言てゐるんだい吉右衛門さん、爾、草鞋を穿たま、座敷へ上ツちやア仕やうがない」言「大變なことが出来た」言「何が大變、爾、喧嘩でもしたのかい」言「夫どころぢやアないお竹」言「何です」言「大變なことが出来たといふア他ぢやアない、愛宕下の島村八右衛門さまのお屋敷、林甚木夫と仰しやる御用人の御懇意で、御門から南の方へ四ツ目の窓のところ、己が小便をしてゐると障子をガリリと開られた、夫がために股引を濡してしまつた」言「何を吉右衛門さん、爾、何うかしてゐるよ」言「御門へ行って聞いて見りや吉田さまだ」言「何を言てゐるんだチエ本當に」言「お竹、己と汝が十三年前に、常陸の笠間で不義をして、お手打にならうといふところをお情深い旦那さまと御新姐さまのお助を蒙りつて、江戸へ来て斯うやつて十三年稼業をしてゐる、ア、ア飛でもねエことだ、アンナ宜い旦那さまが御浪人をなさるとは、能せまのこと」言「チョイと、吉田の旦那さまが何うかなさいましたか」言「ア、夫ア御新

姐さまにも暫らくも目通りをしないが、早速行てお目にかゝりたいが勘當の身の上、此いつは
 お竹、何うしやう、直に行たつてお會下さる氣づけエはねエから、寧ろのこと御用人の林甚太
 夫さまに、お願ひをして、お謝をして、貰はう」竹「ア、夫が宜うございませう」直「夫ぢやア羊羹
 の三椀入の折を買て来てくれ」竹「ハイ」と買て来た、竹「サア吉右衛門さん、折が出来たよ」此
 から吉右衛門衣服を着かへて、其羊羹の折を持って、林甚太夫の家へ参りました。直「免下さい」
 林「何だネ」直「私は芝片門前にをります、八百屋の吉右衛門と申します」林「ア、今日は誰も居
 ないから、八百屋なら分らん」直「イエ、少々お願ひがあつて参りました」林「何だ、サア此方へ
 通れ、屋敷へ出入でも願ひたいといふのか」直「さやうなわけではございません、此は満らん：
 ……」林「さやうな事をいたして……、今日は此方の女房は實家へ参つて不在であるが、其方の用
 事は何だ」直「私は何を隠しませう、此お長家ををります、吉田忠左衛門さまに御奉公をしてを
 りました、寺坂吉右衛門と申す者」林「ア、然うか」直「ところが御覽の通り、只今は年を取ました
 から美しい男じやアございませんが、若い時には色が白く、目鼻立も揃つた美しい男、ところが
 新姐さまの實家づきの女中のお竹、初めから副食物の盛やうが變だ、ヒジキの下に油揚の伏
 勢、何うも變だと思てゐると、目が口ほどに物をいふ、手が障り足が障り」林「コレ控えつ、人

の家へ来て呆かへつた奴だ」直「然るところをいよ」此事が露見をいたしましたして既でのこと
 手打になるべき處を、お情け深い旦那さま、私をお助け下さいまして、又竹も御新姐さまのお
 影で助かりました夫から其の御門前へ出ましたのは十三年前、今ぢやア御門前の八百屋と人に
 も知れお華客さまも出来て、夫婦の中へ子供も出来まして當年十三、朝と晩に常陸の笠間の方
 に手を合して、御主人さまお御夫婦の御武運長久を祈つてをりました、ところが今日不圖お屋
 敷のお窓下へ小便」林「ナニ」直「何でございませう、股引を濡したんで」林「ナニ、何だ」直「
 エ、此方のことで、スルトお窓の障子を開て外を御覽になりましたのが、確に吉田の御新姐、
 どうも夫に違ひないと存じました、併しながら笠間にお居でなされる吉田の御新姐が、此に御在
 なされる譯はない、何うも不思議で御門で伺つてみれば貴君さまのお世話で此お長家へ御住居、
 と、承まはつて飛立つ思ひ、早速御機嫌伺ひに行たいと思ひましたが、勘當の身の上、何うか
 旦那さま、甚はだ恐れ入りますが、貴君様からいたしまして主人の忠左衛門さまへお謝を願ひ
 たいのでございませう、物堅い旦那でございませうから直接にまゐればナカ／＼お會下さらない段
 段考へて此方さまへお願ひに出ました、何うかお問濟を願ひたうございませう」林「ア、さうである
 か、ナカ／＼其方は感心、零落て袖に涙の懸るとき、人の心の奥を知る、其方が今は浪人な

された御主人へ對して、お謝をしてくれ、といふのは見上たものだ、然らば宜い、是から行て此方謝をするから、其方暫時控えて居れ」吉どうか宜しく願ひます」林「斯やうな土産を貰つて氣の毒」吉どう致しまして何うか宜しう」林「アーヨシ」是から林甚木夫、吉田忠左衛門のところへ出て来る、林「お頼申す」忠「ハイ」林「林でござる」忠「オ、是は林氏で御座たか、サアお通り下され」林「此は」御無沙汰をいたした、此は御新姐」新「ヨウ入ッしやいました」忠「此五六日サツバリお目にかゝらぬ」林「イヤ主人の御用も何かと混雜、爰のところは御無沙汰いたした、相替らず吉田氏、何處へも行ず書見を」忠「何か今日は」林「先達ては何うも届きませんでした」お茶などを出だす、林「時に吉田氏、貴君の御家來吉右衛門が、只今手前がたへ参りました」腹の中では吉田忠左衛門、扱は吉右衛門は江戸に来てをるか、彼が國を出てより十三年、何れにをるか時々思ひ出したが、と今林の一言に胸に浮んだ、林「實は手前かたへ参り、何うか主人へ謝をしてくれとの頼み、何うか出入をさしてやつては下さらんか」忠「イヤ、彼奴は不埒なもの勘當いたした者なれば、折角のお謝でござるが、其儀は罷りならん」林「でもござらうが、御勘辨のなるものなら、態々手前のところへ出たものだから」忠「イヤ、折角の儀でござるが、其儀はお捨置下さい」スルト傍らなる御新姐、新「旦那さま、林さまが斯うして御心配下さる、

吉右衛門は惜うございませうが、林さまに面して「たび御勘辨を」林「ヤ、御新姐のお取成もあり、何うか吉田氏、」たび拙者の顔を立てお聞濟を願ひたい」腹の中やア忠左衛門、直にも免したいが、大小の手前溢ッてゐたんだ、忠「然らば御貴殿の手前、免し兼ねる者なれど貴殿に對して」林「幸ひ當家に控へてをるから、直召連て参るが、只今は何とも仰しやらないやう」忠「其儀に宜しうござる」林「御新姐、斯やう御主人が解て下されば、拙者も頼まれ甲斐がある」喜んで自分のお小屋へ引返す、林「イヤ、吉右衛門、待遠であつた」吉「如何でございます」林「大分殿しい」吉物がたい御主人さま、さやう仰しやるは御無理はございません」林「漸くお謝が叶つた、是から同道してやる」吉「アー有がたい、お謝が叶ひましたか、全たく貴君さまのお盡力で……」是れから吉右衛門を連れて、林さんは玄關の方からお上り、此方はお臺所の方から、吉「御免下さいまし」御新姐は一目見るより、新「オ、吉右衛門」吉「此は御新姐さま、御機嫌お宜しう」新「其方も異なることはないか」吉「イヤ何うぞ斯う……御新姐さま、お異りないと申し上たいが、以前の御身分と異り眞に恐れ入ましてございます」言れた時御新姐もポロポロ涙を流し、新「仔細あつて當時は此方……旦那さま、吉右衛門が出ました」忠「オ、吉右衛門、只今林どのが其方のお謝下さる、勘辨ならんであるが、林殿へ對して一度は聞濟んだ、アー其

方も異なることはないか「吉」旦那さまの御無事の尊顔を拜し吉右衛門安心つかまつりました、只今芝片門前に八百屋をして、何うぞ斯うぞ生計てをります「忠」夫ア結構だ、何でも精を出せ「浪人をして尾羽うち枯してゐらしても、否味なことは仰しやらん、何ごとも氣ざく、当今までの事は何も申さんから、チト来い「吉」有がたうございませす」乃で、吉林の旦那さま有がたうございませす、お影さまで旦那さま御新姐さまへお謝が叶ひました、忠此く吉右衛門竹は何うした「吉」子供を産まして、其子が只今十三「忠」男か女か「吉」子でございませす「忠」夫は結構だ、竹にもチト……「吉」仰せなくとも是非伺がはせませす「林」サ、参らう、御免」と林は座を立つ、吉右衛門涙を拭て一生懸命駆けて歸つて来た、竹「何うしました「吉」林さまのお影でお謝が叶つた、直汝、行て来な、御新姐さまがお尋ねなすつた、早く行て来い「竹」夫なら御新姐さまは此がお好き、彼がお好き」と御新姐のお好きな物を取揃へて、お竹は支度もソコく片門前を出て愛宕下の島村八右衛門さまのお屋敷、御門番へ、竹「吉田さまへ通ります「門」ア、ヨシ」吉右衛門に教はりました四軒目、竹「御免あそばせ」新「ハイ、誰ぢや」竹「御新姐様、竹でございませす」新「オ、竹か、サア此方へ御通り」直にお目にかゝると、女の常でモウボロく涙を流して新「旦那様、竹が参りました」忠「オ、此方へ通せ」新「ハイ」お竹は御新姐様に手を引かれて通り

竹「旦那さま御機嫌お宜しう」忠「ア、其方も無事であつたか、何か子供が出来たさうだ」竹「ハイ、女で當年十三になります」忠「夫は何より」新「汝は後れから何うしたえ」竹「御新姐さまのお情で江戸へ出て、今では八百屋をいたして、子供が丈夫で、加代と申して十三になります、これから、折々伺ひますで、何か御用がございしたら仰しやりつけて下さいませし」新「又汝に頼むこともありませう」竹「御新姐さま、此は貴君がお好でゐらつしやいますから」新「アラ此んな心配をしてくれては」主従十三年目の對面であるから、種々お話があつた、サア然うなるとお手許不如意と察して二日に一遍、三日に一遍と何か持て来る、忠左衛門是れを受けて、ア「吉右衛門夫婦は感心なものだ、以前の恩義を思つて、夫となく此方を助けるものと御夫婦が兩人の深切を喜んでゐらつしやる、丁度十日ばかり忙がしかつたので、吉右衛門が伺はなかつた、吉「お竹除まり吉田さまへ御無沙汰をしたから、今日は往て来やう」竹「さうサ、妾も伺ひたいと思つてゐたところ」澤庵を一本提て吉右衛門、お屋敷へ来て、吉「へ今日は」新「吉右衛門か、久しく見えななんだ子」吉「へエ、チト忙がしかつたので御無沙汰いたしました、御新姐さま此は只今蓋を開けました、丁度召上り頃でございませす」新「オヤ、毎度心配では困る」吉「へエ今日日は、旦那さま」忠「吉右衛門か能参つた」吉右衛門旦那の容子を見ると、如何に器量人でも大

腹中でも、何か餘程御心配と見えて、歎息をして下差俯ぶいてゐる、ハテナ、常にならぬ此太息を吐てゐらッしやる、何か御心配なことがあると見える、ト伶俐なる吉右衛門、早くも此を悟りまして、直旦那さま、御免下さい「直吉右衛門、又參れ」次室へ退つて来て小さな聲で、直御新姐さま、失禮なことを申し上げるやうでございますが、何か旦那さまに、御心配なことでもございませんですか「直吉右衛門や、旦那さまは決して吉右衛門に申してはならん、と仰しやるのだが、實は旦那さまは、今度五萬三千石の淺野さまへお召抱になるのさ」直夫は結構なこと「直其淺野さまのお留守居の堀部さまとは御懇意であつてフトお會あそばすと、當時旦那さまは御浪人と知て、何うも貴殿のやうな人を、浪人をさして置は惜い、手前主人へ御推舉申すと、今度貳百石でお抱へになりませう約定が出来て、支度金五十金をお贈りになつた、其お金をお受取になると、諸方のお拂ひをなすつたんで、然うでもない、淺野家へお抱へになる其翌日から借金取が来ては見識に係はる、夫ゆるお拂ひをなされると、サアお金が少々足らなくなつたから、お支度をして御奉公をなさる事が出来ない、金は失なる支度は出来ない、然うなつて見ると、全く堀部どのを偽つて金を申し受たやうにあたり、何とも申し分がないから、切腹をなされて、死でしまふと仰しやるんで」と、涙ながらに旦那様の一伍一什のお話をなさると

直夫は大變、一體其お金は何のくらゐ「直夫は三十金要る」吉右衛門胸に浮んで十三年前三十兩恵んで下すつた、此ア何うかして三十金調達なけりやア成ない、萬一旦那さまがお腹でも召やうになつては、取返しがつかない、と思ひましたから、直御新姐さま江戸といふところは、高が八百屋風情で有ましても、三十金ぐらゐは何うにでもなりませう、手元になくとも融通して、屹と私が調達ますから「直吉右衛門爾の力で夫が出来るやうなら、旦那さまも御奉公が出来て、此んな嬉しいことはないが」直和女から、旦那さまが御心配なさらないやう、宜い案配に繕つてお置なすつて、何しろ三十金といふ纏まつた金でございますから、五日許り御猶豫を、併し金は出来た、旦那さまのお身に、萬一お間違のあるやうでは、何の役にも立ちませんから、夫は和女さまが能くお心を注いで、呉々もお間違ひのございませんやう「直エー、夫は私が附てゐるから、夫では頼みますよ」直エー畏まりました遣作ありません「吉右衛門も屋敷を出て、駈出して歸る途中、腕を組で考へ始めた、御新姐さまには遣作ないと申し上げたが、三十兩は大金、此いつは大變なことが出来た、ア何ういふ事にしてお金を調達てあげやうか、とボンヤリして自宅へ戻つて来る、直お竹、今戻つた」直何うしました吉右衛門さん大層心配さうな顔をして「直お竹、マア此處へ來ねエ、何うかして旦那さまが、主取仕官をなさるやうに

してあげたい」竹何を言てゐるんだい」言何ぢやアねエ、今斯うしてゐるのも、十三年前、お國で汝と己が不義をして、お手打となるところを、生命を助けて下すつた、其上お金まで頂いたんだ、今日旦那さまの御機嫌を伺がうと、太息を吐て心配さうな顔、ハテナ、毎もにねエお氣がお勝れなさらねエやうだから、御新姐さまにお伺ひ申すと、旦那さまは決して吉右衛門に言ぢやア可ないと仰しやるが、内密で話して聞すと仰しやる、其お話しを伺ふと五萬三千石の淺野内匠頭さまへ、旦那さまが今度二百石で御奉公をなさる事になつた、ところが留守居の堀部彌兵衛さまのお周旋で、早速支度金としてお金が来た、乃で旦那さまが、御奉公をするお屋敷へ借金取が来るやうでは不都合だからと、悉皆お拂ひをなすつたんだ、スルト今度は肝腎のお支度が出来なくなつた、三十兩のお金がある、淺野さまへ御奉公が出来ると、何うだ汝の力で三十兩の金を才覚することは出来まいか、十三年前汝と己がお手打になるところを助けて下すつた上に三十兩のお金を下すつた、其御恩を思へば、何うしても此金は調達てあげなけりやア成ねエ、此お金がないけりやア、偽つて支度金を受けたことに當つて、堀部さまへ對して申し分がないから、腹を切て死でしまふと、旦那さまが言てお在なさるんださうだ、夫だから己が、五日ばかりの中にお金を調達て来ますから、其間に旦那さまが腹を切ておしまひなさる

やうでは、何の役にも立ねエから、夫だけは御新姐さまへ願ひ申して来た」竹オヤ、夫を受合て来たとお言だが、残らず此身代を賣たところで、三十兩纏まりアしない何うしたら宜らう」と心配してゐる、ところへ今年十三になる娘のお加代が歸つて来た、如只今戻つて来ました」言お加代、お菓子があるから食な其方へ行て」次の室でお加代がお菓子を食てゐる、言何うしよう」竹三十兩のお金がある、旦那さまが淺野さまへ御奉公が出来る、と伺がつて見れば其お金は何うでも調へてあげなければ濟ない、三十兩とは行まいが、少し無理を言たら二十兩や二十五兩は出来やう」言何だい、何處に廿兩の卅兩のといふ代物があるんだ」竹致方がないぢやアないか」言何が致方がないんだ」竹年は十三だが伶俐なお加代、能言聞して、彼女を吉原へ連れてつたら、お金にならない事は無いぢやアないか」言べら棒め、夫婦の中の只一人ッ娘吉原へ娼妓奉公をさせやうと、大きくしたんぢやアねエ、雨が降たつて雪が降たつて、一生懸命稼いでゐるなア、早くお加代を大きくしてエ、夫ばツかりで、己が飲てエ酒も飲ねエで稼いでゐるんだ、其お加代を何で吉原へやられるものか」竹夫ア吉右衛門さん、其心もちは妾しだつて同じこと、然れども三十兩のお金は逆も出来やアしない、其うちに旦那さまが腹を切ておしまひなされば、幾ら此方が心配したつて、夫婦の心が通じやうがない、假令吉原へ行つたッ

て、何んな出世をしまいものでもない」言然うだ、己から其んなことは當人に言ないから汝から、話してくれ」竹、エ妾だッて盛の目の見えなくなるやうな、其苦しい思ひをして産だ娘だものを、妾から言ないから爾「言其んなことを言たッて、汝から」竹、エ爾さんから言のが順だ」言何の、女の子だから、汝から言ふのが本當だ」お加代は次の室から其處へ出て、お父さん母さん、御容子を伺ッて居りましたが、御恩人の吉田様にも金の御入用、嘸お困りでございますせう、妾を吉原の娼妓とかになすッたら、お金の出来なことはございませう、其お金をもッて御恩人の吉田さまへお上なすッて下さり」と年は十三だが伶俐ものでございませうから、両親の傍へ来て兩手をついて言れた時、吉右衛門腕を組で涙を膝へボタ／＼落す、お竹はワツといふて其處へ泣倒れた、言お加代、長いことちやアない、父さんが一生懸命稼いで直迎ひに行から、辛くも吉原へ行てくれ」無何うぞ一日も早く然うして下さり」言お竹、泣てゐるところぢやアない、お加代が斯ういふ決心、早くお金を調へねと、萬一吉田の旦那さまに異變でもあつたら、此方の心づくしが無駄になつちやう、早く髪でも結てやれ、今日の内に支度をして、せげんの紋兵衛を懸意にしてゐるから、田町に行て話しをしやう、此も汝を娼妓にしやうと懸意になつたわけぢやアねエが、不圖した事から妙な奴と懸意になつた、偶にやア行た

り來たりしてゐる紋兵衛、彼奴に無理を言ア、何うにかならねエことはねエ、サ、早くお竹、お加代の髪を結てくれ……」竹、夫ぢやア汝は、父さんや母さんが御恩を受けた吉田さまの爲に、吉原へ行ておくれよ」お父さん母さん御心配なさいませう、何うぞ然うして下さり」お竹は涙ながらに、櫛道具を出して娘お加代の髪を結ぶ。頓て髪を結しまふ、賣物に花、お加代に薄化粧をさせる、吉右衛門夫を見て、言アア、折角十三まで育ッて、有ふことか吉原へ連込むとは、斯んな情けねエことはねエ」竹、夫ぢやア汝行ておくれか」お母さんご機嫌よう」竹、夫ぢやア最う幾年會ふことが出来ないうが、若も此が今生の別れと……」ワツと泣出だす、言、コレ泣てゐるところぢやアない、見世を氣をつけてくれ」此から吉右衛門、娘のお加代を連まして、進みかねる足を思ひきッて踏込み／＼淺草田町の袖摺稻荷の横町、長家ぢやアございませうが、小奇體の利た家、言、御免よ、紋兵衛さんゐるか」言、誰だ、言、己だ」言、珍らしい、オヤ娘を連て來たか、大きくなつたネ、此ア吉右衛門さん、暫らく御無沙汰をした、今日は觀音さまへ來たのか……オ、娘や、大層大きくなつた、此ア吉右衛門さん、能來てくれた、何か御馳走しやう」言、エ、構ッておくんなさるな、愚妻も宜しく、爾さんの女房さんはお異條はありませんか」言、有がたう愚妻も盛んだ、吉右衛門さ

んお茶を、サア娘やお茶を「言有がたうございます」其樂しみだらう、此んな大きくなつたから……「言時に紋兵衛さん、玉があるんだが」其其いつは有がてエ、美しい玉が有ア何んなにでも世話をして貰ひたい、年は何歳だい「言エー十三、少し年は行ねエが何うだ、容貌は十人並揃つてゐる」其一體夫ア何處にゐるんだい「言夫ア爾さん世話をすりやア分るんだ」其玉を見たい、一つ其玉を連れて来て貰ひたい「言なアに傍にゐるんだ」其何處に「言アノ此處に」其吉右衛門さん、冗談言ちやア可ねエ、夫ア家の娘ぢやアないか「言實は此娘だ、紋兵衛さん日頃悪意にしてゐるから爾さんのところへ来たんだが、何うしても爰に三十兩なけりやア、此吉右衛門の男が立ねエことがあるんだ、濟ねエけれども此娘、無理でもあらうが、三十兩金を調達してもらひたい」此時に紋兵衛 其ア一貴家の娘やか、娘やなら美しい容貌だ、爾んこの娘を傾城ともいへねエが、幸ひ此玉を持込んで……其いつは何しろ可哀さうだが、奉公するから辛エといふわけはねエ、己が一つ宜い樓を捜さう「言早速やつて貰ひたい」其夫ぢやア直に廊内へ連れて行く、娘や宜いか「加ハイ」其夫ア感心だ、吉右衛門さん、私の家でも附てゐるから心配しねエが宜い「言夫ぢやア加代、小父さんと一緒に……」加父さん御機嫌よう「此が娘の顔の見たさめと、吉右衛門下俯むいてゐる、直に紋兵衛お加代を連れて吉原へ来ると、松葉屋半藏

をはじめ彼方此方八方から、全で網の目から手が出るやうに抱へ人があつたが、其中で一番高價が松葉屋半藏で手取六十兩、爰で紋兵衛といふ奴が、吉右衛門の何にも知ねエのを附込んで三十兩は自分の懐中へ捻込んだ、此が二枚證文といふんで殿しいんだが、圖術などには能あるやつで、自分が判人ですから何うでも出来るんだ、頓て自宅へ戻つて来て、其吉右衛門さん、あ待遠だつた「言何ういたしまして、お骨折さま」其時に吉右衛門さん、年が行ねエから三十兩は無理だ、容貌が美いから二十五兩といふのを、私の顔で漸うのことで三十兩に漕つけた、證文を見てくんねエ「言有がたうございます、全く此ア爾さんの盡力だ」其吉右衛門さん、行た先は松葉屋半藏、樓主は宜い人だから、安心をしてゐなせエ、母親が此方へ来た時には、宜い工合に會してやらう、吉右衛門さん、爾も此方へ来た時、娘の顔を見てくんねエ「言娘を娼妓にたゝき賣て、親父でござ候ふと、何の面さげて娘に會して頂けませう、金が出来て此方へ来るまで、娘にやア會せせん」其さうかい、吉右衛門さん、金を受取てもくれ「言證文は此で宜うございますか」其ア「宜い」言時に紋兵衛さん、御馳走でもするんだが、鑑一文私の身につくんではないから、此後利得けて謝禮に出るから今日のところは不勝して「此野郎三十兩懐中へ利得てゐるから、謝禮どころぢやアない、手前の方から謝禮を言て宜いんだ紋兵衛の

女房が、善子吉右衛門さん女房さんに安心するやうに妾ども、此處にゐるんだから、抱へ主は宜んだから」茲吉右衛門さん、途中で金を奪られねえやうに氣をつけてくれ」吉元談言ツちやア可ねエ、娘を賣つた金を奪られて何うするものか、夫れぢやア紋兵衛さん女房さん有がたうございました」自宅ぢやア女房お竹が心配してゐる、吉今歸ツた」竹オ、吉右衛門さん、何うしました」吉己ア娘を賣て來た」竹さうですか、泣きましたか」吉ナニ、泣も何もしねエ、夫でも紋兵衛の家を出るとき、己の顔を見て何だか別れが惜かツたやうだが伶俐だから行ちまツた」竹オヤ然うかい、夫でも泣もしない、親のためだと、親孝行のお加代だから、其娼業してくれるとは、親ながら濟ない、夫は然うとお金は出來たの」吉紋兵衛が骨折で漸う卅兩に漕つけてくれたんださうだ」竹夫ア宜ツたねエ、ぢやア早く持てお行で」吉だがな、此金を剝出して持てツたツて、旦那が物堅エから、屹とお受なさりやアしねエ、何うしやう……ウん斯しやう、菓子折の中へ能金を入れてきてエ事を聞たから、菓子の下へ金を並べて、而して、兎も角も何か菓子の折を買て來てくれ……オット少し待てくれ、菓子折は止ら」竹ぢやア何うするの」吉何うするのツて、菓子折は餘所へやるてエとがある、折角の金を餘所へ遣れツちまツちやア」竹夫も然だね」吉ハテナ、夫ぢやア黙止て紙へ包んで、空アつかつて火鉢の傍へでも置

いて來やうか、後で旦那が氣がついて、此處に金があると支消て下されば宜いが、若餘所の奴が來て此いつア宜いものがあると、其儘袂へ入てしまはれた日にやア、何にもならねエ此いつは何うしたら宜らう」竹夫ぢやア吉右衛門さん、斯うしやう、旦那さまが豆煎が大お好だから重箱の中へお金を入れ、其上へ豆煎を載て行けば、豆煎だと思ツて召上る、然うするとお金が出る」吉ウん、夫が宜い、ぢやア汝早速豆煎を製へてくれ」で吉右衛門、氣は進まないが見世の青物を種々捻くツてゐる、其間に豆煎を煎はじめ、竹サア吉右衛門さん出來たよ」吉出來たらお加代に遣てくれ」竹お加代は居やしないぢやないか」吉ウん然うだツけ、未家に居るやうな氣がして可ねエ」是から重箱の中へ小粒で三十兩、其上へ豆煎を悉皆と敷いて、吉田忠左衛門の所へ持參する。

吉右衛門は吉田忠左衛門のお住居の臺所の方へ參りまして、吉エー御新姐様、女房が旦那様がお好でゐらつしやるから、豆煎を製へましたから、只今持參いたしました。何うぞ旦那さまへお進下すツて」新夫は、毎もながら爾の御深切有がたう」吉何ういたしまして、少々見世が忙がしうございますから御免下さいまし」逃るやうにしてお暇をして歸りました、御新姐が新旦那さま」何だ、吉右衛門が來たやうだ」新ハ、アノお竹が旦那さまの好きな豆煎を製

らへて、吉右衛門が届けました」忠「ア、然やうか、毎も替らぬ彼の志ざし、頂戴をしやう」大層お好きだから御新姐が重箱を持つて出たのを、蓋を拂った忠左衛門、忠「オ、大層美味さうに出来た」豆煎を口に入れ、パリりと噛と、忠「ア痛……豆煎の中に石でも入ッてをるものと見える」夫から口中から取出して見ると、貳分金でございます、忠「ハテナ、合點の行んこと」又豆煎を口に入ると、又ガリリ、見ると又二分金、乃で中を改めると小粒で三十兩、忠「ハ、ア、コレ其方は話しては可んといふのに、此度の主取の事を吉右衛門に話しを致したので有う」新「眞に申し譯がありませんが、吉右衛門の親切に料されました、此度淺野家お抱への事から聊かお金の足りない事迄逐一申し聞たのでございます」忠「ハ、ア夫だ、生命を助けて三十兩遣はした、吉右衛門が夫となく、三十兩の金を此方へ戻す、高の知たる八百屋風情、三十兩は疎か三兩の金も纏まつてはをるまいと思ふ、ア、飛でもないことをした、此方行て戻して參る」新「マアお待ちあそばせ」忠「イヤ待てはをられん」重箱を持つてお出かけになる、此方は吉右衛門、言今歸つた」忠「何うなさいました」言「御新姐さまに豆煎をお渡し申して、ソコへ歸つて来た」忠「夫ア結構でございました」言「ところが彼アいふ堅い旦那さまだから、直にお受取はない、屹と返しにお入來になるかも知れないから、若し入來になつた時は、己ア隠れてしまふから、汝、宜いや

うにやつてくれ」忠「宜うございます」いふうちに竹が、竹「吉右衛門さん旦那が彼方からお出でなさいました」言「夫ア大變だ」二階へ登る、忠「免せ」竹「此ア旦那さま、入ッしやいまし」忠「竹片門前と聞いて、分らんことは無らうと參つて見れば、立派な見世」竹「何ういたしてお恥かしい見世先此方へお上りあそばして」忠「イヤ、上らんでも宜いが、吉右衛門をるか」竹「吉右衛門は只今不在でございます」忠「實は此豆煎をくれたのは好意のほど喜ばしいが、中に小粒が三十兩、交り込で入ッてゐる、此金を受る覺えはない、是を戻す」竹「どうか旦那さま、然やうな事を仰しやいませんで、何か存じませんけれど、折角吉右衛門が持參したものでございませうから」忠「イヤ、夫でも其方は吉右衛門の女房であるから」竹「妾の存じませんこと、何卒お持歸りを願ひます、吉右衛門のをります時に、恐れ入ましたがお渡しを願ひます」理窟にやア勝ない、忠「然らば吉右衛門のをる時に渡すであらう」とお歸りになる、それから兩三度入らしたたが、吉右衛門が會ない、で、御新姐が、新「旦那さま、折角吉右衛門夫婦が心を籠て持參いたしましたのでございませうから、此の金をもつて御支度を遊ばして、淺野家へ仕へて後にお歸し遊ばしたら、定めし吉右衛門も喜んで、又彼等夫婦の深切も届くといふもので、然やうお憤ほりならんで御使用になつたら」忠「イヤ、夫も道理、然らば此金で伊勢屋六兵衛から質受を

「しやう」と神明前の伊勢屋六兵衛といふ質屋から、大小衣類其他質受をなさる、スルト其金を改めると松平出羽守さまから受取た刻印の金、夫ぢやア先月の二十四日、土蔵のヤシロを切て二百兩の金が紛失をしてゐる、確かに其賊は吉田忠左衛門に違ひないと町奉行松前伊豆守さまへ此段、家主差添にてお届をいたした、島村八右衛門さまのお長屋を借て、吉田忠左衛門のすること、チャンと願書の内認めてございますから、直にお捕方をお向になつた、爰で吉田かたへ、一人の茶屋の若い者體の男が來て、当御免下さいまし」忠「ハ」忠「エー手前は神明前のいろはといふ割烹店でございますが、エー武家さまが、何か此方の旦那さまに御用があつて一寸お目にかゝりたいと仰せでございます何うか直にお入來を願ひます」忠「ア」然やうでござるか、大きに御苦勞、然らば直に參るから宜しく申してくれ」忠「ハ」忠「然やうなら」と歸つた、此方は兼々淺野内匠頭お留守居堀部彌兵衛金丸、此度の御奉公について種々お盡力であるから此ア此邊へお往でになつて、何かお話があるに違ひない、此方が延引をしてゐるから、斯う思し召てお支度をなされ、忠「此や夫では一寸行て參る」然やうなら早くも戻りあそばせ」と御新姐が送り出す、島村さまの御門を出ると、忠「御用だつ」と聲がかゝる、ピタツと後へ退つて身構へをして、屹と前面を見たる忠左衛門 忠「此方は常陸笠間を浪人いたしたる、吉田忠

左衛門と申する者なり、御用といふ聲をかけられる覺え毛頭ない、何か人遠でござらう、お控へめされ」といふと、忠「黙止れ神妙にいたせ」と緋總の鐵棠にて打てかゝる、體を轉したが吉田忠左衛門、ハ、ア分つた、此方身に取て罪の覺えはなけれど、偕は吉右衛門が、賊を働いてアノ金を持って來たに違ひない、ア飛だ事を妻が申し聞たるために、吉右衛門が賊を働いて金を誑へたものと見える、夫も此も皆此方の爲を思つていたした事であるから、彼を賊に落したくない、ア此忠左衛門の運命此までなり、吉右衛門に代つてお細を頂かうと覺悟をいたしてお細を頂戴した。

直に吉田忠左衛門を松前伊豆守お役宅へ引致る、島村さまの門番が驚いた、中間が其處へ來て忠「御門番さん何でせう」忠「彼は吉田忠左衛門どの、御用人さまが知てゐらつしやる方だ」忠「ア」飛でもない事」忠「何うした」忠「一癖ある方と思つたが、何かあるに違ひない」頻りに噂をいたしてをります、サア此事が御新姐に知ましたから、御新姐が吃驚して御心配をなさる、此方は吉右衛門其んな事は知らないから、忠「竹」忠「何ですエ、吉右衛門さん」忠「宜い案配に旦那さまがお入來なさらねエ、アノ金をお支消なすつたに違ひない」忠「然やうでせう」忠「然やうすりやア淺野さまへお住込なさるに違ひない、ア有がたい……何しろ御容子を、汝行て伺つ

て来ねエ」モウ旦那が入ッしやらなくなつたから、お竹が御新姐のお好きな香の物や何かを持
 て、島村さまの御門を入ッて、吉田さまのお臺所から、竹「御免下さい」新「誰だエ」竹「妾でござ
 います御新姐さま、竹でございます」新「ア一宜いところへ来ておくれた」竹「今日は旦那さまは
 ……」新「竹や旦那さまはお細が掛ッても町奉行お役宅へ引致された」竹「夫は又御新姐何ういふ
 わけで然ういふ事」新「吉右衛門が親切にもお金を持って来ておくれたから、夫で質物に行てゐる
 お大小や其他の物をお受出しになッて、モウ是で淺野さまへ御奉公が出来ると思召し、其お
 喜びの甲斐もなく、御門前にて召捕れたるは、多分アノお金に仔細があるに違ひない」竹「夫は
 マア大變なことでございます」ところへ御用人がお入來になッて、吉田の御新姐にお會になり
 まして、用「倍此ほどは飛たどでございます、漸々手を廻して容子を尋ぬると、松平出羽守さま
 の刻印のある金にて、伊勢屋六兵衛方にて、先々月の二十四日の夜、賊に奪れた金と相分つた、
 何か此には間違ひがござるから」と御用人さまから仰せ下すつたから、吉田の御新姐は大層喜
 んで、斬有がたうございます」影で聞てゐるお竹が、此ア大變、で、御用人が歸るとお竹が、
 竹「御新姐さま、妾は吉右衛門に用がございます」と吉田のお宅を出ると駆出すやうに急いで
 歸ッて來た、竹「吉右衛門さん大變ですよ」吉「何うした」竹「爾さんが持て行たお金は刻印のある

お金ですと」吉「ナニ刻印金だ」竹「夫でアノお金は、先々月の二十四日、伊勢屋さんで奪れたお
 金だと言んで、伊勢屋さんから訴へたために、吉田の旦那様にお細が掛ッて、今お奉行所でお
 調を受けてゐらッしやると」吉「エー其いつは大變なことだ、エー思へばく憎い奴は四衛の紋兵
 衛だ、アノ畜生が賊に違へねエ、夫ぢやア己が此から田町へ行て、紋兵衛の野郎をフン掴まひ
 て、お奉行所へ連れて往けば、吉田さまの宛は晴るんだ、能もアノ盗ッ人」竹「マア吉右衛門さん
 爾、其んなに、暴れちやア可ない」吉「なアに宜い」いふと吉右衛門、向ふ鉢巻をして、天秤棒
 を以て、芝の片門前から、トツ／＼トツ／＼大通りを、吉「盗ッ人め、紋兵衛め、盗ッ人め、紋
 兵衛め」言續けにして飛で來る、此方は紋兵衛が吉右衛門の娘のお加代を、松葉屋半蔵へ六十
 兩に箱込で、三十兩といふ金を取たなア二枚證文、タンマリ時ならぬ金が入つたから、女房の
 お仲を相手にキワダの刺身で、大きなお膳の上に、チヨツピリ／＼三種ばかりの箸休めを
 並べて、然も樂しさに女房と兩人で献つ献れつ快い心もちに酔ばらッてゐる、ところへ表口
 の格子をガラ／＼恐ろしい開やうをする、途端に大きな聲で、吉「盗ッ人紋兵衛居るか」と嗷
 鳴ながら土足で夫へ飛込ひと、突然天秤棒を振冠ッて、吉「ヤイ盗ッ人、大盗賊野郎」女房お仲
 は驚いて飛退た、紋兵衛吃飛して、竝誰だと思つたら吉右衛門さん、爾さん腹を立るのは無理

はねエが、盗人なんてエのは人間が悪い」言何を吐しやアがるんだ、此盗人野郎、ヤチリ切め」
 紋「オイ、爾さんの娘を松葉屋さんへ六十兩に箱込で、三十兩と言たなア悪いが、金を返
 しやア何でもねエ、夫ア二枚證文をハツたなア私しが悪いが、ツヒ悪意の中だから」言「オイ此
 ん畜生、謝金を要ねエと言アがッて、途方もねエ三十兩得けやアがッて、畜生、爾は盗人の癖
 に、又其んな太エことをしやアがッて」紋「何ぼ何だッて己は面を賣る稼業、盗人呼ばりは止
 くれ」言何を吐しやアがる、マゴマゴすると、擲つけるぞ、エ、文句をいふな」と天秤を投り
 出して坐ッてゐる紋兵衛をウンと引摺いた、紋兵衛驚ろいたなア、力のある吉右衛門に逆さに
 引かつかれて、女房のお仲が制止やうとするのを、突然蹴倒したから彼方へ尻餅をつく其突端
 に吉右衛門が表へ出る、言「サア此盗ッ人野郎、大盗人野郎、文句をいふにやア及ばねエ、己と
 一緒に行ア分るんだ」紋「エ、吉右衛門さん、何處へ行んだ、己の家でも話は分る、第一逆さに
 して摺いだ日にやア苦しくッて仕やうがねエ、同じ摺ぐなら尋常に」言何をグツ、吐しやア
 がる、逆さにしなけりやア腹が癒ねエ」紋「さう振て置ちやあ、今飯の食たてと苦しくッて仕や
 うがない」言「エ、爾の苦しいのは三年も堪エらア」今ウンと飲食をしたところで、逆さに腹を
 ツイ、縮られるから、堪らなくなッて、グロ、と吐く、吉右衛門が逆さに摺いでゐる、其

胸から腹へグロ、言「オ、臭エ、此ん畜生、エ、汚ねエ、今食やアがッたキツダの刺身が己
 の胸へかゝッた、オ、臭エ此ん畜生」ヤ、紋兵衛の近所ぢやア驚いた、△「ヤア紋兵衛さんが、
 質物を出したり受たりするのは訝しいと思ッたが盗賊なんだへ、紋兵衛さんは子分が大勢ある
 何うも平素から目つきが變だ、アノ女房さんは、女盗賊筑波のお勘の妹ださうだ」其時分の女
 の大盗賊の妹だなんといふ噂をするから驚ろいた、此方は此吉右衛門が、一生懸命に紋兵衛を
 逆さに引かづいたまんま、町奉行松前伊豆守さまのお役宅の、御門へ來りまして、言「お願ひで
 ございます」△「コレ差越願ひは相成らん、願をもッて願ひ出よ、御手續をいたして願ひ出よ、
 控へなさい」言「大切なところの主人吉田忠左衛門どのが、冤の罪で當ち奉行所の手をもッて
 お調を蒙ッてをります、夫ゆる大盗人を引摺いて只今御訴へを致すんで、控へてをられませ
 ん」驚いたなア女衛の紋兵衛、紋「オイ吉右衛門さん、己の家は兎も角往來ぐらゐは、我慢をし
 たが、お奉行さまの御門で大盗人は手ひどい」言「喧ましい、黙止てゐろ」紋「黙止てゐられるも
 のか」グロ、言「又嘔吐を吐く」紋「爾さんが餘まり腹を縮るもんだから復出たんだ」言「此野
 郎、汚ねエことをいふな」爰で直に奉行へ是を申し上げると、松前伊豆守どのは吟味與力に仰
 せ付られて、吉右衛門が擔いで御訴へをいたしましたる女衛紋兵衛をお取調へといふ事になる

何故此を直ち役宅へお入になつたといふと、何うも吉田忠左衛門を、先頭から吟味いたしたか
前後不揃ひなることを申し、伊勢屋六兵衛かたへ入つた盗賊とは思はれん、で、此は他に犯人
ある者と思し召、爰で速かに訴へをお聞届けになつたのでございます。

乃でも奉行所において紋兵衛を取調べて見ると決して盗賊ではございません、然る夫ア二枚證文
をハツたのは悪うございませうが、私は盗ツ人をいたした覚えはございません、確かに新吉原江
戸町二丁目、松葉屋半藏後家お光の手より六十兩の金を受取たに違ひございませぬ」で、二枚
證文は容易ならんとだと云つて吟味與力から此事を直にお奉行へ申し上げ、吉原の松葉屋半藏
の後家お光をお呼出しになつた、サア松葉屋では何だらう、遊女屋なんざア随分盗ツ人が来て
金を支消まして、盗ツ人と承知しながら金を支消することがある、で、折々引合があるが、大見
世なんざア其んなことはない、引手茶屋が附てをりますから、怪しいと思ふ奴は、決して送らな
いが、多分何かの引合だらうと、町役人が附て後家のお光が、松前伊豆守さまのお役宅へ出ま
した、其時法廷が開てお調べになると、此金と申しますものは、四月二日の夜に伊勢屋六兵
衛方番頭重藏、此者が手前ども抱への遊女かしくと申します者を、二百兩にて身受をいたし
ました、其時に受取ました金で、女衞紋兵衛より賣込ましたる加代と申します者を、六十兩

をもつて手前が約定いたしまして、當人と金と引替にして紋兵衛へ渡したに相違ひいませぬ」
乃でモウ松葉屋半藏の後家お光は何のお咎もない、勿論自分の賣物を二百兩の金で受出した者
がある、夫は大丈夫と思つたから、他の奉公人を買入るために金を出したのだ、で、其方の申
立、有體に相判つたるによつて、以後は心をつけて取計らふべし、其金は不淨金である」と、
乃で残つてゐる金は残らずお奉行所へお納をする、結局松葉屋では二百兩の金を損をしたやう
なものでございませう、何うも不淨金であつた日には致方がない爰で松葉屋光は退る、直に伊勢
屋六兵衛番頭重藏をお召捕、お調べになると、松葉屋のかしくを身受をして、芝源助町に一寸
した家を設らへて外妾にしてあるモウお奉行の手でお調べになると、女に迷うて主人の土藏を
破つたのだから、大盗賊でございませうから、御威光に恐れて逐一白状をした、主家の恩を忘れ
主家の土藏のヤチリを切て大金を盗み出したる段、重々不届につき死罪獄門、といふお申渡、
何うも昔は拾兩取ア首がないのだ、爰で番頭重藏は裸馬に乗まして、江戸市中引廻しの上、大
井の郷鈴ヶ森において、打首獄門に處せられることに決定いたしました、乃で伊勢屋六兵衛を
お呼出しになつて、率、其方儀は召使重藏矢尻を切り、金を盗みしを能取調べずして、粗忽にも
他に盗賊あるやうに訴へ出たる段、重々不届につき青銅五貫文過料を申し付る」此アお叱りの

上過料を納めて退る、又枚兵衛の方は吟味中入牢でございましたが、一方の事落着の後お呼出しになつて、貳枚證文を差入て他人の娘を、松葉屋かたへ徴込しは重々不慮に付、伊豆の三宅島へ遠島申し付る、と紋兵衛は遠島、爰で吉田忠左衛門を引出して、宛の罪なること相分つたればと放免を言渡され、吉右衛門と同時に呼出しになつて、幸「舊恩を忘れず、主人吉田忠左衛門へ對し、厚き志ざしは天晴なり」とお賞になつた。

兩人を爰でお退にならうといふ時に、吉右衛門が、直恐れながら申し上ます、此吉右衛門願ひたてまつるは、此吉田忠左衛門どのは浅野内匠頭さまへお召抱へのお約定になつてをります、然れば浅野家留守居堀部彌兵衛どのを呼出になつてお引渡しになりませうやう、萬一此へお退になる時は、浅野家お抱への一條御破談になりましては、主人、忠左衛門兵に困難にごごいます」と申し立た。其申し立を尤もとお感じになり、直に浅野家留守居堀部彌兵衛をお呼出しになつて、お引渡しになる、爰で忠左衛門を堀部彌兵衛が、奥主人家來に相違ございません又冤罪にてお細の恥を蒙るもの、此まで何人もございませぬ、此ア何の仔細もございませんと申し立て立派に引取つた、爰で吉田忠左衛門、青天白日の身となつて、速やかに浅野家へお往でになつて百五十石頂戴をする、借その御縁がありましたるによつて、何うも忠左衛門の評

判が宜い、で、堀部彌兵衛と相談をして、吉右衛門のことを申し上て、後に此八百屋稼業を止にして、寺坂吉右衛門新参で浅野さまへ足輕にお抱へになつた、此ア其志ざしが如何にも立派で、町人にして置は惜いといふんで、斯ういふ事になりましたで、此吉右衛門の傳記は別に又申し上ます、借吉田忠左衛門は爰に初めて安堵の思ひをなして、主君を大切に日々の公用に心を用ゐ、朋友に信義あつく、江戸國かけて家中の評判最もよろしく、文武兩道に秀でゝゐる其の上軍學が能く出来るところから、彌元禄十五年十二月十四日、本所松坂町の吉良邸へ推参のとき、裏門の指揮を司とる、大石主税の後見になつた所以でございませぬ。

吉田忠左衛門 終



中村勘助

中村勘助正辰、七石三人扶持を頂いて先手鐵砲組を勤めてをりました、人といふものは何か事がなければ可んもんで、某時御城代に呼ばれて、大石内藏之助さまの許へ罷り出た時に、此方へ参れと仰しやる、で内藏之助の前に出まして、中「此は大夫御機嫌よう」大「中村どの、其許は別に今日は主君の御用は」中「手前は非番でムいます」大「然やうか、では備前の岡山まで頼申したいことがあるが如何だ」中「委細心得ましてございます」大「此は此方親戚池田出羽かへ往て貰ひたい」中「ハ、畏まりました」乃で御書面を持って、大「別段に往は急いでも、歸りは急がんでも宜しい」中「畏まりました」中村勘助は鐵砲のことが委しい人でございまして始終大石のところへ来て、鐵砲のことについて種々お話しを申し上げたことがあつて、旁御最貞でございまして、夫がために勘助、此お使を蒙りました、大石の屋敷には幾人も人があるが、何か此お使は鐵砲に關することゝ見えます、で、播州赤穂から千種川の縁を段々と三つ石へ出て、備前岡山へ往く順路を踏で往のぞいでございます、で備前の岡山へ参りまして、池田出羽さまへ書面を持って出て、先方へ一晩御厄介になつて、岡山を出發しました、頃は正月二十

日、岡山を出發した時から空は曇って恐ろしい大雪になりました、勘助雪の道を急いだ、雪といふものは烈くなつて来ると、一間先が見えない、丁度船坂峠へかゝつた時は、恐ろしい雪だ此は備前と播磨の國境の時でございます、名代の難所だ、兒島備後三郎高德が此船坂峠へ来て御風箏を奪ひ奉つらんと手配をいたしました有名な處で此時を降つて来ましたが、寒氣の爲に勘助は此時で手足が凍を何とも致し方がない、丁度上郡の取付へかゝると火を焚てゐる農家がございまして、門口から覗いて見ると、大きな圍爐裡の中で火をドン／＼焚てゐる、中「免せよ」△「誰だね」中「道に困る者だが一寸頼みたいが、何うだ、暫らく身體を暖めたいものだ」△「夫ア氣の毒だ、誰の困るも同じことだ、遠慮なしに入つて温らッしやい」ズツと入つて来る姿を見て △「此アお武家さまでございすか、失禮いたしました」中「イヤ」△「其遠慮には及ばん烈い雪だ」△「豪く降て来ました、モウ催ほしてゐたんで、斯う降てしまやア宜うございす、旦那さまア何方で」中「此方は赤穂」△「赤穂の旦那さまでございすか、夫アマア……」中「オ、烈い、此通り濡れをツた」△「寒いお寒くなりました、今焚きます、お茶を一つ」中「此ア忝じけな」△「旦那、其草鞋のまゝ圍爐裡へ踏込だ方が宜うございす」中「ア、快い心もちだ、此で人心地になつた」年齢は六十二三になる肥満した莞爾やかな親父が、手許を襦袢布で

結へた一尺七八寸あるところの脇差の身で、傍らの薪を取てスツバリ切る、然うしちやア圍爐裡へ燻る、勘助が夫を斯う見てゐると、又薪を取てスツツと切つちやア圍爐裡へくべる、中「フウン親爺」考「ハ、中」其方は餘ほど劍術が出来ると見える「考」なアに何んにも出来やアしません「中」イヤ、然うでない、其の方の薪を切る腕前、尋常の腕前ぢやア然うは切れん」考「此ア私イ劍術を知つてゐるわけだねエ、此ア此の鉈が切れるでがす」中「フウン」考「此アハア、私等ア先祖からございす、如何な物でも能切るでがす」中「然うか、マア見せろ……」此ア大層鑄てゐる「考」ハア、鑄ちやアゐますが能切ます」勘助試みに薪を持って切と、スバリと物の美ごと切る、中「ア能切るな」考「此でございすから、夫に使用ひなれたから……」中「老爺、是を己に譲らんか」考「夫ア駄目でがす、爾さまに夫を譲つてしまつちやア、私等アここで薪を割るものがございましてねエ、鉈を買つて、一挺幾許つて取れます、早速困るでがす」中「イヤ無料ではない、老爺一分遣はす」考「一分ぢやア鉈が三挺も四挺も買へます、其様にやア要申しねエ、鉈を買だけなら、宜うがす、一分なんて其様に要アしません」中「然うは可ん、一分で譲り受やう」考「ぢやア今晚だけ使用しておくんなせエ」中「宜しい」考「旦那さま、お腹が空てゐるなら、お粥が出来てゐるから召上れ」中「頂戴しやう」爰で中村勘助、粥を馳走になつて、考「旦那へ泊

マてゐらしツちやア、是から赤穂まで往ッしやるなア、大變でがす」中「夫ぢやア眞に氣の毒だ
 が泊て貰ひたい」老「ハア宜うがす、宜い鹽梅にも著物も悉皆乾いたやうだから休みなせエま
 し」農家の者は餘に世辭は言ないが、深切なものでございまして、爰で中村勘助、其夜は此農
 家へ泊てもらひました、翌朝になつて、中「此は眞に些少だが、子供に何を買てやツてくれ」
 老「夫ア旦那さま、其様な御心配にやア及びません」中「ヤ、然う言んで取といてくれ」老「此ア
 ハア有がたうござエます、婆アどん謝辭申さねエか」此ア旦那さま、豪エ心配のウかけまし
 て濟ましねエ、有がたうござエます」老「モウお出發でござエますか」中「大きに厄介になつた」
 老「有がたうござエます、お影さまで鈍を何挺も買へます」ト勘助は其まゝにいたして、右の
 錆たる脇差を手拭に包み宅へ歸つた、此から御城代さまへ、御用を勤めましたる趣きを申し上
 る、大「大きに大儀であつた、休息をいたせ」夫から二三日は用事に紛れてゐたが、ロヨイと思
 ひ出して農家から讓つて貰つた右の脇差を出して見ると、如何にも能錆てゐる、で赤穂の町の
 研師で御城中へも出入をしてゐる、源五郎といふ名人がある、乃で此者かたへ參つて研をかけ
 て貰はうと、其錆たる脇差をもつて出かけて參りました。

中「源五郎在宅か」源「此ア入ッしやいまし」中「一寸手にかけて貰ひたいものがある此だ」源「マ
 ア何卒此方へ」中「構ッてくれるな、毎も忙がしいやうぢやな」源「有がたうございませす、お領土
 の方が二六時中で」中「夫は結構だ」源「旦那さま、此は餘程錆てをります十日や廿日ぢやア仕上
 りません」中「何日でも宜い」源「私に此をお任せ下さい、氣の向た時に研ませうマアお待ちな
 斯ういふものは兎角疵の有勝ち、研上て見ました時疵があつた日には代は頂戴しないでも宜
 んです夫から私の見込通り疵が無つたら千疋(二兩二歩)頂きます」中「ア、宜しい」源「マア窓
 を切て見ませう」窓を切といふのは、錆てゐるのを一寸ばかり研で見ることで、即ち少しばか
 り研で容子を見て、源「旦那さま、私の見込通り行さうでございませす」中「然うか、ぢやア頼む」
 源「ヘエ宜しうございませす、確かにお預かりいたします」夫から二月ほどかゝりまして源五郎
 が、白鞘に收めて持參した、源「旦那さま」中「オ、此は源五郎」源「何うも結構なものでござ
 いませす、此ア一體御領主のお品でございませすか」中「ウム、何だな源五郎」源「何うも私の見込通りで
 ございまして、無銘ぢやございませす、相州の正宗でございませす」中「エツ、正宗だ」鞘を拂ッ
 て見ると研師は源五郎中身は正宗 中「フウン、生れ替つたやうだ」源「夫だから私が一寸くら研
 上られないと申したんで」中「フウン大層だ、此ア正宗」源「正宗でございませす」中「フウン」中村
 勘助見惚て、中「サア千疋渡す」源「有がたう存じます」中「ヤ、御苦勞だツた」源五郎謝辭を言て

研代を頂いて立歸つた、其跡で勘助は右の農家へやつて来た、中「老爺ゐるかい」爺「ヤ、此アも武家さま」中「先頃は種々厄介になつた」爺「何ういたしまして」中「就ては其方から買つた脇差のとて来た」爺「返しにでもござらつたのでがすか、だから其時鈍だけ買ひやア宜と言はれに、無理無體に一步置てかして、此通り鈍を一挺買つたが、残餘は支消ちまつたから有アしません」中「イヤ老爺、夫を其返せといふのでは無のだ、其方の家から求めて參つた脇差は、斯ういふ品になつた」爺「ヘー……甚く光りました」中「此はナカ〜一步や二歩の品ぢやアない、相州の正宗、其方の家に傳はるものだから返しに來た」爺「夫ア駄目でございます假令何であらうとも爾さまの物だ」中「夫ア然うでない、一分の金も研代も要ない其方へ渡す」爺「イヤ、然うでございませぬエ、一體研代は如何程で」中「金千疋」爺「イヤ、甚いこんだ、一分で賣てからは爾さまのだから、私イ受取ませぬエ」中「イヤ、其方の家から斯る名刀を、些細なる金で此方が買取つちやア如何にも心苦しい」爺「夫ア爾さまに授かつたのだ、掘出しものだ」中「イヤ斯ばかりの名刀を掘出し物の、授かり物などと、武士たるべき者が申すものぢやアない、道が違ふから戻す」爺「受取ませぬエ」中「何でも此方は此處へ差置から」爺「旦那さま駄目だ、己アとこで迷惑だから持てつてくらッせ」丁度此時に原惣右衛門どのが郡奉行を勤めても在だ、爺「私イ夫ぢやア

郡奉行さまへ御訴へいたします」中「夫ア其方の勝手にいたせ、確かに渡したぞ」夫を置たまゝ勘助も歸りになる、爺「ヤア婆アどん、甚いことが初まつちやつた」爺「何だね爺さん」爺「己ア過日の旦那さまは何てエ方か知ねエ、今歸つてしまつたが、早く追蒐つて名前聞て来てくんろ」田舎の人は暢氣だ、名前も何も分らない、只赤穂の旦那様といへば、御領主さまの御家來だと思つてゐた、夫から婆さん後から、爺「モシ〜、モシ〜、お武家さま」中「何か用事か」爺「濟ねエこつてござエますけんど、私等ア爺さまア申しますにやア、貴君様でもお名前があるだらう、伺つて來うと」中「何拙者の名前を聞たいと申すのか赤穂城中で鐵砲組に在る中村勘助と申す」爺「ハイ」中「分つたか」爺「分りましたねエ」中「困つたものだ、中村勘助」爺「ハイ、中村勘助さま、分りました」笑ひながら勘助引あげる、爺「爺さん分りましたよ」爺「何と仰しやるだア」中「中村勘助さまだと言ッしやる」是からいたして、此農家の老爺が態々赤穂の御城下へ參りまして、郡奉行原惣右衛門殿のお役宅へも訴へ申した乃で下役の者が取調べますと、爺「私は上郡に在ります清左衛門と申しますもの、御城中の鐵砲組の中村勘助さまが私らアとこへ此様ものを置ッばなしにして、何う言ても持歸らつしやらねエ、私等ア手からは逆も持返りになりませんで、何うかハア郡奉行さまのお力でも返し下さるやう、眞にハア御苦勞をかけま

して済ましねエが、何うかハア願へ申します」此を下役から總右衛門どのへ申し上る、と聞
になつて此は御領分の者だから、極溫和に調へになると、中村勘助に賣渡したが、品質が宜
いからと言って勘助が返しに往たといふ、親爺の言ふことばかりでは分らんから、爰で中村勘助
を呼出しになる、で勘助が罷り出ると、風「叔斯やうなる願ひ出があるが、其許は御承知でこ
ざるか」申「如何にも心得てをります」風「夫は一體何ういふわけであるか」申「然れば、先頃御城
代さまより御使を蒙り、備前の岡山へ参り、途中大雪のために難儀をいたしまして、其節農
家に立寄り一夜情けを蒙りつたことがござる」と夫から薪割を譲り受けて研かせたら正宗であ
るから返しに行つた次第を申し立てる 風「成ほど」乃で郡奉行の原總右衛門は上郡の清左衛門を
呼出しになつて、風「借其方は如何なるところより斯やうな物を所持いたしてをるか」風「然や
うでござります、お尋ねでござりますが、何うして所持いたしてをりますか、私どもの先祖
は大阪の方から逃れ来たといふ、乃で真間田清左衛門と申します、で私等方祖父さまから聞ま
したが、私の先祖は真田の一族であつて真田清左衛門と申すんださうで、然れども徳川様へ憚
かつて、真田の間へ間の字を入れて真間田としたて、此といふ證據もござりませんが其様な話
しを聞てをります」風「夫では其方かたに系圖のやうな物はないか」風「系圖でがすか、其様なも

のはござりませぬ」乃で原總右衛門、是まで部内を取調べたるに、何年の頃か當國に真田の
一族が逃れ土着したといふとは聞及んでるから、多分然らういふ所の人では無いか知らん、真田
と真間田、如何にも似通ふ苗字だから夫であらう、風「兎に角夫にて其方先祖の身分も相分つた
が、中村勘助氏が其方より申受た脇差が、正宗であつて見れば受取わけに参らんと申しをる、夫
だに依て其方は如何いたす」風「私はモウ彼の旦那さまが元々百疋でお買下さるといふのを鉦
一挺買ふだけ頂さやア宜いと申したので、無理に百疋置て往した、夫だから百疋のうちで鉦
を買て残餘は他の物に支消ちまつたので、假令夫が正宗でござりませうとも、賣渡して見ます
れば、先方さまの品だから、私がお貰ひ申すわけに行ましねエ」風「借々其の方は強情ものだ」
風「強情ものでも何んでも何うあつても貰らうことは出来ましねエ」風「然やうあるか、然らば
追つて沙汰にあよぶであらう」と言つて真間田清左衛門を、郡奉行の原總右衛門が戻しました
乃で采女正さまへ此事を申しあげる、其時に、番夫を見たい」と仰せられまして御前へ持
て出ます、サア刀劍の鑑定、其當時の岡島八十右衛門常樹、五萬三千石の藩中で、此岡島に
續く鑑定家はござりませぬ、で、御前へ岡島を召れて、右の刀を拜見すると、風「無銘なれど
相州もの、何うしても正宗でござらう」と申しあげた、で、采女正さま、番然らば此れは余

が手許に留めおく」とあつて原をお召しになる。采や總右衛門、此れなるところの正宗は余が
 手許へ留めおく、勘助を呼び出せ」と仰つしやつて、此の時に勘助へ、新刀の加賀の兼巻を一
 振下された、此は我國隨一の名刀にして、采此は尤も無銘である、余が先頃江戸表にあつて、
 新刀なれど加賀の兼巻は頗る切味と承まはり夫がために此を得たいと傳手をもとめて兼巻なり
 と贈り來りしものだ、是は余に於いて、放しがたない品なれど、正宗に替て其方へ與せる」
 中「真とに有がたい仕合」と主君の思し召に従つて頂戴をいたした、乃で尙郡奉行の原に申し
 付て、真間田清左衛門をお呼出しになり、御城中で庭先にて清左衛門にお目通りを仰せ付られ
 ることになつた。

吃驚りいたしまして清左衛門は、造だから言ねんぢやアねエ、氣に入ねエから己ア首を切り
 まふと言んぢやアねエか、昨夜の夢見が悪い「ブル／＼震へてゐるシイ／＼と警鐘の聲がかゝ
 る、恐入て頭を垂てをります采「清左衛門」造「ハッ」采「お領主がお言葉を下さるぞ」造「ハア」此
 時采女正さま、采「此りや清左衛門、其方は真に正直なるものだ、余が領分の内にも、其方のご
 とさ農民あるは満足に心得る、此程其方より余の臣中村勘助に賣渡せし脇差は正宗の名刀なり
 依て此は余が手許に留めおくぞ」造「ハア、有がてエこんでござえます、彼様な鑓刀が其様に出世

エしまして、お領主さまのお手許に在ると云はまあ幸福でござります、漸う安心のいたしま
 した、中村さまア私等に返すと言つて、何と言ても受取らねエ己も取ておかれねエから郡奉
 行さまへお願エ申したら、お領主さまのお手許に置れるなア、此上もねエ勿體ねエ」采「其方の
 子々孫々當家あらん限り、年々五十俵づゝ與せる」是は采女正さまが確に真田の血統と御鑑定
 あらせられ、我領分に斯る名家の子孫の住居するも、武門の面目と思し召、只脇差の返禮とし
 て下された話とは違ふ、又臣下一同も其ことは深く御察し申し上る、真に主君の御恩のほどを
 喜びました、爰で清左衛門は有がた涙にくれましてお受を致し、飛ぶが如くに上郡に歸りまし
 た、造「婆さま」采「爺さま、御苦勞だつた、収まりのウついたかのウ」造「収まりは附たの何の、
 豪い收りが附た」采「如何な事だ」造「喜ばッしやい、只今の御領主さまア御明君でゐらッしやる
 御家の有んかぎり、己ア家の子々孫々五十俵づゝ毎年下さるてエ御沙汰があつたア」采「夫ア
 爺さん真に目出てエことだ、爺さん、共處らア隅々捜さッせエ、モウ一本鑓刀見附出して」
 造「馬鹿アなどを吐さねエもんだ」
 此方は采女正さま中村勘助を御感心遊ばし、彼身は小身なれど天晴れ心正しさものなりと、此
 から漸々お引上になりまして、三度御加増を得まして遂には百石頂戴することになりまして、



中村勘助終

手跡が眞に美事でございますから、御祐筆にお取立になる、此勘助が御祐筆になつてから、眞
 に何事も行届いたから、彌よ主君の御氣に入であつた、然るに采女正様から内匠頭さまの御代
 になつて、一層御奉行を勵んでをりますと、元祿十四年三月十四日御主君、殿中松の御廊下の
 御刃傷から、御無念の御最期をお遂げ遊ばしたる時に中村勘助は城中に楯籠りまして、大石内
 藏之助良雄どのに就て神文誓詞血判といふ、天晴れ其黨中の一人でございますました、彌よ仇討を
 遂ましてから松平隠岐守様へお預けになり、翌年二月四日腹を切ます時に、お掛の手を経て隠
 岐守様に願つて、傍らを離さず大切に所持してをつた拜領の加賀の兼巻の脇差にて腹を切り
 人は只言ぬ事をば怨むらん
 浮世の名さへくちなしにして
 といふ辭世を残しました。



村松父子の傳

村松喜兵衛秀直、おなじく三太夫高直、此父子は、父さんは廣間番、二十石五人扶持頂戴をしてゐる、悴三太夫は未部屋住でございまして、ホンの見習に出でゐる、扱て彌よお家の大變といふ早打のお國表へ達しましたる時に、父喜兵衛は悴の三太夫を呼で、妾其方は當年二十五歳來年になつたら、此方六十歳になるによつて、隠居を願つて其方に廣間番跡役を願ふつもりであつたが、此度斯る大變が出来たした、最早主家の御爲に父子は身を捨ねばならぬ、就ては下女下男に暇を遣はし、其方と共に御城代のお指圖を蒙むる心得である「三私は何事もお父上と共に致すといふ覺悟でございます」妾フン、然らば生死は共ぢやな「三然やうでございませす」妾夫でこそ此喜兵衛の伴ぢや」と此より御城中を出まして、始終内藏之助の下知に従つて父子とも深く盡しましたが村松父子は赤穂を退散して江戸表へ下る、一旦大阪まで來りまして大阪で同士の人二三の者に出會ひ、夫から京都に來て大石内藏之助どのへ舉動を伺がツて、密かに山科へ來て大石どのへ別れをして、尙御内意を承たまはつて、爰で元祿時代の旅裝束、半纏股引脚絆草鞋かけ、草鞋に足を踏かため、大小引布柄袋をかけ、笠一盞を携さへ、僅かば

かりの荷物を、振分にして悴の三太夫が肩にかけ、泊を重ねて江戸へ著き初まりは麴町へ参りまして、相摸屋武兵衛といふ宿屋へ泊りました、といふのは未吉良家が呉服橋にお住居ゆゑ、成べく其近傍といふんで斯いたしました、乃で喜兵衛は、己は按摩導引となつて吉良の屋敷へ近づかう、といふのは、柔術が能出来るからだ、乃で自分は頭を丸めて、而して按摩となつて最初は麴町から番町邊を廻つて、少し馴て本式に療治が出来るやうになつてから、吉良の屋敷へ近づかうと考へ、某日喜兵衛は相摸屋の女中に「喜、オイ」女「旦那さま何か御用で」喜「此處らに按摩の上手な方はないか」女「あります」喜「何處に」女「三丁目にございます」喜「何といふ人だ」女「ハイ、杉山流の先生でございますして小林道庵と仰しやる方で」喜「然うかい、では其人を呼んで貰ひたい」女「何うも忙がしいとかで其方はナカ」明てをりませんが、其人のお弟子に宜いのが幾人もございます」喜「夫ぢやア誰でも宜いから呼んでくれ」女「ハイ」暫く経て 女「今直に参ります」トタンに盲人でございまして、喜「ハイ今晚、お療治は此方でございますか」とやつて参りました肩を揉みながら世間話をして、喜「ナカ」結構ぢや」喜「未練でございます」喜「何歳になんなさる」喜「ハイ、二十五でございます」喜「ア、勿々何うも上手だ、爾は何といふ名だ」喜「私でございますか、私は良の市と申します」喜「ア、勿々上手だ、私は毎日今頃療

治をして貰ひたいが、何うか爾都合が宜れば毎日五六日來て療治してくれ」喜「有がたいとで、夫ア結構でございます」喜「ズツと肩から背中を揉まげまして、爾の腕で揉で腰のあたりを悉皆揉で、喜「旦那さま、按摩は如何でございます」喜「ヤ、腹は致さんでも宜い」喜「ヘ、有がたうございます」喜「何ほど遣はさう」喜「ヘ、四文で宜しうございます」之が縁となりまして良の市が毎日夜分になると参ります、終には極心やすくなつて喜兵衛は此良の市の口添で杉山流の弟子になり芳の市と云つて二三月稽古をしますと根が柔術で盡を心得て居るから直に一通りやるやうになりました、で毎日笛を吹いて呉服橋邊を往來し夫れとなく敵の様子を探らうといふ考へ大分其邊にお得意も出来、或日松永半六といふ旗本へ呼込まれた、松「何うも大抵の按摩は皆逃て己の處へ二度と來ない、爾は初めてのやうだが、己は強いのが好だが、強くやれるか」喜「ハイ、お氣に入ら入か入やせんか一つやつて見ませう」乃で旦那は胡坐をかいて、喜「サア肩からやつてくれ」喜「畏まりました」と行儀よく半六の脊中へ掴まつて撫下すところを見て、松「爾は勿々上手だな」喜「未日が浅くいたして碌な療治は出来ません」夫から芳の市はウンと力を入れて、柔術の呼吸と杉山流の揉かたを用ひて漸々急所へ來る、喜「如何でございます」此くらゐで「松「豪い、今まで爾のやうに、本盡へグイと指のかゝるものはない、能効く」喜「あ

世辭を仰しやツちやア可ません」松「イヤ此ア感心する、チト強すぎる」考「では此で」松「丁度宜い、ア一宜い心もちだ」悉皆と採上げてしまふ 松「ウンア一宜い心もちだ……爾酒を飲むか」考「ホンの一合位」松「ぢちア酒を馳走じやう、丁度宜い某屋敷から到來をした酒だ、此ア灘の一本生だ、サア飲ッしやい」考「有がたいことで」松「酒を飲から雲丹は食らう」考「エー廣大なもので」松「此は長州侯から頂戴をしたんだ」考「ハア、然やうでございますか、萩の太守から」松「イヤ、留守居から頂戴をしたのだが、萩侯へも上ツてゐる、此は下の關から著した雲丹だ」考「ハイ」と頂戴をして御酒を一口味はツて、考「ア、斯やうな美味いものを頂戴したことはございせん」松「失禮だが爾は武家だな」考「ハイ」松「普通の按摩さんではないと思ツて揉で貰つた、第一爾の言葉の切目正しきところ、其起居の有さま、何うしても武士と見た、何うだ」考「何うも恐れ入りました」松「何處かの浪人かい」考「ハイ、主家が断絶いたしましたして、何も生活の道もござらんによツて、年は老て何といたすことも出来ず、是非なく思立まして、斯のごとく按摩をいたして、漸う細き煙を立てる次第でござる」松「然うだらう、花主を世話をしてやるから毎晩己のところへ來なされるやうに」松「ハイ、有がたう存じます」乃で松永半六殿の世話で同町の萩原又は石原なんといふ花主も出來、松永には彼此れ二月ばかり参りました、或晩のこと。

松「芳の市どの」考「ハイ」松「爾は播州赤穂の浪人だとか言たねエ」考「ヘエ」松「イヤ確かに私は然う思ツた、初めての晩に主家断絶のため浪人となつたとされたが、其屋敷を段々と考へたが浅野内匠頭さまが今年の三月十四日殿中の手違ひ、彼れ以來に断絶をした、屋敷といふものもないし、其前なら水谷出羽守どのだ、デ何うも容子を見ると、私は然うと思ふが何うだ、隠しなさらんが宜い、身共などは眞に身分は低いもので、爾もモウ此まで出入ツてゐるから、知てゐなされるだらうが小人目付だ、然れども上々のことも能承まはツて居るから刃傷の當時のとも伺ツてゐる、公儀においても赤穂の浅野家は潰したくないと餘ほど御思慮があつた、といふ事は我々共の耳にまで入ツてゐる、が、何うだ」考「然やうに明らかに見抜になつた以上は、何を包みませう、私は播州赤穂の浪人村松喜兵衛といふ者でござる」松「ウム、何を勤めてゐなすつた」考「廣間番を」松「ハア、然うと思ツた、決して私が爾のことを播州赤穂の浪人だなんといふことは誰にも言んから矢ッ張按摩芳の市で出入をしてゐなされ失禮ながら何を困ツたことがあつたら相談をしなされ」考「御親切の段有難う存じます」松「夫で爾一人かい」考「伴が一人ござります」松「ホウ、其伴は何處だ」考「廿五歳」松「何をしてゐる」考「手前は按摩を伴は薪割渡世をしてをります」松「ヤレ〜」氣の毒だ、御親子の心もちは能分ツた、薪は當家でも割て貰はう、

此近所の薪問屋で随分薪など割せるところも有うから、此も世話をしてやらう」考有がたいこ
 とで「此松永さんは御譜代、即ち先祖は三河から家康公の御供をして江戸表に参り、此菊河町
 の町屋敷を拜領して、代々此に住居でも勤めなされる眞の江戸ッ子、弱きを助け強きに向はう
 といふ御氣性、何か仔細があつて村松父子が、斯る業をしてゐるに違ひない、と察しあつて
 深く勧つて下さる、或晩のこと、松本所松坂町の吉良上野介どの、爾の主人の家に取ちやア、
 大變に怨みのある家だが、彼の家敷の家中で療治をして貰ひたいといふ者があるが、何うだ行
 なさるか」言れて渡りに船の思ひ、飛立つ胸をおし鎮め、考ハ、ア私が行ますか」松爾の噂を
 したら、然ういふ上手なのなら、是非一度療治をして貰ひたいといふ、彼の屋敷はナカ／＼出
 入が殿しいが、私から然う言ば家中の者ばかりでなく、事によれば御殿へも出られるかも知ん
 よ」考へエ何ういふ方のところへ参ります」松夫はな、吉良の家來の笠原長太郎といふ、此
 ア書も能認し、劍術も出来るナカ／＼面白い人物だ、モウ散々ばら苦勞をして吉良家へ入つた
 者だ、此に話しをしたら何うか夫を頼みたいといふから、私から手紙を添てやるから行ッしや
 い」そこで喜兵衛の芳の市は、其翌日松永の手紙を持って渡りに船と、本所松坂町の吉良上野介
 のお屋敷の裏門へ來ると、通つて構はんといふ、笠原長太郎は吉良家の利者でございます、夫

から笠原長太郎のお小屋に参りまして、考御免下さい」下女が、亥「ハイ」考此を何卒お上下さ
 いまするやうに」夫を持って奥へ入り、暫らく經て、亥「此方へお入んなさい」篋「イヤ此方へ通ら
 ヲしやい、松永半六どのからの書面で、大層療治が上手だといふことだ私は始終身體が凝るの
 で、療治をしないと一日もゐられんといふ、是も一つの病ひであらう」考初めてお目にかかり
 ます芳の市と申す者で」茶を下さる、療治をさせる、笠原が氣に入りまして此を縁として毎日
 くる、何うか御殿へ出たいと思ふが、扱御殿へは少とも入れん、其うちに奥山大學、粕谷
 平馬、清水一角、小林平八郎なんといふ者のところへ始終呼れて療治をしてゐる、夫となく小
 林の腕前を探り、清水一角の容子を見、笠原長太郎の武藝を探る、其うちに赤穂浪人といふこ
 とを先方で知た容子で、此村松喜兵衛入道も、扱は感づかれたと思ふから、自分も萬一の時の
 用心と、紙巻留の木刀を帯して其木刀へ書て彫りましたのが
 人切らば我も切れる夫ゆゑに

役にも立ぬ木片帯すなり

と彫刻たのを、毎も療治をする時は傍らへ置、羽織の上へ載ておく、夫を其各自デロリと見て
 此を敵方の者と知て一同が療治をさして置ました、互ひに知つ、一言も發せず出入を許して置

ましたのも吉良の附人の面々、皆心得たものでございませぬ、始終入ッてをる、此方は伴の村松三太夫、是も松永半六どの、お影で忽ち花主も出来て毎日薪割を擔いで歩く、或日相生町に來ると向から商人體の品格の宜い老人が來て往還だが、其老人は薪割夫を振返ッて「老、モシモシ薪割家さん」「三、ハイ」老、「一寸お伺がひ申したいが……」道でも訊のかと思ッて、「三、ハイ、何か御用でございませぬか」「老、間違ひましたらお謝をしますが、失禮ながら貴方は、村松喜兵衛殿の御子息ではございませぬか」「三、エッ」老、「イヤ私は何うも然う思ふが、若間違ッたらお謝をいたす」「三、失禮ながら貴君は誰人でござる」「老、私は鑛屋宗伴といふ者だ」「三、ヘエ、鑛屋宗伴と仰しやるは」「老、只鑛屋宗伴と申したんでは貴君にはお分りあるまい、併し私は以前赤穂の藩中に二百石を頂戴いたしお馬廻りを勤めてをッた服部宇内、貴君の親公の喜兵衛どのとは至ッて入魂にいたした者でござる」「三、ヘエ服部がござるか」「老、當今のところにては、下谷の池の端仲町で古道具屋をいたしてをります」「三、ハ、ア、然やうでござりましたか」「老、フワン扱々何うも不思議なところでお目にかゝるものでございませぬ……失禮ながら貴君は只今此方にお住居でござるか」「三、ヘエ、御承知の通り主家斷絶、今は何にも取つくべき道もござらん、斯のごとく薪を割て今日を漸く過しをる次第でございませぬ」「老、エー父さんは何をしてお出なさいませぬ

す」「三、只今父は按摩導引をして今日を過してをります」「老、ハア然やうでござるか飛だ失禮を申し上たが、此方は池の端仲町で鑛屋宗伴と申して、當今は道具屋をしてをるから、是非も尋ねを願ひたい」爰で其鑛屋宗伴、村松三太夫に別れました、歸る途に段々考へた、先年御恩をうけた主家、今村松の容子を見ると、彼様な風をして此邊を歩行れる、父喜兵衛は按摩導引、作の三太夫は彼の有様、此ア何うも確に吉良殿の容子を伺ふに違ひない、ア一扱々今我は斯る町人の身の上とはなッてをるが、主家の御恩、御城代のお情け、ア一人間として御恩を返さねばならぬ、と胸に思ひながら、本所の割下水へかゝッて來ると八百屋に出會ッた、夫れが勝田新左衛門だ、是れはと思ッて言葉をかけやうとするうち、新左衛門は顔を横に向てズツと行く、ハテナと思ッた、乃で不思議を打て松坂町の吉良様の裏門の前を通ると、小春屋治兵衛といふ蕎麥屋があるから、蕎麥を一杯食ふと立寄ると、原總右衛門が帳場へ坐ッてゐる、乃で此宇内心を翻へして、此ア一ツ自分も吉良さまのお屋敷へ入ッて、何かの手掛りを得て、御城代を始め皆様へお知せ申して、先年受たる君恩の萬分の一を報じたいといふ決心を致しました。

一體此鑛屋宗伴といふは、服部宇内と申して二百石の武士、武藝も一通り心得てをる、ところが何ういふものか性來道具が大好、第一目が開眼してをりますので、乃で三兩で買ました物が十

三兩になる、サア何うも面白、掘出し物をして利得る、漸々面白く、遂にはチヨイ／＼買ては他人に賣却ふ、其利益が一年に五十兩ある、某年は六七十兩くらゐづゝ残る、サア工面が宜い、ところが武家さまといふは眞にお氣の毒なもので、昔は随分御身分のあるお方でも一ばいの家計、其處へゆけば町人は直土藏を建る、昔は五百石乃至八百石取ても、土藏なんぞ持てゐらツしやる方は多くございません、夫ア御家人は格別、陪臣となると其様な悠長なことはな、ところが服部宇内、漸々工面が宜なるから、御新姐にも宜い生計をさせる、誰いふとなく「彼奴は憎い奴、主君から二百石頂戴をして馬廻りをする者が、商人同やうの眞似をいたし今年百兩、當年は二百兩利得つたなんと、何うも怪しからんこと、憎い奴でござる、」サア然ういふとを詰所や何かでいふのを、城代大石内藏之助どの、お耳に入つて、家中一同の者が憎むやうでは當人の爲にならんから、一日服部宇内を大石どのがお呼になつて、夫「扱お手前は屠古道具が好で大部お利得なつたさうだ、然やうな事を承まはつたが如何」宇「へ」大「家中一同の者も悪く申す、甚だ宜くない、殊に武士は武士の法があつて、今日主君のお祿を頂く者が、金銀の事にばかり目をくれると、卒といふ時に御奉公が勤まらん、殊に又商ひなどに心を入ると、後には主君の御用が勤まらん、始終は浪人ともなる、依て以來は止めなさい」服「へ

エ「大」此は傳へ聞話してであるが藤堂家のことを御存知か「宇内赤面して、宇一向存じ申さん」大「然らばお話しいたさう」藤堂家三代目の君に對して、お側より、某浪人より刀を五兩で求めて献上をする、夫を研上てみると郷の義弘、で大守は以てのほかか、お喜びであると、お側が「君には結構な掘出し物をお求めあそばした」と申し上る、君「ナニ、掘出し物とは何ぞや」「恐れながら道具屋の符牒で、安く買出して大金になる品を、掘出し物と申します」君「何さま初めて承まはつた然らば余は掘出し物を求めたのか、ハ、ア珍らしいことを承まはつた」サア初めて右やうなことをお聞あそばした事ゆゑ殿中にて御同席の方に、藤近頭余は掘出し物をした、各々方には掘出し物がござらうか「ハ、ア、藤堂家、掘出し物とは何のことござる」藤「此は道具屋の符牒で、安く品を求めて高金の價あるもの此を掘出し者と申す」ハ、ア然やうでござるか「大層此が殿中の評判になつた然るに藤堂家の大守は、若殿、十六歳で大學頭と仰しやるお方を召れて、藤其方に見せる物がある」と彼義弘の刀をお見せ遊ばした、此時大學頭どのが拜見すると郷の義弘だから、大「此は結構なもの郷の義弘でござるな」藤「然やうや」大「此をお求めになりましたか」藤「此は余が掘出したのぢや」大「お父上に伺ひまするが井の中よりでも此は掘出されたのでござるか」藤「イヤ、然やうではない、大名でも下々の事情に通

せんければ成んものぢや、其方は未知まいが、掘出し物といふのは道具屋どもの符牒で、直段を安く求めて高金になる品を、掘出しものといふのぢや」若殿眞赤になつて、大「初めて承たまはる、お父上御免」と御前を立て、御自分のお部屋へお歸りあそばして、刀を賣た浪人を召出されて、夫から買つて差上げたる家來を召れ、大「借其方こと先達て刀を賣たるに相違ないか」浪人者は、眞に恥しきことなれども金に窮し據どころなく賣拂ひました」大「作は誰と心得て賣た」浪別に誰の作と心得ず賣渡しました」大「其刀は研上てみれば郷の義弘ぢや」浪「エ、ッ」浪人おどろく、大「併しながら其方も知ずして賣り、又知ずして求めたことゆゑ、仔細はなきやうなれど、夫は商人のいたすところ、三十有餘萬石の國主たるもの、浪人者の刀を安く買つて此が高名になる次第ではない、價ある物を大金を出して求めるがゆゑに家の寶となる、此によつて其方に金子三百兩遣はす」浪人吃驚いたして、浪「ハア有がたいことござる」大「就て其方、其金をもつて能身を立て生涯を送れ」涙を流して浪人立去ました、其跡で周旋をした家來を召て大「其方如何して然やうな事を取計らう、小身ながら主人より祿を受ける者が安く物を買つて掘出しものと申すは甚だ卑しき心得、武士の本心を失ふもの、掘出し物などといふ事を其方が、何で父上に申し上た、以來は斯やうな事は相成らんぞ、此度は其方の不都合をもつて閉門を申し

つける」此事を父和泉守どのがお聞あそばして、ア、十六歳の俸の申すこと初めて感心した、面目ない、夫とは知す殿中にて同席へ吹聴をいたせしは、扱もく面目ない、と遂にお側より掘出し物と申し上ました者に長のお暇になる、夫より若殿は御家中一統をお集めになつて、御教訓あそばして、後に此お方は御成人あそばして、天下の四君子と稱へられ、譽れ高い大學頭と申すは此お方である、大「此事などが宜き武士の心得ぢや、以來は必らず、品物を求めて利を得て、此を喜ぶなどといふ、卑しき心を持んやう、宇内どのもお慎しみなされて宜しからう、強てなされると遂に役目を疎そかに相成り、先祖代々の家を失なひ、御當家を御浪人をするやうな事になる、必らずくお慎しみあつて宜しからう、お心得までに申す」服部宇内は恐れ入て、夫からやらない、半年ばかり経て江戸へ詰る、或時芝へ行て通り蒐つたのが日影町、或道具商の前を思はず覗と目についた物がある、城代内藏之助に意見されてからモウ半年も経ち、殊に江戸勤番だから内密でやつたら、誰にも知る氣遣はなからうと、既に其前を通り過たが引返して、立留つて見ますと小柄の良いのが、一本ある取て見ると正真正銘の後藤祐乘、何うしても三四十兩の價値のあるものだ、浪「何程ぢや」浪「百疋で一文も掛値のない處で」浪「十匁にマケては」浪「一文も引かせん」浪「チャア又參る」浪「モシ、」浪「旦那入ッしやい、口明ですからお

「マケ申しませう」此小柄を求め、自宅へ歸つて内々人に見せる、ところへ吉田忠左衛門が来て
 直「此ア良い小柄だ、此方が求めたいが」照「チト何うもお高い」直「高くとお宜しい」照「四十
 兩」直「宜しい」此様なとで味をべたから其年は遂に利得高が百五十兩、サア誰いふとなく此が
 再び大石内藏之助へ聞えましたから、大ヤ、切々不都合な奴、彼れほど意見をしたら、用ひん
 といふはア「困つた奴」と乃で大石が今一度意見をせよとやらう、と一つ工風をなされて、御膳
 所へ申し付て二百人前の料理、二汁五菜と定め、夫から家中の者へ觸を出して、今年服部宇内
 が大分金を利得ましたるによつて、各々方へお振舞を明日も廣間でいたすから、十分に食らッ
 しやい、サア家中の者が、憎い奴だ、彼が金が出来ると臆病になつて主君の役に立ない、思
 入れ食てやれ、腹一ぱい食てやれとサア各自に當日は来て、△宇内が度々利得た馳走だから食
 へ食へ一宇内其席に坐つてゐると、△宇内どの御馳走でござる」何だか宇内には少とも分らな
 い、いよく一同が引取た跡で内藏之助が、△切宇内どの、此振舞は貴君が入費を拂つて下さ
 い」アツと宇内驚ろく、△先頃意見をしたらが未だお用ひなく、江戸表勤番中大分金を利得られ
 た相だから、夫にて拂はッしやい」照「ハッ」△能考へなさい、其許が斯ほど御馳走をして、
 口には有がたうと只一語言たさりで、彼の通り悪口を申し、武士の癖に金を利得るなんて、思

入れ食てやれ」と申す、自分で入費を出して能言れんのだから、武士の金利得は甚だ宜
 ない、以來は必らず共になさらんが宜ぞ」照「ハア恐れ入ました」實に御意見身にしみ、御殿
 を退つた、然れども人間ついた癖はナカク改らん、又一年ばかり過ると初まつて、トウ
 播州赤穂を夜逃をした、江戸へ來つて髪を剃て、池の端仲町へ住居して、鑛屋宗伴と改名して
 今日五十歳、初めて後悔した、ア大石殿が仰しやつたことは間違ひない、浪人となつて氣は
 楽さうだが、金銀は皆浮ものだ、何時支消てしまつたか分らない、二百石は子々孫々安樂に暮
 せる、斯やうに町人になり下つては、先祖へ不孝、君に不忠、眞に子孫は不憫の至り、大石ど
 の、仰しやつた事は今思ひあたる、此上は何ぞ大石どのについて、聊かたりとも御主君への御
 恩報じをしたいと、一心に思ひ詰てをりました。
 然るところ元祿十四年三月淺野家御改易の大變を承まはり、吃驚して御恩報じは此時なり、早
 速播州赤穂へ乗込んで御城代にお目通りをいたし、籠城をなさるなら、城を枕に打死の列に加
 はらんと思ひ詰てゐるうち、お城も明渡したといふことを聞て、力を落して宇内、殘念ながら
 日を送つてゐるうちに、圓らず村松三太夫に出會ひ、夫から勝田新左衛門の姿を見、又小春屋
 治兵衛といふ、蕎麥屋の主人が原總右衛門だから、斯赤穂浪士の方々が姿を變て本所方を徘徊さ